

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

—阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う発掘調査—

平成9年(1997年)度

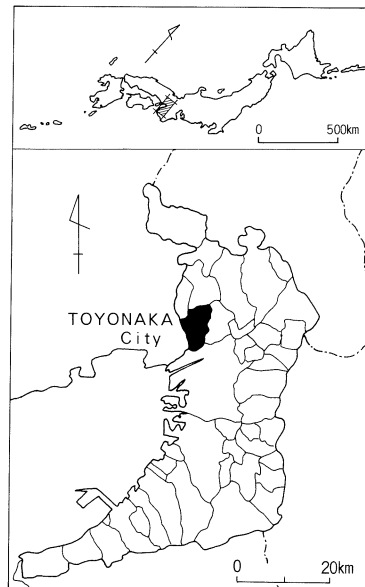
平成10年(1998年)3月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

—阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う発掘調査—

平成9年(1997年)度



平成10年(1998年)3月

豊中市教育委員会

序 文

阪神・淡路の地域に大きな被害をもたらしました兵庫県南部沖地震から３年の月日が過ぎました。この３年の間に、豊中は着実に復興を進め、震災の傷跡は街から少しずつ消えつつあります。しかし、復興の完成はいまだ成らず、多くの生命と財産が失われたあの日は、まだ過去のものではありません。

当市では、市民生活の安全と安定を考え復興事業を進めておりますが、その一方で震災の影響で失われた、あるいは失われつつある文化財を無視するわけにはいきません。先人から受け継いだふるさとの歴史と文化を守り、それらを活かした「まちづくり」を模索していく必要があります。

本書が報告する調査成果は、そうした観点から国ならびに大阪府の補助を受けて平成９年度事業として豊中市が実施した、阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要です。本年度は、小曾根遺跡（今西氏屋敷）・新免遺跡・穂積遺跡の３遺跡４地点で調査を行いました。今西氏屋敷は中世の目代屋敷として知られ、大阪府指定文化財に指定されています。穂積遺跡も、古くは「穂積式」として弥生土器の指標となり、最近では連鑄式銅鏃を出土するなど全国的に著名な遺跡です。今回の調査でも、新たな資料と知見がこれらの遺跡につけ加わり、その重要性がますます認識されるに至りました。

調査の実施にあたっては、土地所有者・工事関係者・近隣の住民の方々には、調査の重要性に対し深いご理解と多大なご協力を賜りました。篤くお礼申し上げます。また、大阪府ならびに関係諸機関には、ご指導とご配慮をいただきました。心から感謝いたしますと同時に、今後も当市文化財行政にますますのご理解とご支援をお願いする次第です。

最後になりましたが、先の震災でなくなられた方々のご冥福をと、被災された方々の一日でも早い復興を心からお祈り申し上げます。

平成 10 年 (1998 年) 3 月 31 日

豊中市教育委員会
教育長 栗原 有史

例 言

1. 本書は、豊中市教育委員会が平成9年度阪神淡路大震災復旧・復興事業に関する国庫補助事業（総額24,000,000円、国庫50%、府費25%、市費25%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査概要を報告し、あわせて平成8年度事業として行った小曾根遺跡第22次調査の発掘調査概要の報告を行うものとする。
2. 本年度事業は、小曾根遺跡（第22次）・新免遺跡（第47次）・穂積遺跡（第22次・第23次）について、平成9年4月1日から平成10年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。
3. 発掘調査は、本市教育委員会社会教育課文化財保護係が実施した。
4. 本書のうち、第Ⅰ章・第Ⅴ章は清家 章、第Ⅱ章は橋田正徳、第Ⅲ章は川村慎也、第Ⅳ章は清水 篤が執筆・編集し、全体の編集は清家が行った。
5. 各挿図に掲載した方位表記のうち、M. N. は磁北、Nは真北を、また表記のないものは、国土座標系に基づく座標北を示す。
6. 挿図・本文中の土色表記の基準は、『新版標準土色帖 1994年版』に基づく。
7. 各挿図に掲載した座標は、国土座標第Ⅵ系に基づく。なお、基準点測量については、震災後の改測データを一部採用して行っているため、座標値は震災以前と異なる場合がある。
8. 遺物実測図のなかで、番号の後ろに記号をつけることで遺物の種類を区別した。その記号の意味するところは以下の通りである。なお、土師器・須恵器には記号を付さず、須恵器は断面を黒塗りする事で区別した。(K)・・・黒色土器、(G)・・・瓦器、(J)・・・磁器。
9. 各調査区の土地所有者、施工業者ならびに近隣住民の方々には、文化財保護に対して深いご理解とご協力をいただきました。併せてここに明記し、感謝いたします。

表 発掘調査一覧

遺跡名	(次数)	調 査 地	調査面積	担当者	調査期間
小曾根遺跡	第22次	浜1丁目400-1、 400-2	22.5 (m ²)	橋田正徳	1997年2月3日 ～3月31日
新免遺跡	第47次	玉井町4丁目9-2	46.9	橋田正徳 川村慎也	1997年4月14日 ～5月6日
穂積遺跡	第22次	服部西町1丁目849-1	171	清水 篤	1997年5月6日 ～6月27日
穂積遺跡	第23次	服部元町1丁目71-1	170	清家 章	1997年5月7日 ～6月24日

目 次

第Ⅰ章 位置と環境	1
第Ⅱ章 小曾根遺跡第22次調査の概要	
1. 調査の経緯	5
2. 調査の成果	6
(1) 基本層序 (2) 第1期の遺構 (3) 第2期の遺構	
(4) 第3期の遺構 (5) 第4期の遺構 (6) 第5期の遺構	
3. まとめ	26
第Ⅲ章 新免遺跡第47次調査の概要	
1. 調査の経緯	29
2. 位置と環境	29
3. 調査の成果	30
(1) 基本層序 (2) 検出した遺構 (3) 出土遺物	
4. まとめ	32
第Ⅳ章 穂積遺跡第22次調査の概要	
1. 調査の経緯	33
2. 調査の成果	33
(1) 基本層序 (2) 検出した遺構 (3) 出土遺物	
3. まとめ	40
第Ⅴ章 穂積遺跡第23次調査の概要	
1. 調査の経緯	41
2. 既往の調査	41
3. 調査の成果	41
(1) 基本層序 (2) 検出した遺構 (3) 出土遺物	
4. まとめ	48

挿 図 目 次

第Ⅰ章 位置と環境

第1図 市内遺跡分布図	3	第2図 調査地点と周辺地形	4
-------------	---	---------------	---

第Ⅱ章 小曾根遺跡第22次調査の概要

第3図 調査範囲図	5	第16図 瓦敷き1・瓦組2平面図	17
第4図 調査地位置図	5	第17図 集石1平面・立面図	18
第5図 土間断面図	7	第18図 カマド5～7平面図	19
第6図 第1期の遺構	8	第19図 カマド9～11平面・断面図	19
第7図 堀1、区画溝1・2断面図	9	第20図 洗い場2平面図	20
第8図 第2期の遺構	11・12	第21図 風呂釜2・風呂場1平面・立面図	21
第9図 瓦組1平面・立面図	13	第22図 風呂場1下層平面・立面図	21
第10図 埋納遺構平面・立面図	13	第23図 第4期の遺構	22
第11図 カマド1～4平面図	14	第24図 土坑12・13平面・断面図	23
第12図 風呂釜1平面・立面図	14	第25図 風呂釜3平面・立面図	24
第13図 洗い場1平面・立面図	15	第26図 排水施設平面・立面図	25
第14図 第3期の遺構	16	第27図 第5期の遺構	27・28
第15図 間仕切り1平面図	17		

第Ⅲ章 新免遺跡第47次調査

第28図 調査範囲図	29	第31図 出土遺物1	31
第29図 調査地位置図	29	第32図 出土遺物2	32
第30図 調査区平面・断面図	30		

第Ⅳ章 穂積遺跡第22次調査

第33図 調査範囲図	33	第36図 出土遺物1	39
第34図 調査地位置図	33	第37図 出土遺物2	40
第35図 調査区平面・断面図	35・36		

第Ⅴ章 穂積遺跡第23次調査

第38図 調査範囲図	41	第41図 井戸2出土遺物2	46
第39図 調査区平面・断面図	43	第42図 溝2出土遺物	47
第40図 井戸2出土遺物1	45		

図 版 目 次

図版 1 小曾根遺跡第 22 次調査	(1) 調査区全景 (1～2 期) (2) 調査区全景 (4 期)
図版 2 小曾根遺跡 22 次調査	(1) カマド 1～4 (2) 洗い場 1
図版 3 小曾根遺跡 22 次調査	(1) 埋納遺構 (2) 瓦組 (雨落ち) 2 (3) 瓦組 (雨落ち) 2
図版 4 小曾根遺跡第 22 次調査	(1) 風呂釜 3 (2) 集水槽・風呂釜 3 (3) 瓦組 1
図版 5 新免遺跡第 47 次調査	(1) 調査区全景 (2) 出土遺物
図版 6 穂積遺跡第 22 次調査	(1) 調査区全景
図版 7 穂積遺跡第 22 次調査	(1) ピット 11 土器出土状況 (2) 溝 15 土器出土状況
図版 8 穂積遺跡第 22 次調査	(1) 溝 6 銅鏃出土状況 (2) 溝 6 断面
図版 9 穂積遺跡第 22 次調査	(1) 調査区北東端遺構完掘状況 (2) 木根痕 (?) 検出状況
図版 10 穂積遺跡第 22 次調査	(1) 出土遺物 1 (2) 出土遺物 2
図版 11 穂積遺跡第 22 次調査	(1) 出土遺物 3 (2) 出土遺物 4
図版 12 穂積遺跡第 22 次調査	(1) 出土遺物 5
図版 13 穂積遺跡第 22 次調査	(1) 出土遺物 6 (2) 出土遺物 7
図版 14 穂積遺跡第 23 次調査	(1) 東区全景 (2) 井戸 1 (3) 井戸 1 下駄出土状況

- 図版 15 穂積遺跡第 23 次調査
- (4) S P 127・128
(5) 土坑 1 土器出土状況
(1) 西区全景
(2) 溝 2
(3) 溝 2 土器出土状況
(4) 井戸 2
(5) 井戸 2 土層断面
- 図版 16 穂積遺跡第 23 次調査
- (1) 井戸 2 出土遺物 1
(2) 井戸 2 出土遺物 2
- 図版 17 穂積遺跡第 23 次調査
- (1) 井戸 2 出土遺物 3
(2) 井戸 2 出土遺物 4
- 図版 18 穂積遺跡第 23 次調査
- (1) 井戸 2 出土遺物 5
(2) 井戸 2 出土遺物 6
- 図版 19 穂積遺跡第 23 次調査
- (1) 井戸 2 出土遺物 7
- 図版 20 穂積遺跡第 23 次調査
- (1) 溝 2 出土遺物 1
- 図版 21 穂積遺跡第 23 次調査
- (1) 溝 2 出土遺物 2

第Ⅰ章 位置と環境

地理的環境 豊中市は、大阪府北西部に位置し、西は猪名川を介して兵庫県に接している。旧国の区分では摂津国豊島郡に属する。豊中市の地形は、北東部の千里丘陵部とそこから派生する中・低位段丘から構成される中部の通称豊中台地、さらにその西と南側に広がる猪名川などの沖積作用により形成された沖積平野とに分けることができる。今回調査を行った新免遺跡は豊中中部の台地上に、小曽根遺跡・穂積遺跡は豊中台地の南側に広がる沖積平野に位置している。

歴史的環境 豊中市には旧石器時代から人間が活動していたことが10点余りの出土した石器が示しているが、明確な遺構は検出されておらず、その詳細は明らかでない。縄文時代にはいると、豊中北部にある千里川の河岸段丘上に立地する内田遺跡・野畑遺跡・野畑春日町遺跡などで土壇墓などの遺構をとまって後期から晩期の土器が出土し、北部の丘陵地帯が縄文人の活動範囲に入っていたことが理解される。さらに、南部の沖積地においても、明確な遺構の存在を欠くものの、服部遺跡・穂積遺跡・原田遺跡などから少量の土器が出土し、こうした低地においても縄文人が活動を行っていたことが伺われる。

弥生時代にはいると、集落の数が急速に増加する。前期では沖積低地にある勝部遺跡や小曽根遺跡などで集落が展開され始める。勝部・小曽根遺跡では中期に入っても引き続き集落が営まれる。これらの遺跡に加え、豊中中部の台地上にもあらたに集落が展開され始める。新免遺跡や蛍池北遺跡である。さらに北部にある丘陵部の西端に位置する待兼山遺跡では、同時期の高地性集落が存在する可能性が示されている⁽¹⁾。

弥生時代後期にはいると、新免遺跡は一定の集落規模を維持するものの、小曽根遺跡の集落の動向は明らかでない。近年行われた19次調査では終末期に属する集落が、小曽根遺跡の北端で検出されているので、集落の場所が移動しているのかもしれない。これに関連するが、後期から終末期にかけて豊中では集落の数が増大し、これまで集落の存在が顕著でなかった穂積遺跡・服部遺跡・庄内遺跡などで集落が営まれるようになる。とくに、穂積遺跡・服部遺跡の集落規模は大きく、豊富な東西各地の搬入土器が指し示しているように、豊中台地下の東西交通路を媒介として集落が展開されたものと推定されている⁽²⁾。

しかし、こうした弥生時代後期～終末期の集落が連続して展開する古墳時代の集落は少ない。小曽根遺跡や利倉西遺跡などはそうした少ない例に属する遺跡である。新免遺跡・本町遺跡などで大きな集落が古墳時代に営まれるが、これは中期から後期を中心とした時代であって、弥生時代から継続して集落が存在しているわけではなさそうである。古墳時代中期から千里丘陵の桜井谷窯跡群で営まれた須恵器生産を背景にして、熊野田遺跡・内田遺跡・柴原遺跡などとともに、新たに集落が形成あるいは再編されたものと理解される。

古墳は、北部の丘陵上に待兼山古墳と御神山古墳が築かれる。中部の豊中台地でも、大石塚古

墳を端緒として桜塚古墳群が形成され始める。前2者に継続する古墳は今のところ見つからないのに対して、桜塚古墳群は中期になっても古墳築造は継続され、豊中だけでなく猪名川左岸を代表する古墳群となる。その数はかつて40基以上はあったとされるが、現在は5基を残すのみである。隆盛を誇った桜塚古墳群も、後期に入ると築造を停止する。その一方で、箕面川水系の東岸（池田市）では、中期には見られなかった大形の古墳が築造されるようになる。その代表的なものとして、全長約60mの池田二子山古墳と直径45mの円墳・鉢塚古墳がある。千里川流域では4つの後期古墳群が新たに形成される。まず、新免遺跡の集落の南側に、全長25mの帆立貝式古墳を代表とする比較的規模の大きな墳丘を有する新免古墳群がある。この古墳群は後期前半に築造を停止してしまうが、それに継続するかのようになり、新免宮山古墳群がその少し北側に、また、桜井谷窯跡群内に太鼓塚古墳群と春日町古墳群が形成される。これらの古墳群で営まれた古墳の数は少なく、猪名川右岸とは対照的である。群集墳が発達しないことも豊中の古墳時代の特徴の一つである。新免宮山・太鼓塚古墳群のいずれからも陶棺が出土しており、桜井谷窯跡群と関係が伺われる。その桜井谷窯跡群は古墳時代中期中葉から操業を開始し、古墳時代後期の最盛期をへて奈良時代まで窯が作られ続ける。現在は数基しか遺存していないが、かつては50基以上は存在したと伝えられる。

古代に入り、古墳築造が行われなくなると、代わって寺院が建築され始める。豊中では現在の豊中駅の東側に金寺廃寺があったとされ、塔の礎石や瓦が現在に伝わっている。また、この寺院と関係すると推測される大形掘立柱建物が本町遺跡において検出されている。また、蛍池北遺跡（宮の前遺跡）でも、大形建物が存在している。この地は、山陽道と能勢街道が交わる交通の要所であり、これら建物群は一般の集落ではなく、律令期の役所である可能性が指摘されている。また、曽根遺跡でも官衙あるいは豪族の居館と考えられる大形建物群が検出されている。

古代末から中世にはいと、沖積平野にある小曽根遺跡・島田遺跡・穂積遺跡でまとまった集落が展開され始める。ただ、その調査はいまだ断片的であり、これら中世村落の詳しい内容は、これからの調査に負うところが多い。

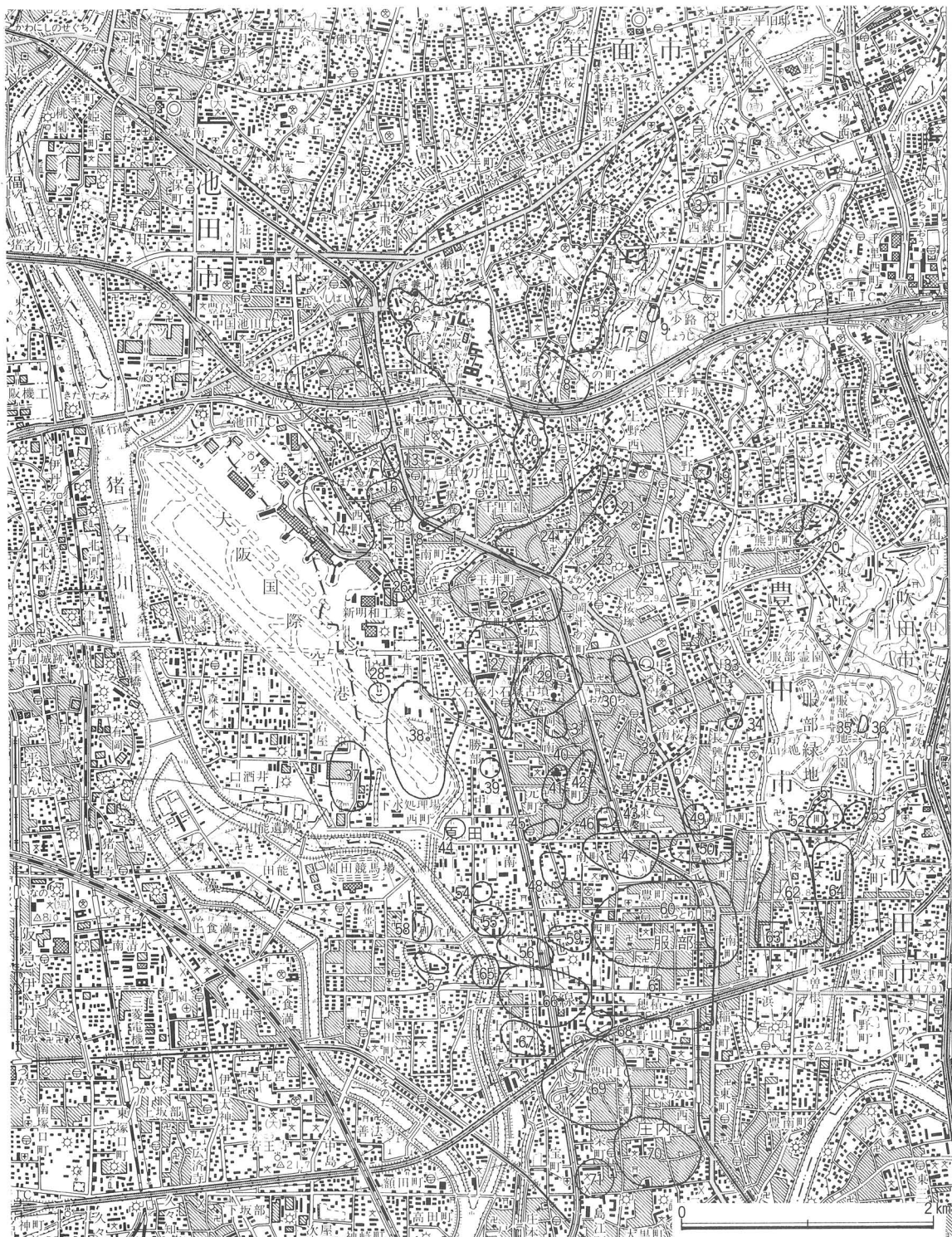
また、小曽根遺跡や穂積遺跡は、摂関家の荘園とされる範囲内にある。後に春日大社に寄進され、春日社から今西氏が目代として派遣され、屋敷を構えるようになる。今西氏は荘園解体後も目代から代官とその性格を変えながらも存続しつづける。

注)

(1) 大阪大学待兼山遺跡発掘調査団編 1984『待兼山遺跡』。

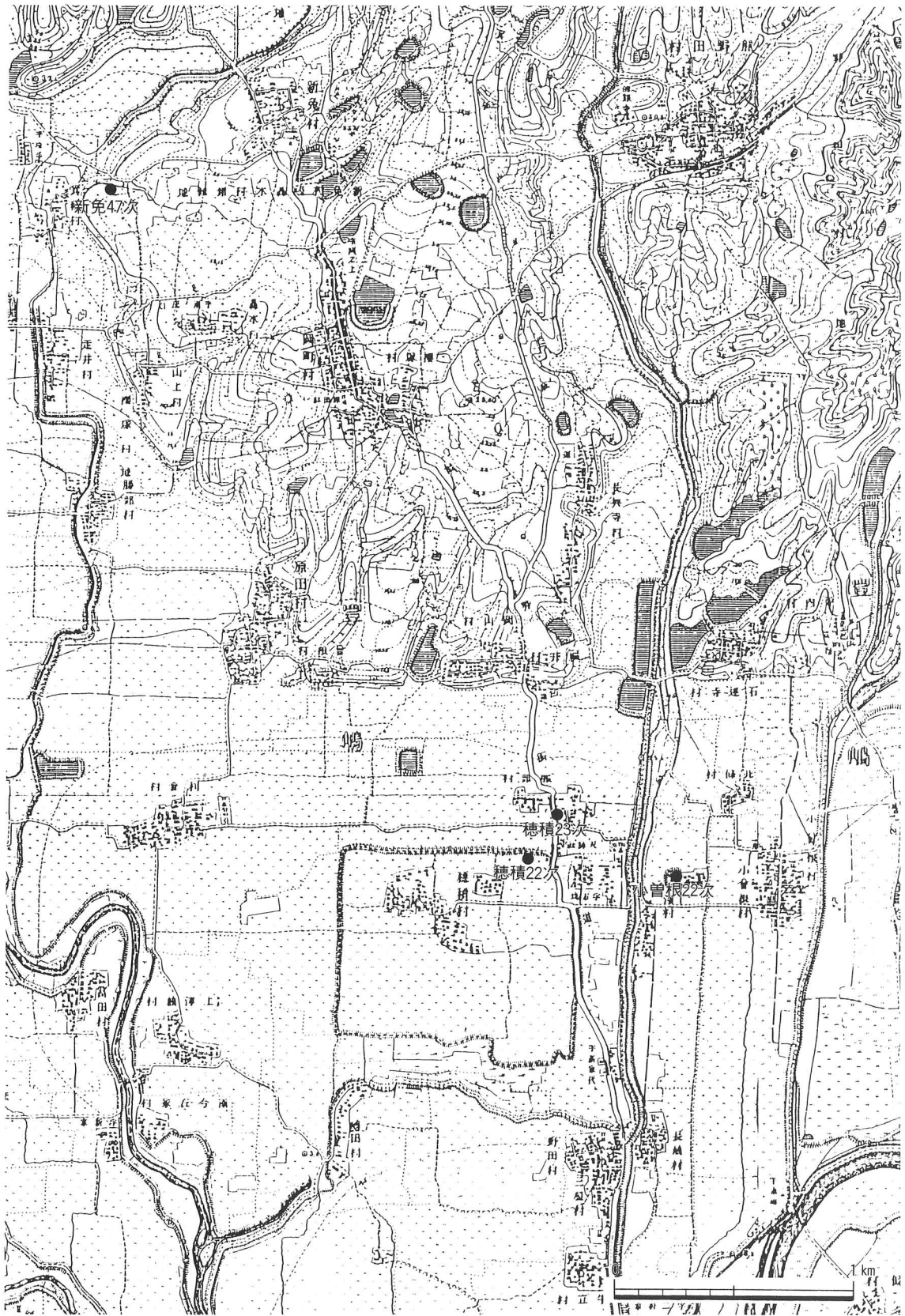
福永伸哉編 1988『待兼山遺跡Ⅱ』大阪大学埋蔵文化財調査委員会。

(2) 服部聡志 1995「大阪府豊中市における弥生時代後～終末期の集落と墓地―服部遺跡の調査から―」『みずほ』第17号。



- | | | | | | | |
|-------------|------------|----------------|-----------|------------|------------|---------------|
| 1. 大鼓塚古墳群 | 11. 桜井谷窯跡群 | 21. 金寺山廃寺 | 31. 岡町南遺跡 | 41. 原田遺跡 | 51. 若竹町遺跡 | 61. 穂積村囲堤 |
| 2. 野畑春日町古墳群 | 12. 蛭池北遺跡 | 22. 新免宮山古墳群 | 32. 桜塚古墳群 | 42. 曾根遺跡 | 52. 石連寺廃寺 | 62. 小曾根遺跡 |
| 3. 野畑遺跡 | 13. 蛭池東遺跡 | 23. 金寺山廃寺塔現律礎石 | 33. 下原窯跡群 | 43. 曾根東遺跡 | 53. 寺内遺跡 | 63. 南郷目代今西氏屋敷 |
| 4. 野畑春日町遺跡 | 14. 蛭池西遺跡 | 24. 本町遺跡 | 34. 長興寺遺跡 | 44. 原田中町遺跡 | 54. 利倉北遺跡 | 64. 北条遺跡 |
| 5. 少路遺跡 | 15. 蛭池遺跡 | 25. 新免遺跡 | 35. 梅塚古墳 | 45. 原田元町遺跡 | 55. 利倉遺跡 | 65. 上津島川床遺跡 |
| 6. 待兼山古墳 | 16. 麻田藩陣屋跡 | 26. 箕輪遺跡 | 36. 埴輪散布地 | 46. 埴輪窯跡 | 56. 利倉南遺跡 | 66. 上津島遺跡 |
| 7. 待兼山遺跡 | 17. 南刀根山遺跡 | 27. 山ノ上遺跡 | 37. 原田西遺跡 | 47. 豊島北遺跡 | 57. 利倉西遺跡 | 67. 上津島南遺跡 |
| 8. 内田遺跡 | 18. 御神山古墳 | 28. 走井遺跡 | 38. 勝部遺跡 | 48. 曾根南遺跡 | 58. 椎堂の前遺跡 | 68. 穂積ポンプ場遺跡 |
| 9. 桜井谷石器散布地 | 19. 上野遺跡 | 29. 岡町北遺跡 | 39. 勝部東遺跡 | 49. 城山遺跡 | 59. 服部西遺跡 | 69. 島田遺跡 |
| 10. 柴原遺跡 | 20. 熊野田遺跡 | 30. 岡町遺跡 | 40. 原田城跡 | 50. 服部遺跡 | 60. 穂積遺跡 | 70. 庄内遺跡 |
| | | | | | | 71. 島江遺跡 |

第1図 市内遺跡分布図

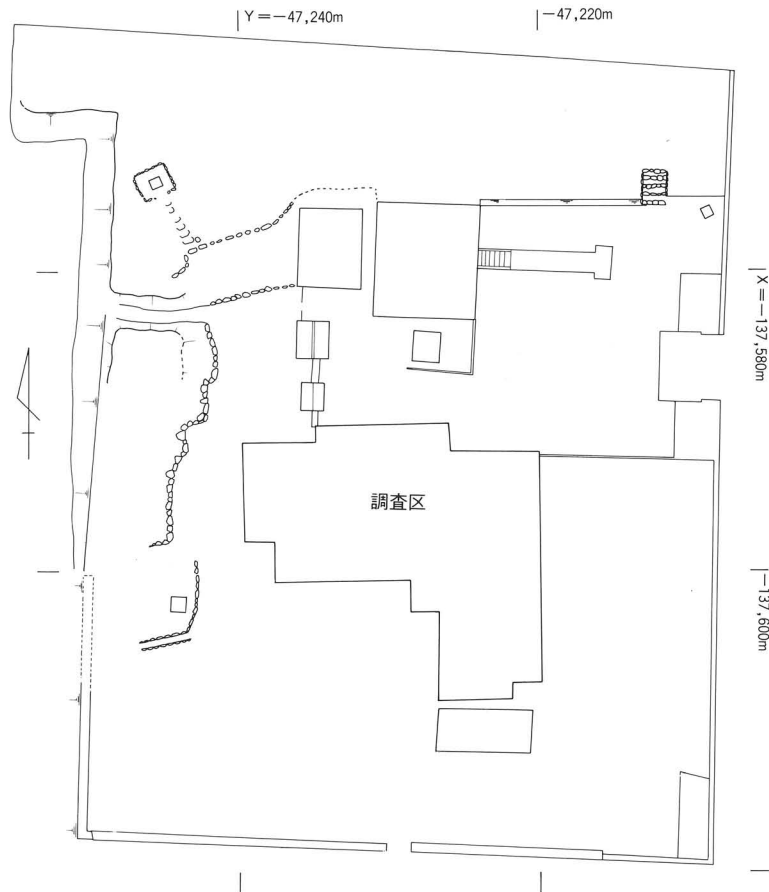


第2図 調査地点と周辺地形

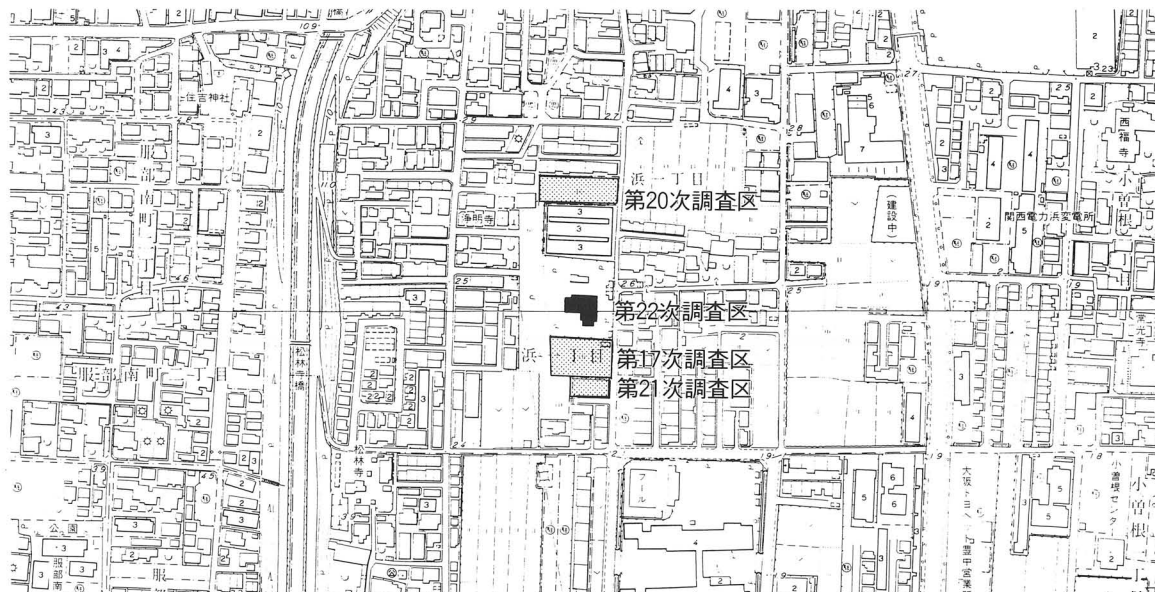
第Ⅱ章 小曽根遺跡第22次調査の概要

1. 調査の経緯

当調査区は、豊中市浜1丁目400-1、2に所在する。阪神・淡路大震災により全壊した今西家屋敷の解体修理に伴い、礎石の移動および基礎掘削の必要が生じた。これを受けて、数次にわたる協議が行われた結果、基礎設計にかかる状況把握を目的とする試掘調査を、屋敷に関する現況確認調査とあわせて行うことになった。なお、調査は平成9年(1996年)2月1日から3月31日までの日程で行われた。



第3図 調査範囲図(1:500)



第4図 調査地位置図(1:5000)

2. 調査の成果

(1) 基本層序

今西家周辺における基本層序については、平成7(1996)年度に報告を行った「第21次調査の概要」(以下、概要報告とする。)においてを述べた。

概要報告では宅地周辺の地形について、旧耕作土面の標高が第21次調査の南端で2.2m、第17次調査区の北端では2.4mをはかることから、本宅部分が微高地上に位置する可能性を考えた。また、今西家本宅部分の現地標高がT_P+3.2～3.4mをはかり、本宅南端と第17次調査区北端では約1mの高低差があることから、概要報告ではこの高低差を埋める土層として近世整地層(I₁層)を設定した。

今回の調査は、その目的上I₁層上面が調査の対象となったが、調査の結果I₁層が少なくとも現今西家建築前後の整地により2層に区分できること、また上層部分にあたる建築後の土層が三和土による整地や土間、水成層の堆積等からなる極めて複雑な細分層によって構成されていることが明らかになった。このため、I₁層を大別2層以上に区分し、さらに土層の細分を確定した上で基本層序の再定義を行う必要が生じたが、調査区における試掘調査では、トレンチの設定位置直下に堀1および区画溝が存在し、I₁層の全容を十分に把握できなかった。よって、本報告では調査対象範囲に限りI₁層上部について便宜上、主屋部分は5層に、台所部分では6層に区分することにした。以下、これら細分層について概要を述べる。

(i) 主屋部分の基本層序

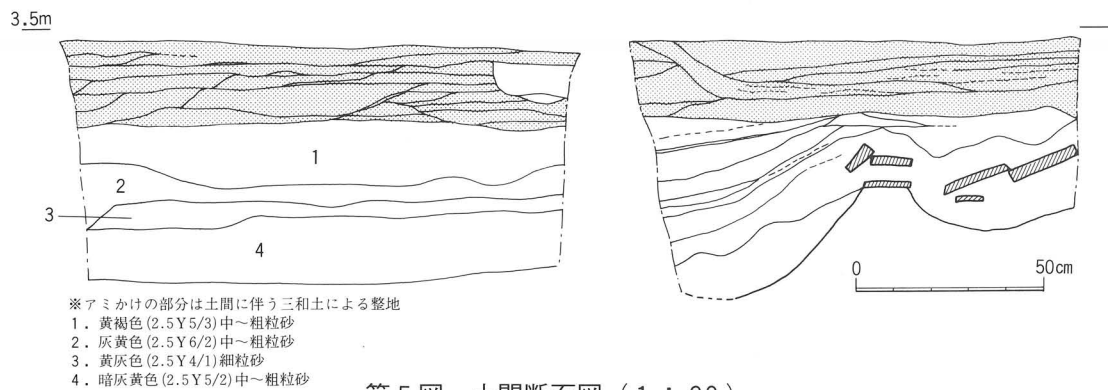
第1層 埃・塵からなる堆積層で層厚1～3cmをはかる。2層とともに図面による記録が困難なため、掘削時の確認にとどまる。同層上面における遺構は存在しないが、現今西家解体直前における最終面となることから、基本層の一つに含めることにした。

第2層 中～粗粒砂からなる層厚2～10cmの水成層である。建物中央付近における堆積が著しい。一部の遺構においても同層の堆積を確認していることから、鍵層の一つとして扱っている。同層は複数回の洪水により堆積した可能性があり、時期幅が想定できるものの、出土遺物から19世紀後半頃またはそれ以降の時期が考えられる。

第3層 三和土などからなる層厚2～3cmの整地層である。同層は主屋一帯に分布し、台所など土間が広がる範囲では認められない。出土遺物から18世紀末以降の時期が想定できる。

第4層 灰オリーブ色細粒砂からなる層厚5～10cmの耕作土層である。主屋付近を中心に堆積するが、台所にも分布する。旧今西家の火災から現今西家建築にかかる18世紀前半の極一時期に堆積した可能性が考えられる。同層と、今西家周辺の耕作土との関連については、現段階では不明である。

第5層 灰白色シルト～中粒砂などからなる土層で、上面から旧今西家関連の遺構が検出して



第5図 土間断面図(1:20)

いる。第5層以下の土層については掘削していないため、状況は明確ではない。

(ii) 台所周辺の基本層序

第1層 コンクリートによる土間で、現今西家における最終面として扱う。主屋第1層とは時期差があり、1970年代と考えられる。

第2～4層 三和土による土間である。それぞれの三和土は層厚0.5～3.0cmを一つの単位とする。土間の版築には数種類の三和土を使用したらしく、1単位の三和土が一つの遺構面を形成するものとは必ずしも言えず、三和土上面における生活面は把握しにくい。また、三和土の中には土間の改修、補修を目的とするものもあり、調査段階で生活面の復元はほぼ不可能と判断した。よって当報告では、調査で明確な遺構を確認した三和土上面を遺構面として扱い、遺構面間に堆積した三和土の単位群をまとめて2～4層に設定することにした。

第5層 主屋第4層に対応するが、主屋部分にくらべ堆積状況は明確ではない。

第6層 主屋第5層に対応するが、堆積土の状況は著しく異なるが、部分的な観察にとどまることから、概要は明確ではない。

以下、各層における遺構の展開について、1～5期に区分して報告する。このうち、第1期は旧今西家に関連する遺構となるが、以後の時期の遺構はすべて現今西家に関連し、本報告の主たる内容となる。

現今西家に関連する遺構は、主屋第1～4層および台所第1～5層の各層の上面で検出しているが、絵図などからも伺われるように幾度となく改変が加えられており、遺構(施設)の再利用も十分に考えられる。よって、各層上面で検出した遺構の時期は、今回設定した時期区分と必ずしも一致しない可能性がある。また、主屋と台所の関係については、今後に修正が生じる可能性が十分にある。

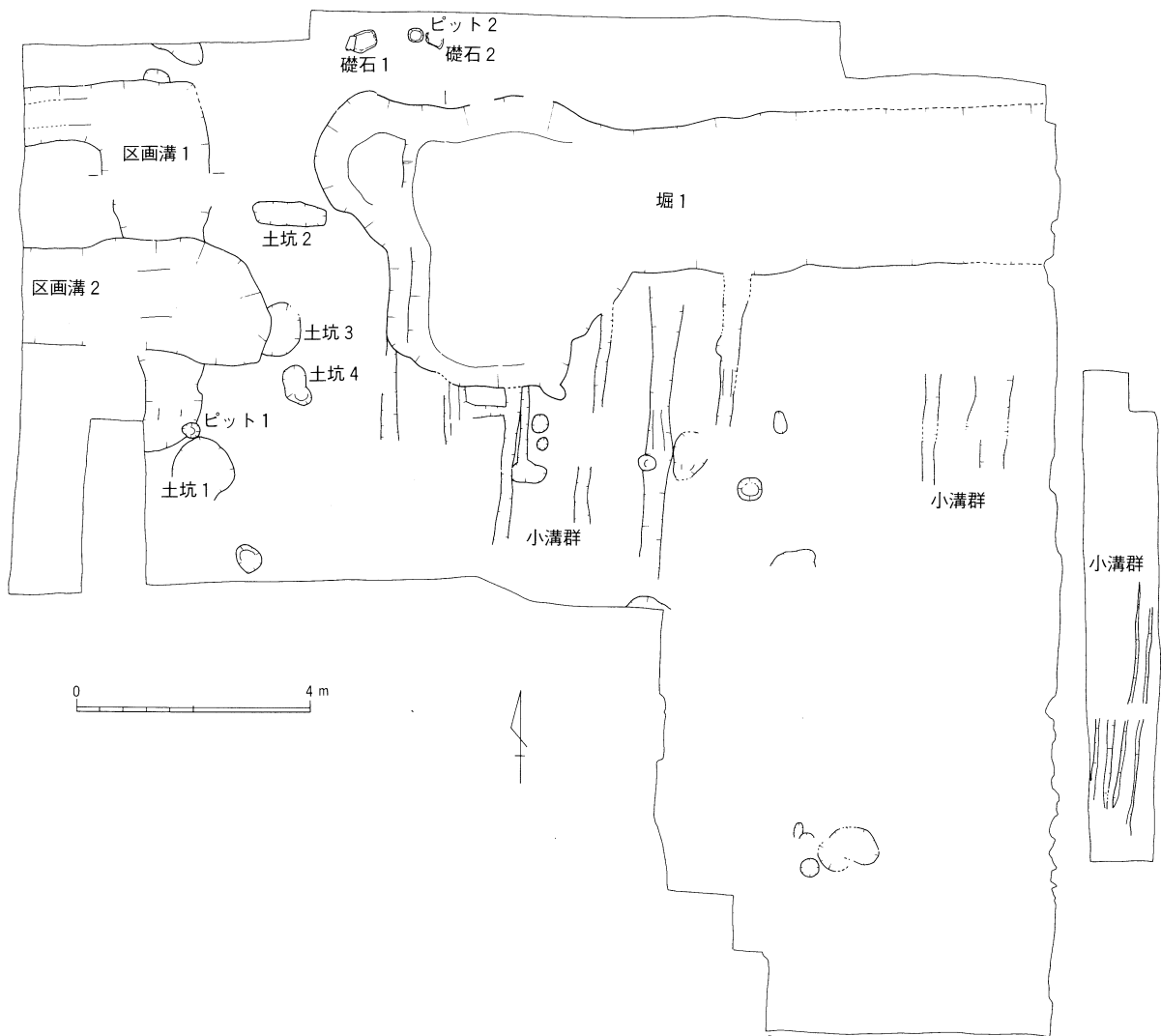
(2) 第1期の遺構

主屋第5層および台所第6層上面で検出した、旧今西家関連遺構がこの段階のものとなる。検出した遺構は、堀1条・区画溝2条・礎石・礎石抜取痕を含む土坑・ピットがある。ただし、これらの遺構については遺構面上における平面の把握にとどまる。

以下、主要な遺構について概要を述べる。

堀 1 堀 1 は主屋中央付近から東へ伸びる堀である。幅 2.5 m 前後、検出面からの深さ 0.8 m 前後をはかる。西側から 2.5 m のところで南側へ垂線状に伸びる掘出し部分がみとめられ、平面「字状のやや不自然な形態を呈する。また、堀 1 の西側は南側の掘出しの手前で段状に掘削されていることなどからみて、当初区画溝 1 に対応する配置で東西に掘削されたあと、「字状に再掘削し、規模を拡張した結果となる可能性が考えられる。

堀 1 の埋土はほぼ大別 3 層に区分できる。下層は炭、炭化した木材、焼けた壁土が主要な埋土であり、旧今西家の火災に伴う焼土整理による堆積と考えられる。中層は、灰白色シルトの塊状ブロックを含む中～粗粒砂で、堀の埋め戻しに伴う堆積が考えらる。上層は 2 層に区分でき、こ



第 6 図 第 1 期の遺構 (1 : 125)

のうち下層は主屋第4層に対応する。上層からは堀1の時期にはそぐわない新しい遺物が出土していることから、第4層を母材とする流入土と考えられる。

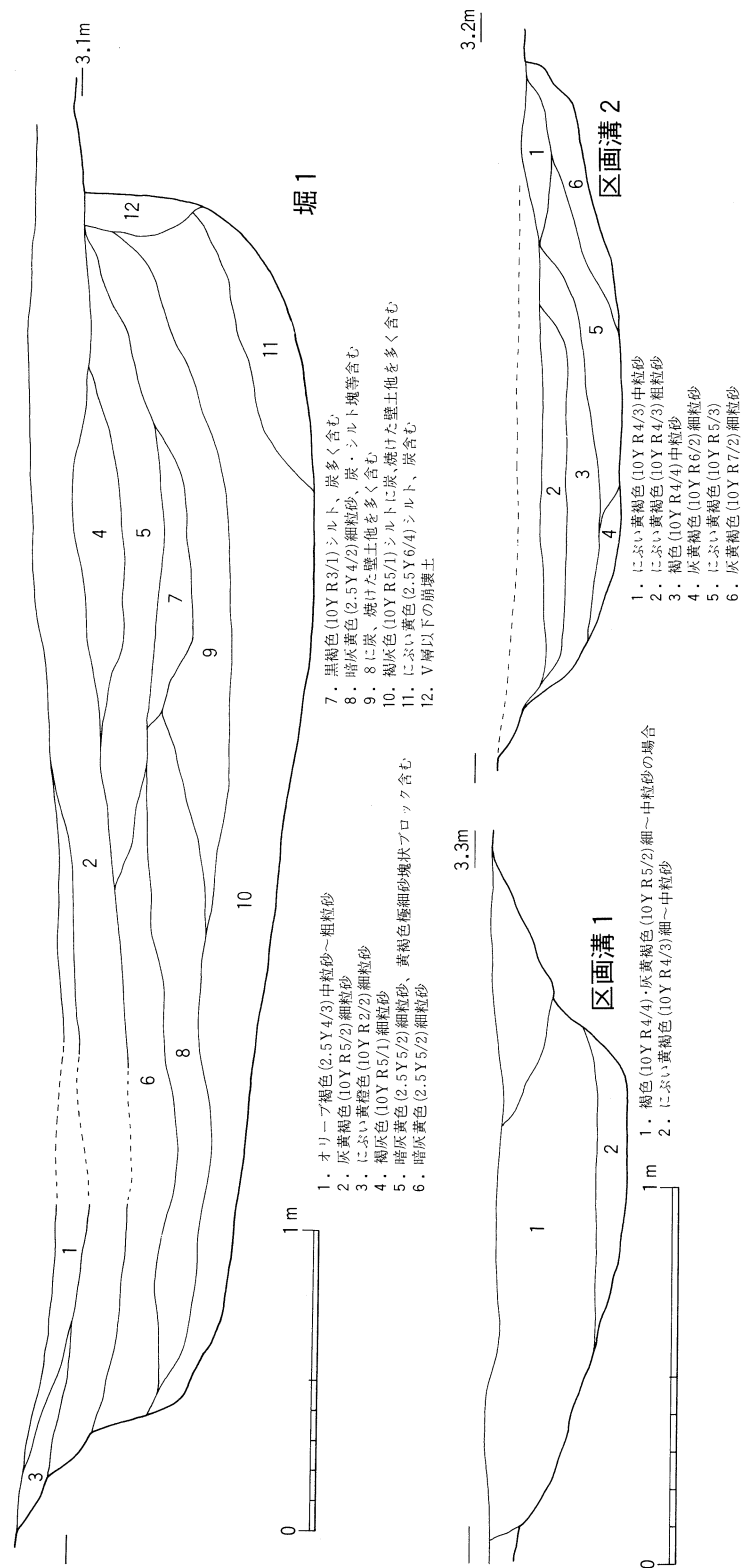
以上の埋土の堆積状況からみて、堀1は旧今西家の火災によりその機能を停止し、焼土整理により埋め戻されたと考えられる。しかし、この段階では堀は半分程度が埋め戻されたに過ぎない。その後、主屋第4層の堆積より窪地になった段階で、現今西家の建築が行われるが、この段階でも窪地のまま放置されたことが伺われる。

なお、堀1は第17次調査区で検出した内堀1から復元した屋敷地のほぼ中央を東西に走ることから、屋敷の南北を区分する機能が考えられる。

区画溝1 主屋西部で検出した逆「L」字状の区画溝である。最大幅1.5m、深さ0.4mをはかるが、東西部分の溝幅はやや狭まり、幅1.5m、深さ0.15m程度になる。区画溝2により削平されている

ことから、区画溝としては古い段階のものと考えられる。

区画溝2 主屋西部で検出した西向きに伸びる溝である。幅1.8m、深さ0.4mをはかる。検出した位置からみて、堀1と同様の機能が考えられるが、東側に対応する区画溝は堀1だけに限ら



第7図 堀1、区画溝1・2断面図 (堀1 1:25、区画溝1・2 1:20)

れる。区画溝2と堀1では規模が異なることから、堀1掘削以前の区画となる可能性が考えられる。

ピット 調査区からは若干のピットを検出したが、埋土は主屋第4層と類似するものが多く、旧今西家段階の遺構と想定できるものは2基に限られた。このうち、ピット1は、直径25cm、深さ10cmと小さいものであるが、内部に完全に炭化した柱材が残存しており、旧今西家の火災に関連する遺構として注目される。

土坑 明確に土坑として確認できたものは、4基に限られるが、このうち、土坑1を除いてすべて主屋第4層に類似する埋土が堆積していた。土坑1は、主屋第4層上面から掘り込まれた礎石拔取痕の壁面から埋土の状況を観察しただけにとどまるが、埋土中に炭・焼土を多量に含むことから、堀1と同様に、火災後の焼土整理に埋め戻された可能性がある。

礎石1・2 調査区北部で検出した2基の礎石である。検出した位置に対応性があることから、一連の建物に伴う礎石となる可能性が考えられる。礎石1・2は主屋第4層上面で検出し、また礎石1の上面に主屋第4層の瓦が密着した状態が出土したことから、礎石1・2は第4層上面でも機能した可能性がある。

小溝群 調査区のほぼ全面で、南北に走る小溝を検出した。溝は、ほぼ一定の間隔で同一方向に平行して伸びることや、埋土が主屋第4層となることから、耕作痕と考えられる。旧今西家の火災からしばらくの期間、付近が耕地として利用されたことを物語る。

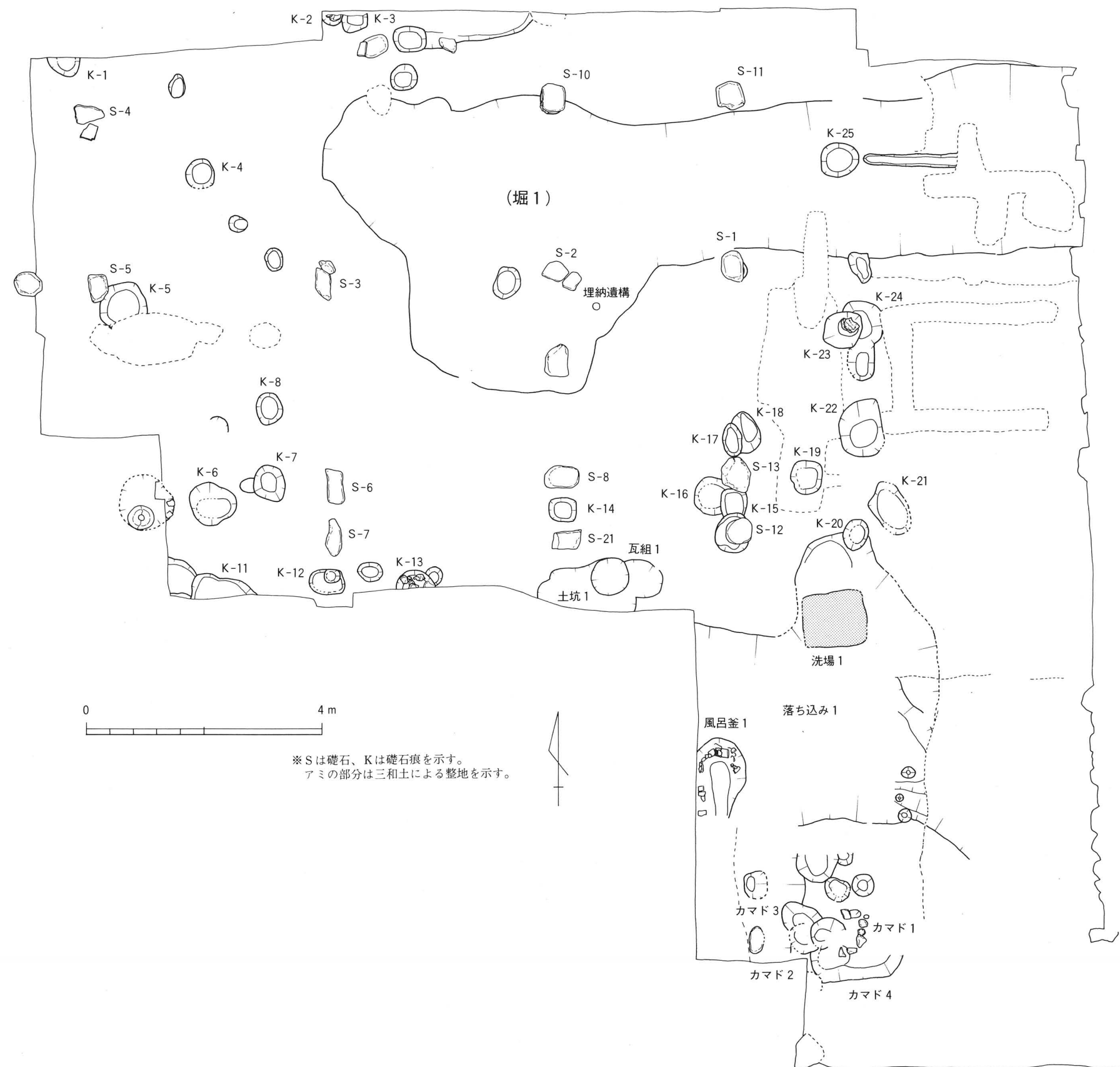
(3) 第2期の遺構

第2期は、現今西家建築から主屋第3層による整地までの期間で、主屋第4層および台所第5層上面から検出した遺構がこの時期のものとなる。

なお、第4層は旧今西家の火災から現今西家の建築までの数年間に堆積した耕作土であることから、同層の上面に現今西家以前の建物等に関連する遺構が存在する可能性は乏しいものと考えられる。ただし、台所部分は主屋建築後に増設されたことが判明していることから、台所部分の遺構は、主屋部分と時期に差がある。また、台所部分で検出された落ち込み1は、台所建築以前の遺構となるが、主屋より溯る可能性は乏しい。以下、主要な遺構について、概要を述べることにする。

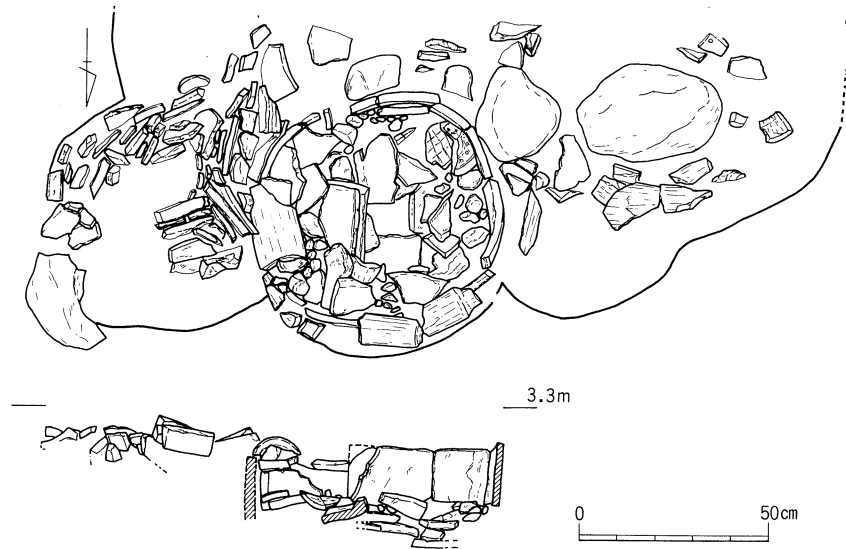
礎石 第4層上面から現位置を保ったままの礎石は、大黒柱の桁行列（礎石1～4）に限られるが、可能性が考えられるものに礎石5～11がある。なお、礎石2・3はほぼ同一レベルで、礎石が2つずつ検出されており、建築当初の柱の位置は特定しにくい。また、礎石1（大黒柱）の東側にも小さな礎石が主屋第3層上面から掘り込まれており、原位置にある礎石といえども周辺の改変は著しい。

礎石拔取痕 明確な拔取痕は、26基を検出している。このうち、拔取痕7・8、10もしくは11と12・13が、また23と25、22と24が、また礎石8・13と拔取痕19が対応関係にあるものと考えられる。また、拔取痕5・6は明確な対応がある礎石がないものの、大型の礎石となる



第8図 第2期の遺構 (1:80)

ことから、コーナーにあたるか、南の座敷へ通じる回廊の接点になった可能性も残されている。なお、これら抜取痕の中には、抜取痕23のように壁土や三和土、割れた瓦を充填して埋め戻すものが見られる。



第9図 瓦組1（吸い込み）平面・立面図（1：20）

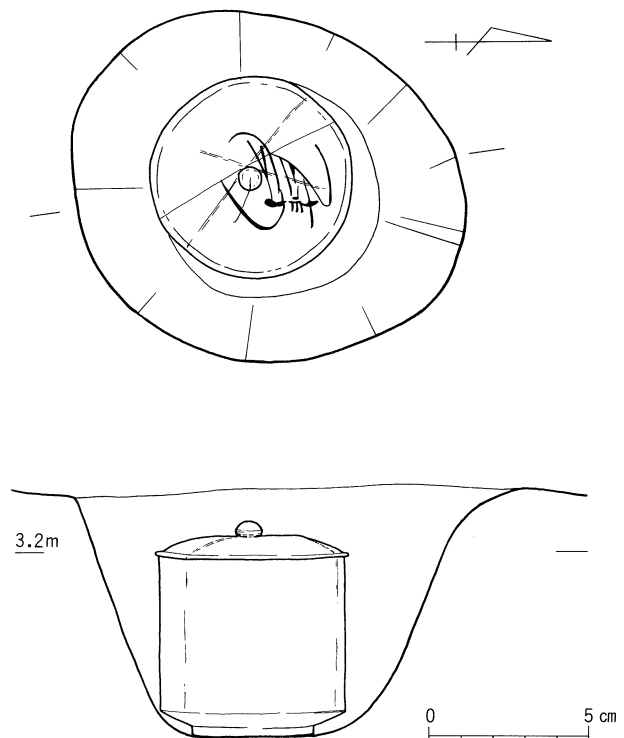
瓦組1（吸い込み）

主屋南部で検出した瓦

組である。平面円形を呈し直径0.7mをはかる。組は平瓦の小口を上向けに1段分並べて円筒をつくり、この中に細かく割った瓦を螺旋状に敷き詰めて、その中央を空洞にする構造となっている。円筒の下にも同様の瓦敷きは広がることから、あらかじめ土坑内に瓦を充填した上で、円筒を組み上げたものと考えられる。なお、通常の吸い込みは雨落ちの位置にあるが、瓦組1は確実に屋内に位置することから、別途の目的のために作られた可能性も考えられる。

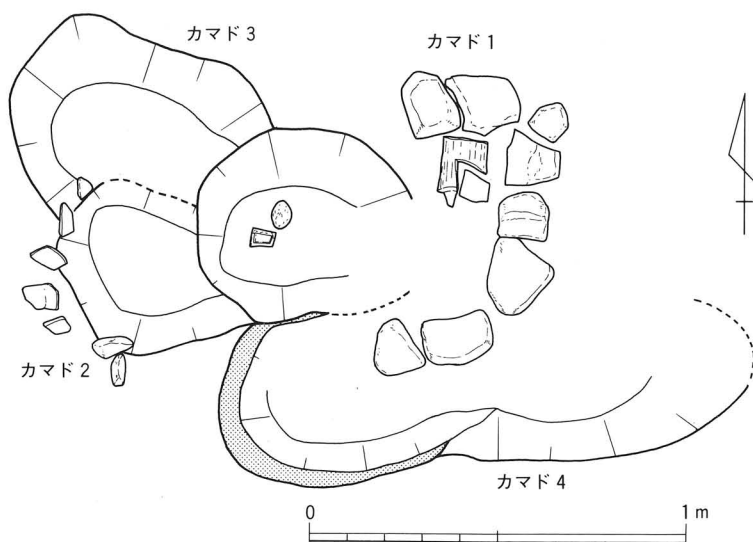
埋納遺構 主屋のほぼ中心で検出した、主軸長25cmをはかる平面楕円形のピットである。ピットの中には、蓋付の鉢が正位で置かれており埋納遺構と判断した。鉢は、銅線で「十」の字に括られて、蓋と身を固定した上でピット内に納められ、黒オリーブ色細粒砂で埋められていた。また、鉢の蓋から身にかけては「四前」の二字が墨書されていた。

鉢は何かの容器と考えられるが、調査時に開封した際には長さ約3cm前後の生物遺体らしき腐敗物が残っただけで、遺物はなかった。よって、埋納目的は判然としないが、遺構が主屋面の対角線の交点付近で検出している点で地鎮遺構になる可能性が、また内容物が臍の尾と解釈した場合は抱衣壺となる可能性が考えられる。



第10図 埋納遺構平面・立面図（1：5）

カマド1 台所南西隅においてカマド2～4と重複して検出した。上部はすでに破壊されて



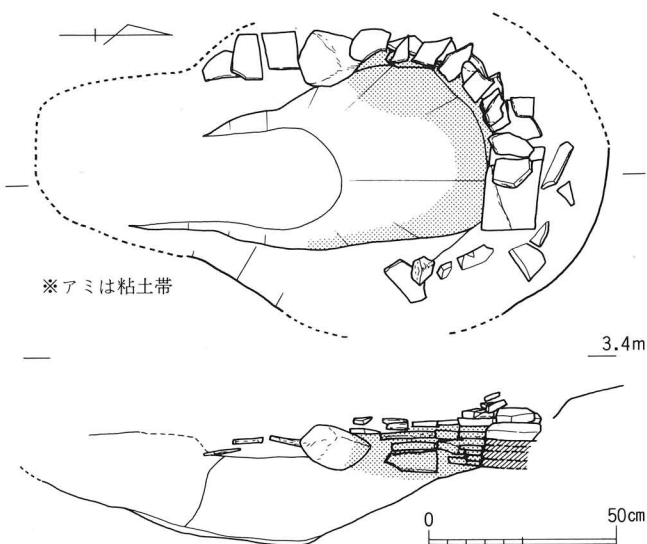
第11図 カマド1～4平面図（1：20）

手前へ次第に浅くなる。なお、燃焼部下層には炭層が堆積し、その直上から硯などが出土した。

カマド2 台所南西隅においてカマド1・3と重複して検出した。燃焼部は平面円形を呈し、直径0.5mをはかる。最終焼成面までの深さは14cmである。焚口から前庭部にかけてはカマド1により削平されているため、構造は明確ではない。焼成部奥壁の周囲には、上部の基礎とも考えられる割れた瓦が列状に配置された状態で出土した。

カマド3 カマド1・2と重複して検出したため、焚口の一部分が削平されている。燃焼部は平面円形を呈し、直径0.6m、深さ18cm前後をはかる。東側に焚口を設けるが、灰の掻出しによる落ち込みは明瞭ではない。なお、最下層には層厚2cmの炭層の堆積が認められた。

カマド4 カマド1と重複し、上面には礎石が配置された状態で検出した。全長0.8m、燃焼部の幅（内法）0.4m、最終焼成面までの深さ25cmをはかる。焼成部の東側に焚口を設けるが境



第12図 風呂釜1平面・立面図（1：20）

おり、その構造は明確ではないが、下部の保存状態は良好で構造について一定の推定ができる。

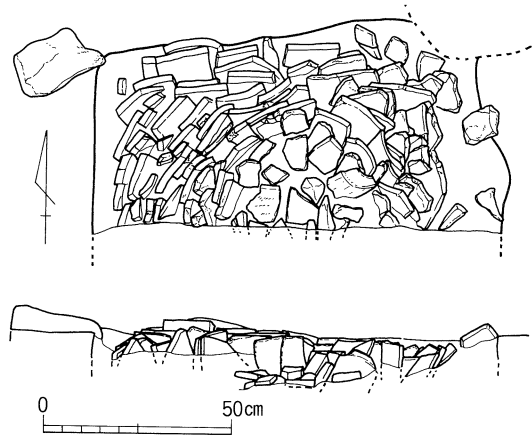
カマド1は直径50cm、深さ20cmをはかる平面円形のカマドである。東側に設置された前庭部の周囲には、瓦や石を並べて一辺0.7mの方形区画を形成している。焚口の前後は、灰の掻出しにより一段窪んでいるが、全体的には燃焼部奥壁から

境界は明瞭ではなく、涙滴状の平面形を呈する。また、焚口から東側には連続する落ち込みを検出しており、全長0.7m程の前庭部が設けられていた可能性が考えられる。焼成部の壁面には黄白色粘土を厚さ3cm～7cmほど覆い、壁体をとしている。

カマド4は三和土を充填して埋め戻され、また上面には礎石が配置されていることから、カマド4は台所の改築に関連して廃絶した可能性がある。

風呂釜1 台所北西部で検出した南北に

主軸をとる全長（内法）1.2mの風呂釜である。燃焼部は平面半円形を呈し、直径は0.5mをはかる。燃焼部の南側に楕円形状の前庭部が設けられている。焼成部の壁面には、割れた平瓦を7～8層ほど積み重ね、その内側に黄白色粘土を覆い壁体とする。焚口の両側には、20cm前後の河原石をおいて壁体の仕切りにしているが、壁体の上部1層にあたる瓦列だけはそのまま前庭部の周囲に延長され、足場を形成したものと考えられる。



第13図 洗い場1平面・立面図（1：20）

なお、風呂釜1に伴う洗い場は、第2期の風呂場2により破壊されたか、もしくは調査区の西側に位置する可能性が考えられる。

洗い場1 台所の北側で検出した三和土敷きの洗い場である。南側の一部は第2期の風呂釜2と接し、前庭部の掘削により洗い場につながる排水管は破壊されている。洗い場は南北0.9m、東西1.1mをはかり、平面は長方形になる。三和土の下から瓦敷きを検出した。瓦敷きは土坑状の掘り込みに、外側から割れた瓦をやや斜め向きに並べて同心円状に敷き詰める。南面の中央付近は、25cmほどの範囲で割れた瓦を水平に敷き、排水口部を作っている。洗い場1と同様の構造を有する三和土敷きの遺構は、第2期の風呂場2でも認められることから、洗い場1が風呂場になる可能性も残されている。しかし、洗い場1の周辺には同時期の風呂釜は検出されなかったことから、報告では洗い場として扱うこととした。なお、洗い場2の三和土は第3層の整地後に張りなおしが行われたらしく、第3期以降も使用された可能性がある。

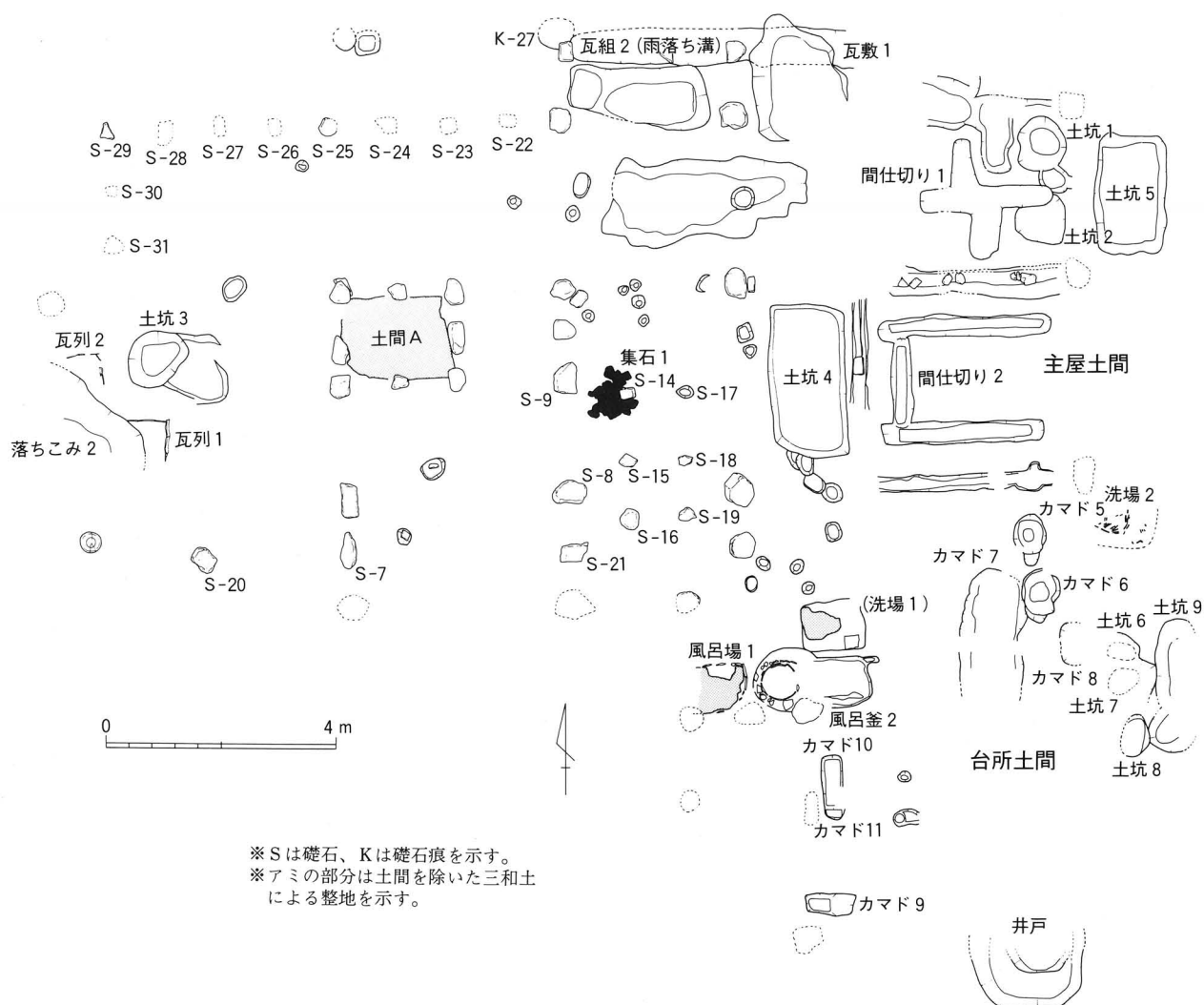
落ち込み1 台所北部一帯で検出した、幅3.2m以上の規模を有する落ち込みである。上面を検出し部分的に調査した結果、深さは0.5m以上となるものと考えられたが明確にはできなかった。埋土には三和土、瓦、石等が含まれており、廃材を放棄しながら埋め立てた可能性が考えられる。落ち込み1は、遺構の重複関係から台所関連遺構より古い段階の遺構となり、台所建築以前の時期が考えられる。

（4）第3期の遺構

第3期は第3層の整地から第2層の堆積にかけての期間で、主屋第3層または台所第4層（土間）上面で検出した遺構が、この時期に該当する。また、第2層と類似する埋土を有する遺構については、この時期に含めることとした。

礎石・礎石抜取痕 この時期には、主要な礎石はほぼ現位置に固定され、移動の痕跡は認めにくくなる。その一方で、礎石7・21の延長にある礎石20は機能を停止しており、間取りの変更予想される。また、抜取痕27もこの時期のものと考えられるが、対応する礎石などは明確ではない。

一方、束柱に伴う礎石が、この時期から確認できる。このうち、礎石14～19は一連の間取り



第14図 第3期の遺構 (1:125)

に伴う礎石と考えられる。また、東柱の礎石としては大型である礎石22～32もその可能性が考えられるが、礎石33～38は柱通りが異なることから、第3期に下る可能性もある。

なお、主屋および台所の東壁部分の礎石列については、遺構などの重複もあり、この時期の状況を明確にはできなかった。

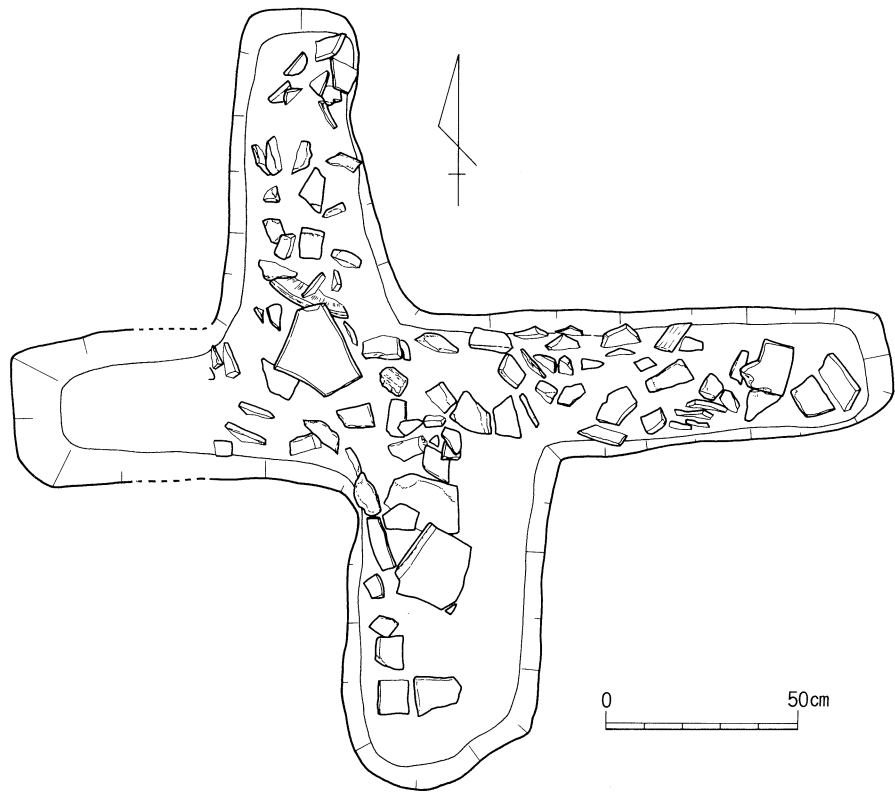
間仕切り1・2 主屋東側で検出した溝状の遺構である。いずれも、建物基礎に伴う布掘りと同じ特徴をもつが屋内にあり、また床張としては大がかりであることから間仕切り壁の基礎と判断した。

間仕切り1は、東西の長さ2.3mをはかる平面変形十字形の布掘り痕である。掘り方の幅は0.5m、根切り底の深さは約45cmをはかり、底には栗石のかわりに割れた瓦や播鉢を敷き詰めている。基礎は抜き取られており、その構造は明確ではない。なお、間仕切り1は、その形態からみて部屋をさらに4区画に区分するものと考えられるが、細分された空間の意味は明確ではなく、目的については検討を要する遺構である。

間仕切り2は、東西の長さ2.7m、南北幅は芯通りで2.0mをはかる。平面「コ」の字状の布

掘り痕で、掘り方などの特徴は間仕切り1と同様であるが、栗石などは敷き詰められていなかった。間仕切り2は、東側が開口しており、出入り口になる可能性も考えられる。また、その位置から土坑5との関連も想定できる。

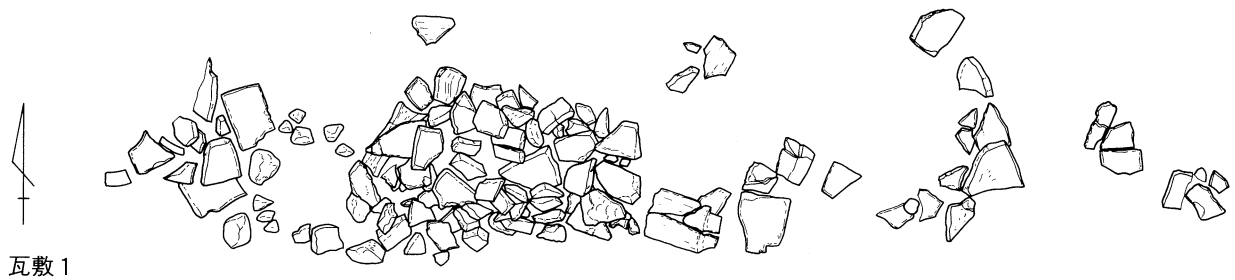
瓦敷き1 瓦組2
の東側で検出した東西2mをはかる遺構である。平瓦を中心に割れた瓦がやや散



第15図 間仕切り1平面図(1:20)

乱した状態で検出しており、意図的に敷き詰められたものとするには疑問が残る。瓦組2に付属する遺構となる可能性もあるが、判然としない。

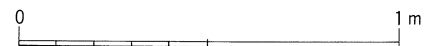
瓦組2(雨落ち溝) 主屋北部の式台部分で検出した東西3.5m、幅約0.6mの遺構である。遺



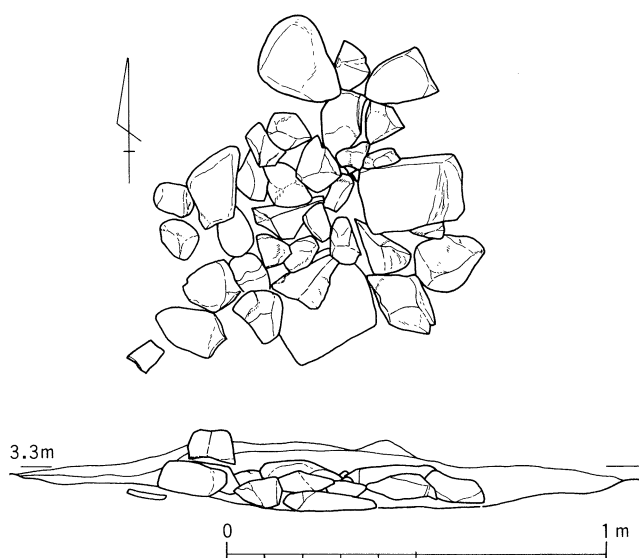
瓦敷き1



瓦組2(雨落ち溝)



第16図 瓦敷き1・瓦組2(雨落ち溝)平面図(1:20)



第17図 集石1平面・立面図(1:20)

構の北側は調査区外にあるため、幅および構造については十分に確認できなかったが、南側の構造と同様の形態が予想できる。検出部分における瓦組は、中央に平瓦を小口組みにして縦方向に並べ、その両側は良質の砂で埋めた上に3cm前後の玉石を敷き詰める。平瓦は、すべて割ったものを使っているが、破断面はすべて下向きにしてそろえていた状況で検出した。また、雨落ち溝上面から肥前系磁器の鉢が出土している。

瓦列1 主屋南西隅で検出した区画状に

配置された瓦列である。瓦3～4枚を小口合わせで一列にならべ、平面「」状の配置をとる。この瓦列の内側は、落ち込みがあることから、これに伴う土留めとして配置された可能性も考えられる。

土間A 主屋中央部で検出した土間で、主屋東側および台所の土間とは異なる。主屋中央の押し入れにあたる限定された範囲に、明黄灰色の三和土を敷き詰められた状態で検出した。なお、この部分だけ第3層による整地はなく、整地と前後する時期に土間Aが敷かれたものと考えられる。土間Aは限定された空間の標識として特異な目的を有していた可能性も想定できるが、神棚は隣にあることが知られているだけで、その性格は不明である。

集石1 主屋中央で検出した盛り土状の集石である。半径0.5mの範囲で5～20cm大の石が寄せ集め、その上から明黄色粘土塊で覆う構造になっている。外見では土饅頭状の盛り土と言える。集石の状態には、目的を意図した配置は認められず、その上下にも関連する構造物や遺構はないことから、家屋の改修などにもなう偶発的な所産と考えられる。

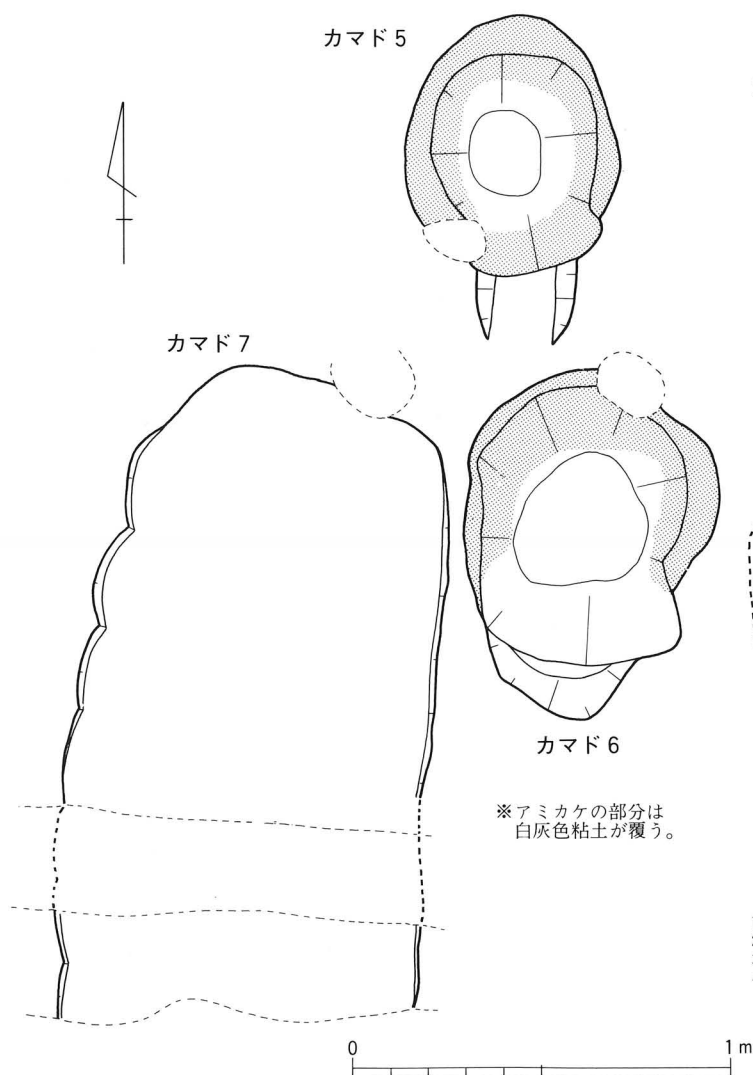
カマド5 台所土間東側で検出した、平面円形のカマドである。直径45cm、最終燃焼面までの深さは10cmをはかる。カマドの上部は削平され、構造は明確ではないが、下部の保存状態は良好であり、焚口等を確認した。焚口はカマドの南側に設けられ、その手前から前庭部にかけて灰の掻出しにより一段窪んでいる。また、燃焼部の壁面には、灰白色粘土を貼り付け壁体とする構造を用いている。

カマド6 カマド5の南側で検出した、平面円形のカマドである。直径56cm、最終燃焼面までの深さは15cm前後をはかる。上部は削平されているため構造は明確ではないが、下部の状態は良好であり焚口等を確認した。焚口は、カマド5と同様に燃焼部の南に設け、焚口から前庭部にかけては灰の掻出しにより、広い範囲が落ち込み状に窪んでいる。カマド6は、カマド5の南側約30cmの位置に作られており、これらのカマドが同時に機能した可能性は考えにくい。また、

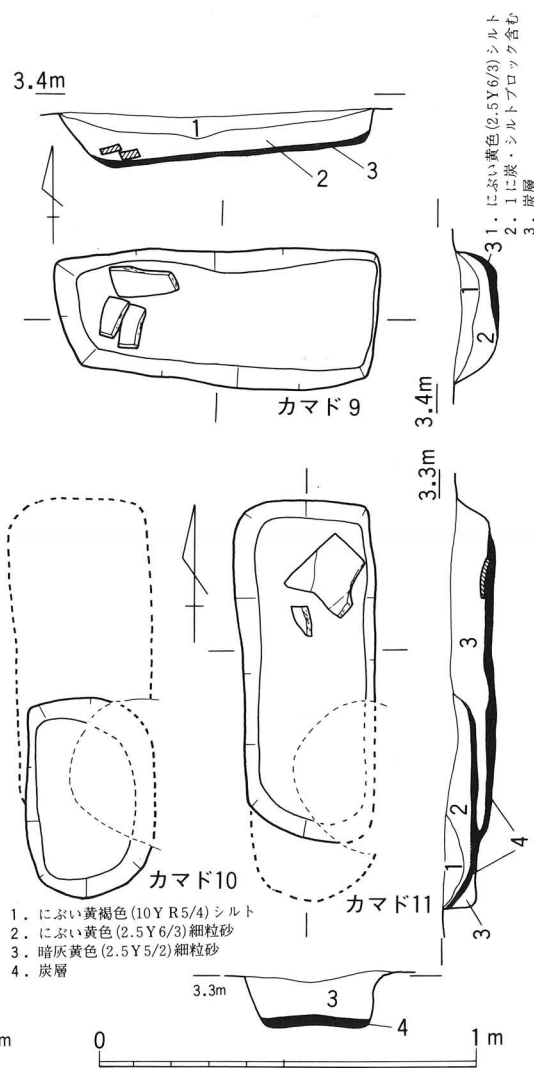
重複していないことから、その前後関係は明確にできなかった。

カマド7 カマド6の西側で検出した連房式のカマドであるが、南側は現代のカマドにより削平されており、規模等については明確ではない。検出部分におけるカマドの幅は1.7m、奥行き0.5m前後であり、3連以上の連房式カマドになることが予想できる。また、カマドは地上式と考えられ、燃焼部などの下部構造も削平されていた。よって、焚口などを明確に確認できる状態ではないものの、辛うじて壁体の痕跡が西側の一部に残存することから、東側に焚口が設けられた可能性が想定できる。また、壁体は平瓦を縦置きにし、その周囲を粘土で固めたものと考えられる。なお、カマド7はカマド5～8のなかでは最も新しい時期の遺構と考えられ、第3期以降も機能した可能性が考えられる。

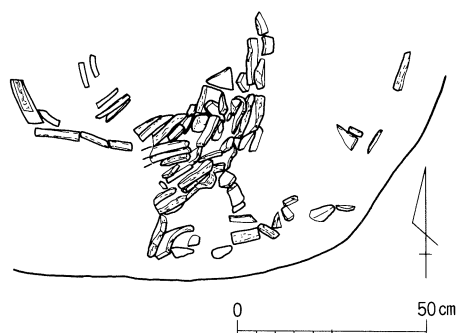
カマド8 台所東側で検出したが、1/2は破壊されており形状・構造については明確ではない。残存部分から平面円形のカマドになるものと予想される。また、粘土による壁体をもつことから、



第18図 カマド5～7平面図（1：20）



第19図 カマド9～11
平面・断面図（1：20）



第20図 洗い場2平面図（1：20）

カマド5・6と同じ構造になることが予想できる。

カマド9 台所南側で検出した平面長方形のカマドである。東西方向を主軸とし、主軸長95cm、幅35cm、深さ14cm前後をはかる。焚口および上部構造の痕跡は認められないことから、燃焼部以外は地上に設けられた可能性がある。燃焼部下層には炭層が堆積し、その直上から平瓦片が出土している。カマドの壁面は被熱による変色がないことから、これら平瓦が壁体として用いられた可能性が考えられる。

なお、カマド9は、絵図に散見する小型の連房式カマドと規模などが類似している。

カマド10 カマド11の上面で検出した平面長方形のカマドである。主軸方向は南北とし、主軸長56cm、幅35cm、深さ9cmをはかる。主軸長はカマド9・11に比べて短く、2連のカマドになる可能性がある。また、カマド9・11と同様に焚口などは明確ではなかった。なお、最下層には炭層が堆積するが、瓦片などは出土しなかった。

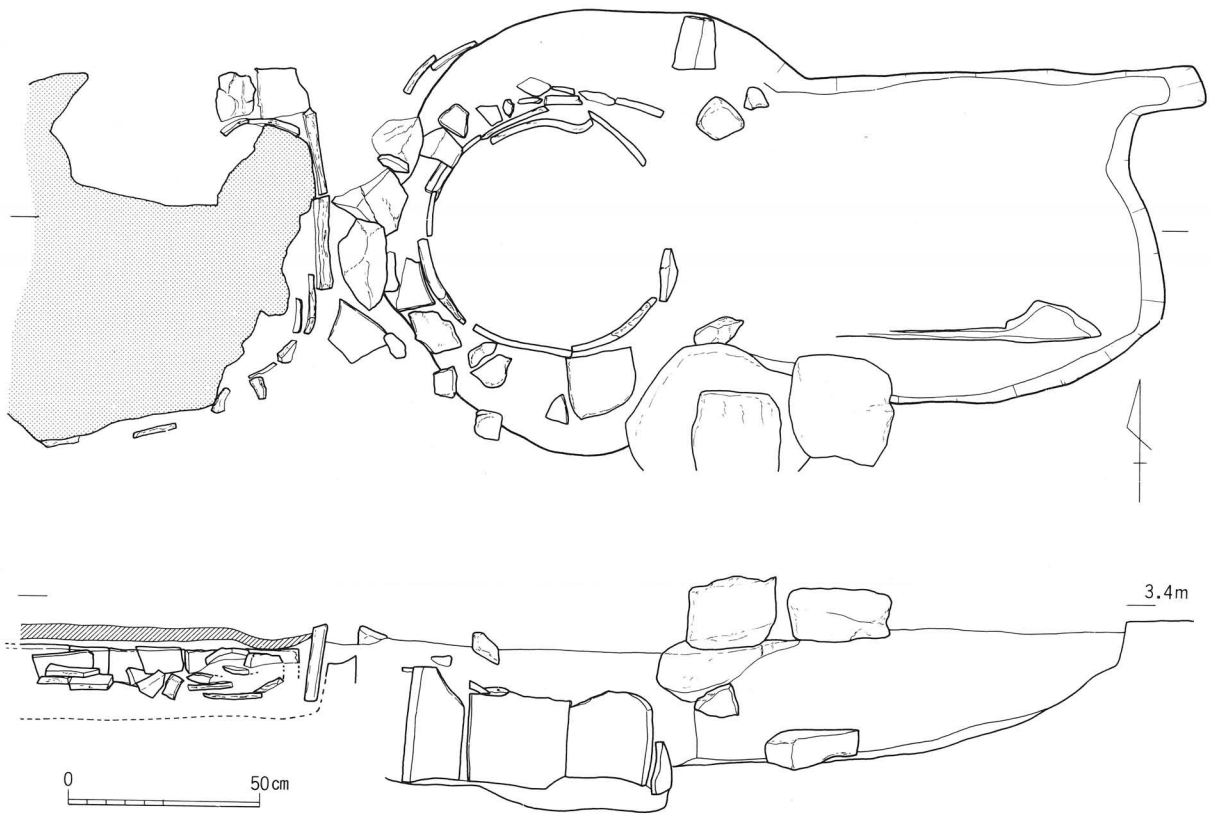
カマド11 カマド10とほぼ同位置で検出した、平面長方形のカマドである。主軸長90cm、幅35cm、深さ12cmをはかり、カマド9と同様の規模を有する。最下層に堆積する炭層の直上からは瓦片が出土しており、カマド9と同様の構造が考えられる。

洗い場2 台所東側で検出した。上面の三和土は、周囲の土間により削平されており、明確ではない。当初土坑として調査したため、三和土の範囲等は不明である。残存した若干の三和土の下からは、第2期の洗い場1と同様に瓦敷きが検出された。瓦敷きの西半分は未調査のため明確ではないが、検出部分から推定して、東西1.4m、南北0.6m前後になるものと考えられる。また、瓦敷きの構造も検出部分から洗い場1と同様に割れた瓦を同心円状に並べ、その中心に排水口を設けたと考えられる。洗い場2に伴う排水口は、瓦敷きの方向から北側に設置されたものと考えられる。なお、洗い場2はその構造からみて、第2期に設置された可能性が残されている。

土坑3（厠？） 主屋南西コーナー付近で検出した平面不整形の土坑である。南北1.0m、東西1.1m前後、深さ0.5mをはかる。土坑埋土は第3層が主体となる。また、土坑3の西側にも同様の埋土を有する深さ0.3m前後の土坑が検出されており、一連の遺構となる可能性が想定できる。当初、礎石抜取痕とも考えられたが、抜取痕としては規模が大きく、また深く掘削されていることや、現状の位置的関係を考慮した結果、便甕の抜取痕となる可能性が想定できる。

井戸 台所南側で検出した素掘りの井戸である。平面不整円形を呈し、直径2.0m前後をはかる。部分的な調査にとどまるため、深さは明確ではない。

風呂釜2 台所と主屋の境界部分で検出した。燃焼部は、平瓦を縦置きにならべ直径35cm程の円筒状の内壁をつくり、その東側に焚口を設ける。燃焼部の周囲には、割れた瓦や河原石を囲むように並べ、釜台を形成している。焚口手前は長さ1.3m、幅35cmほどの半地下式の前庭部を



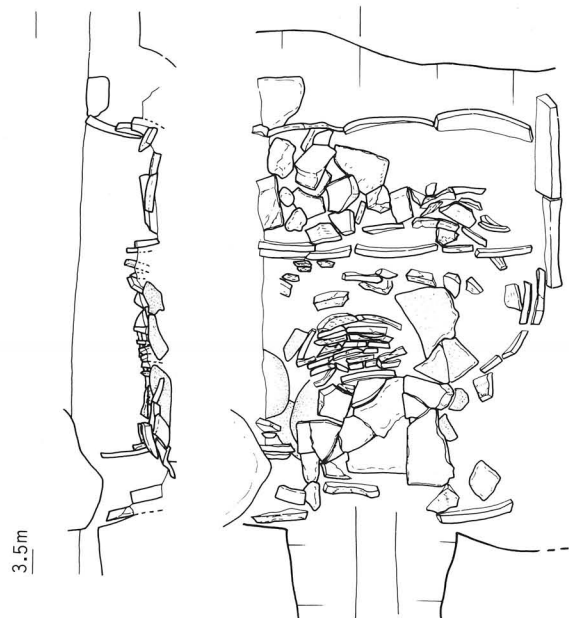
第21図 風呂釜2・風呂場1
平面・立面図（1：20）

設けている。前庭部の側壁は板材を用いて壁を作ったことが、東側奥壁の掘り込みに残る壁板の痕跡から判明した。燃焼部から焚口付近にかけて、最下層に炭層が堆積しているが、前庭部東側までは堆積していなかった。

なお、風呂の焚口は屋内（台所）付近に位置し、また絵図と対応することから、釜場と焚口の間には間仕切りが想定できる。

風呂場1 風呂釜2に伴う風呂場で、風呂釜2の西側に連結する。一部調査区外に広がるため平面形は明確ではないが、検出部分から南北

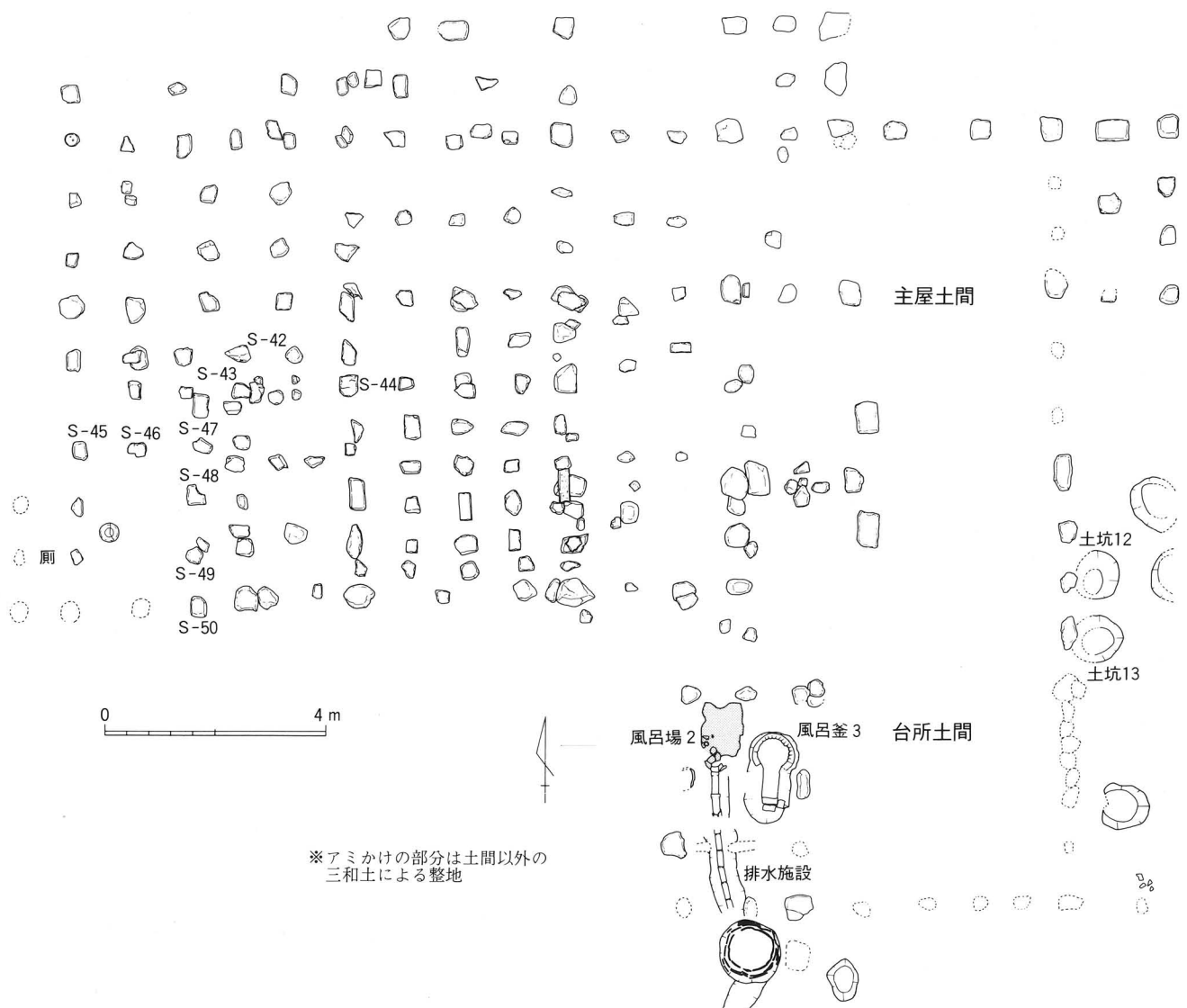
70 cm、東西 75 cm 程度の台形状の形態が予想され、やや歪んだ間取りと言える。風呂場内には三和土敷きの風呂床を設けるが、この三和土をめくると、一面に瓦敷きが検出された。瓦敷きは、平瓦を横置きに並べて周囲を囲い、その中央付近を同じく平瓦で区分し内部を2室構造にしている。北側の一室は割れた瓦を無造作に敷き詰



第22図 風呂場1下層平面・立面図（1：20）

めるだけの構造であるが、南側は排水口の手前に平瓦を敷き、その周囲に瓦片を丁寧に並べ、さらにその周りに瓦・三和土の塊を放り込む構造になっている。南北を異なる構造の2室に区分する要因については、他に例がなく要因は明確ではないが水回りの構造として注目される。

落ち込み2 主屋南西コーナー付近で検出した土坑状の落ち込みである。大半が調査区外に広がることから全体の様相は明確ではないが、検出部分から深さは0.4 m以上、半径2 m以上の円形状の落ち込みになる可能性がある。落ち込み2は第2期の瓦列に伴う盛り土を削平していることから、何等かの作為により形成した可能性も残されているが、性格などについては明確ではない。なお、落ち込み2は、第3層堆積後もしばらく放置された可能性が考えらる。



第23図 第4期の遺構 (1 : 125)

(5) 第4期の遺構

主屋部分では第3層の堆積終了前後の時期で、台所部分では土間3・4層がこの時期にあたる。第3層の堆積状況が明確ではないため、第2期との時間差は不明である。また、台所部分では、この間に2時期以上の土間が認められるが、この部分については前後2時期に区分して遺構を扱うことにした。

礎石 礎石は、第3層の堆積により多数が埋没し、これに伴う改変が加わるほか、新たな礎石の追加による補修がなされる。主要な礎石のうち、礎石1～3などは柱の根切りや埋没のため、その直上に粘板岩などの平坦な石を積み重ねて地上げし、機能の保全を加えている。また、主屋南側の礎石20は完全に埋没し、建物の拡張に機能を失っている。また、西側の八畳敷き南の床が、この時期頃に加えられたらしく、これに伴う礎石42～44が設置される。しかし、礎石42～44はその後の改変などにより機能を失い、ほぼ同位置で新しい礎石に付け替えられている。また、主屋南側の礎石に関する改変は、第3期前半の改変のため明確にはできないが、この時期にかさ上げなどの改変が加えられた可能性がある。一方、東柱に伴う礎石は、第3層堆積終了段階で大掛かりな設置を行っており、第2期から継続して機能した可能性が残されているものは、礎石16などの数基に限られる。

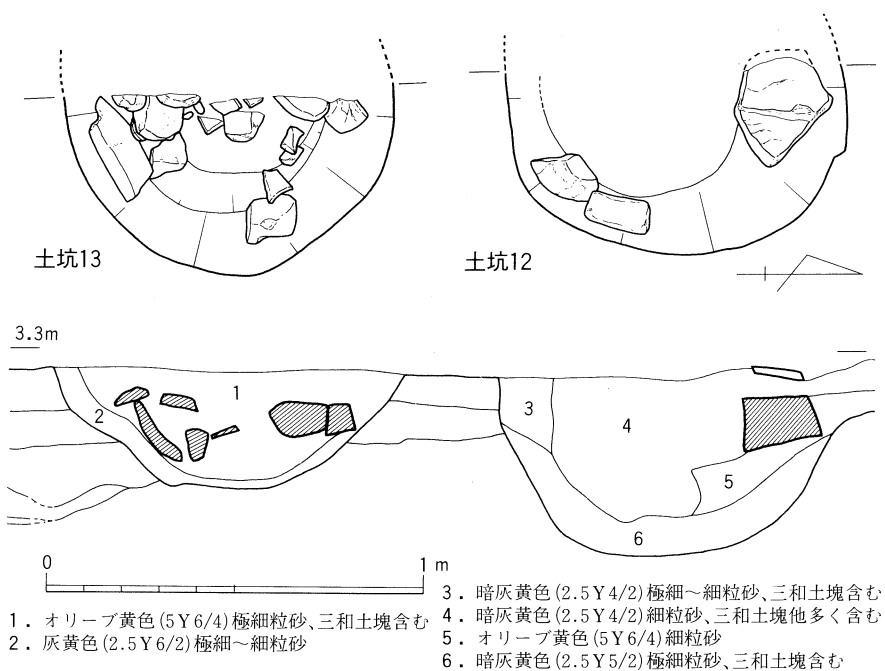
また、台所部分における礎石は、第3期前半では明確ではないが、後半では台所東側の増築が確実に行われ、この段階で旧東壁および新東壁面の礎石の位置は安定する。しかし、屋内と西壁についてはその後も間取りの変更があり、この部分の礎石については明確にしたい。

なお、この時期に加えられた殆どの礎石が第3層上面におく程度で、確実な固定はなされていないことから、礎石の抜き取りや置き換えの有無は確認できない。

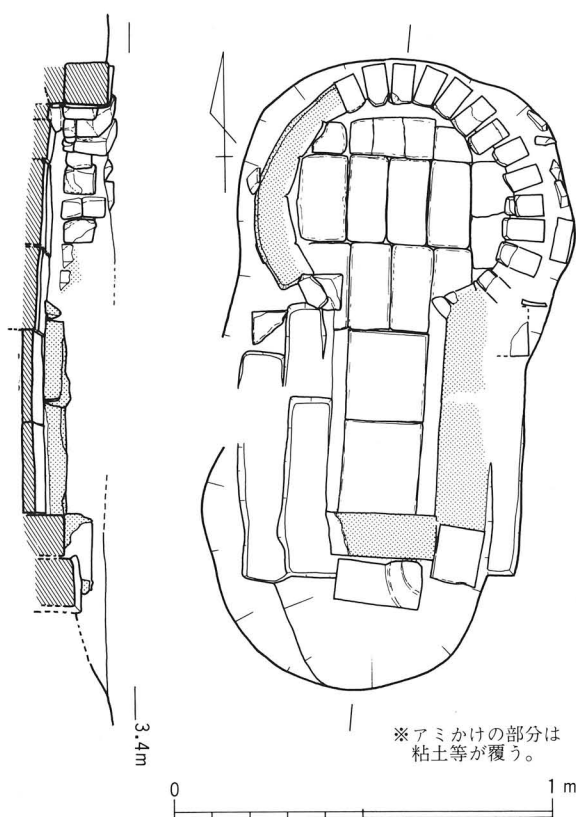
土坑12 台所東方

で検出した平面円形の土坑である。直径0.9m、深さ0.5mをはかる。土坑内には、河原石が同じレベルで側面に沿うような配置で検出された。また、土坑埋土の堆積状況は、柱穴等と同じ様相を呈することから、埋甕などに伴う土坑となる

可能性が想定できる。



第24図 土坑12・13平面・断面図(1:20)



第25図 風呂釜3平面・立面図（1：20）

厠 主屋南西コーナー部分に設けられた2間×1間の建物である。厠は、約5m四方を約20cmほど盛り土したマウンド上に建てられるが、これに伴い主屋側の礎石45～50が新設されており、増築になる可能性が考えられる。厠上面は三和土を敷いて整地し、便甕2基を配置している。これらについては調査をしていないため、増築当初からのものかは不明である。

マウンド下層面から湊焼播鉢が伏せた状態で出土したが、厠との関係については明確ではない。なお、上屋の構造などについては解体修理にともなう報告に委ねたい。

風呂釜3 台所西側で検出した平面前方後円形の風呂釜である。全長1.7mをはかり、直径0.6mの円形を呈する燃焼部の南側に幅25cmの焚口を設け、その手前を前庭部とする。前庭部は、長さ65cm、幅30cm（内法）をはかる。燃焼部の壁面は8×6×12cm前後をはかる小型のレンガを2段分積み重ねて円形状に並べて壁体とし、外方へ広がる隙間には三和土を充填し、壁体の補強を行う構造となっている。燃焼部床面は、壁体構築後に12×23cmほどのレンガを敷き詰め、引き続き焚口部分に小型のレンガを置く構造となっている。一方、前庭部は、燃焼部床面に使われたものと同じレンガで、側壁と小口をつくる。側壁は、レンガを縦に三つずつ二列に並べる。このうち、外側の列は内側より約10cmほど高くし、風呂釜周囲との格差を段差を設けることで緩和している。小口も同様に2列にならべ、外側は3cmほど高くしている。前庭部床面は平瓦を2枚を置く。なお、前庭部壁体に使われていたレンガも、燃焼部と同じく三和土を用いて固定している。

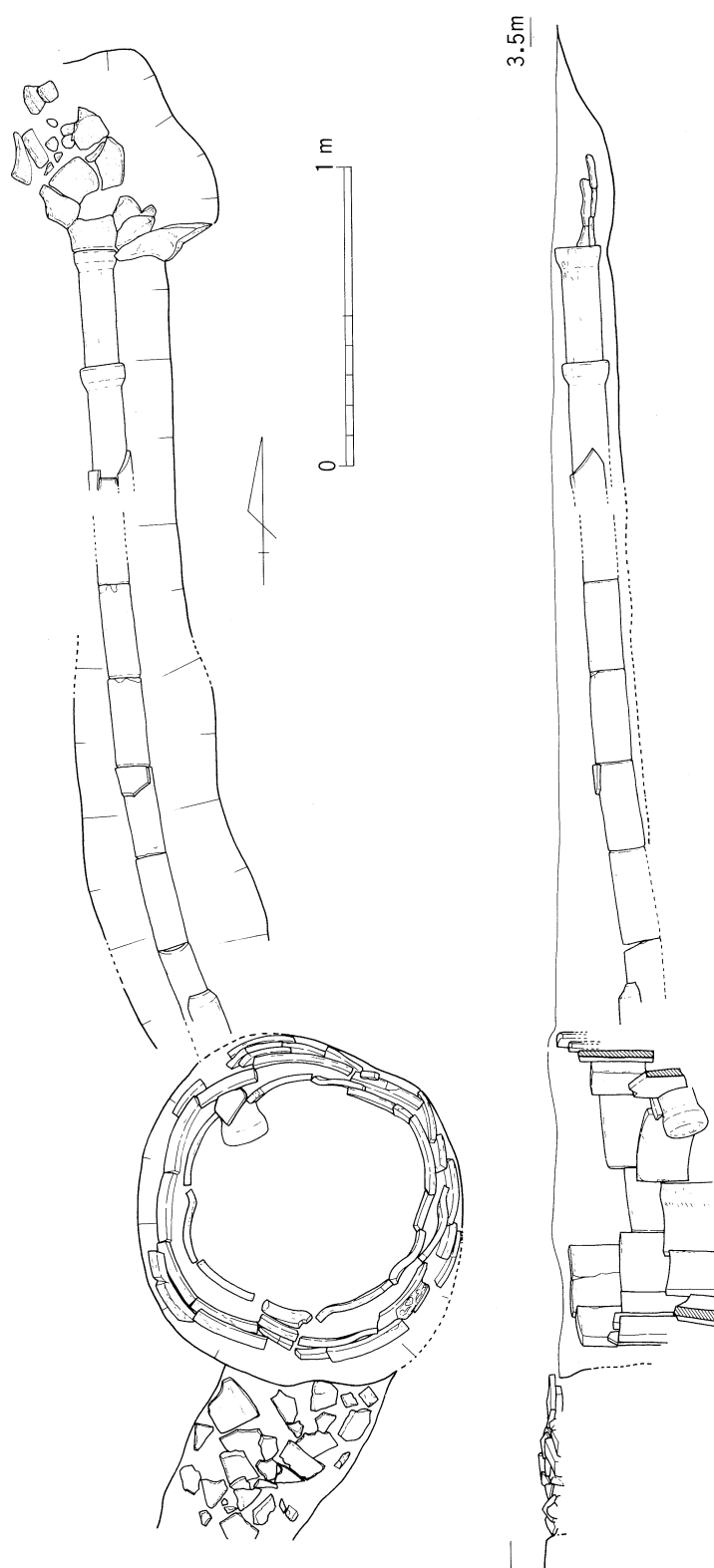
土坑13 土坑12の南側で検出した平面円形の土坑である。直径0.9m、深さ0.4mをはかる。土坑12と同様に一部で河原石や三和土塊が側面に沿うような配置で検出しており、埋土の様相とあわせて土坑12と同じ性格が考えられる。なお、土坑内の埋め戻し土には、多量の三和土塊と河原石が含まれており、礎石抜取痕と類似する状況が伺えた。

台所東方の一帯には、第3期から第4期にかけての土坑が多数検出されている。これら土坑の中には、土坑12・13と同じ性格が想定できるものもあるが、それぞれの土坑の形態は多様であり、性格を明確にすることはできなかった。これらの土坑は、土間をベースに掘り込まれていることから、土坑の掘削が屋内で行われた可能性を残している。

風呂釜3は、前庭部と燃焼部の床面は同じ高さに調整されるなど、全体として丁寧な作りになっている。なお、燃焼部壁体におけるレンガの並べ方は、当時のトンネルなどに見られるレンガ積みの技法と共通しており、技術上の関連が注目されよう。また、使用されたレンガは、レンガが規格化される以前のものであり、大正7年以前の生産品となる可能性が考えられる。風呂釜3は都市ガスの普及により、昭和47年に機能を停止した。

風呂場2 風呂釜3に伴う風呂場である。風呂場2の北西に位置し、南北1.1m、東西0.8mの範囲の床面に三和土を敷き詰めたものである。三和土下部には、風呂場1でみられた瓦敷きの下部構造はなく、南端の排水口付近に三和土片をつなく程度に簡素化している。風呂場2は第4期前半のコンクリート土間による整地まで継続する。

排水施設 台所南西部で検出した集水槽、およびこれと風呂場を繋ぐ排水管からなる。集水槽は平面円形の瓦組による井戸状の水槽で、直径1.2mをはかる。槽内は完掘していないため、深さは不明であるが少なくとも0.5m以上の深さとなる。集水槽は、瓦組みの



第26図 排水施設平面・立面図（1：25）

井筒と同様に瓦で壁体をつくるが、水槽の規模に合わせるためか、瓦の並べ方は雑然としている。また、集水槽の北側は、風呂場からの排水管の接続により一部を屋瓦で補修している。使用され

た瓦は磚瓦と屋瓦の2種であるが、槽の西側には磚瓦が、東側には屋瓦が多く使用されている。槽内の東西で様相が異なり特に東側が粗雑な構造になることから、東側が改修された可能性が考えられる。なお、集水槽の南に接して、瓦敷き状の溝が検出されており、集水槽との関連が考えられる。

排水管は、幅0.5mの溝を掘削し瓦製の土管を埋設したもので、全長は約3mをはかる。この間、9本の瓦製土管を配置を連結して使用するが、傾斜および方向変換部分には漏水を配慮して瓦片で連結部分を覆うなどの工夫が施されている。なお、風呂場2と集水槽の高低差は約0.4mで、集水槽の手前約1.3mのところから排水管の傾斜が急になり、勾配は一定ではない。

排水管に使用された瓦製土管は受け口を有するもの（A）とほぞ口を有する（B）の2種がある。いずれも直径12cm（外寸）をはかるが、Aの全長は42cm、Bの全長は32cm前後をはかる。なお、Aは風呂場排水口とその二つ目、集水槽排水口の部分に使われ、他はすべてBが使われている。

排水施設は、風呂場3とともに4期に機能を停止したものと考えられるが、掘削時期は排水管の取り付けから風呂場3設置以前と考えられる。

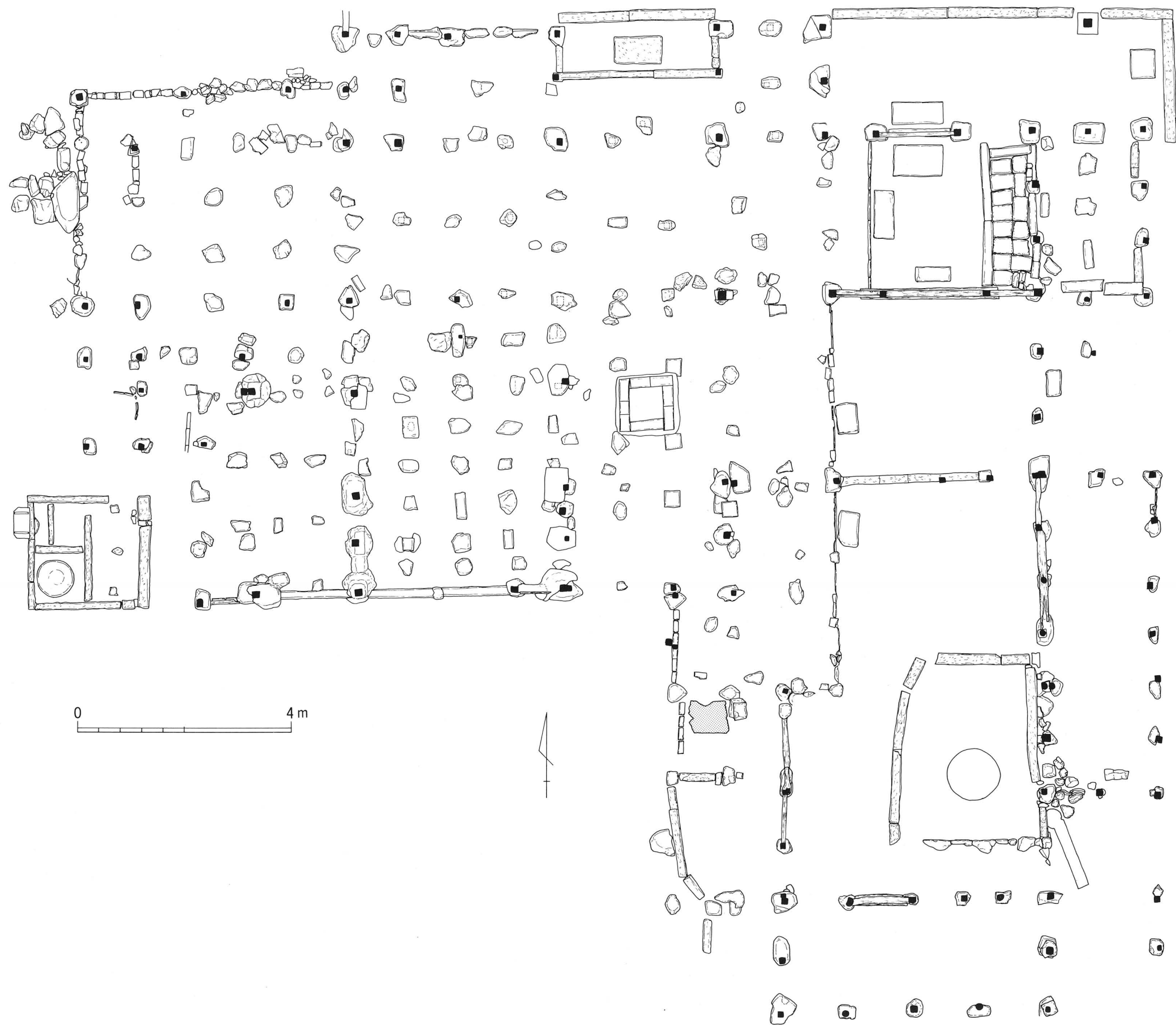
（6）第5期の遺構

第5期は、主屋第3層上面における礎石のコンクリート化、台所ではコンクリート土間による整地から、震災による解体までの時期とした。この時期における構造物などについては、解体修理に伴う調査に委ねられており、これらの成果とあわせて検討する必要がある。なお、この時期には主屋の主要な礎石がコンクリートにより固定され、台所および厠の土間が三和土からコンクリートとなり、また風呂場が移動するなどの変化が認められるが、全体は4期と大きく変わらないことから、平面図を提示し、その概要にかえることにしたい。

3. まとめ

以上、現今西家建築直前の遺構及び現今西家本宅の遺構について報告した。今回の調査ではカマドや風呂釜など通常の発掘調査では確認しにくい遺構が、構造の変遷が追える状態で検出するなど、今西家のみならず近世村落における生活を考える上でも重要な成果が得られた。

しかし、現状では遺物の検討が十分に進んでいないため、建物内の遺構の変遷については修正の余地を残し、また各遺構の構造や屋敷の変遷などについても十分な検討ができないままであり、なお多くの課題が残されている。これらの課題については出土した遺物とともに別途機会を設けて報告したい。

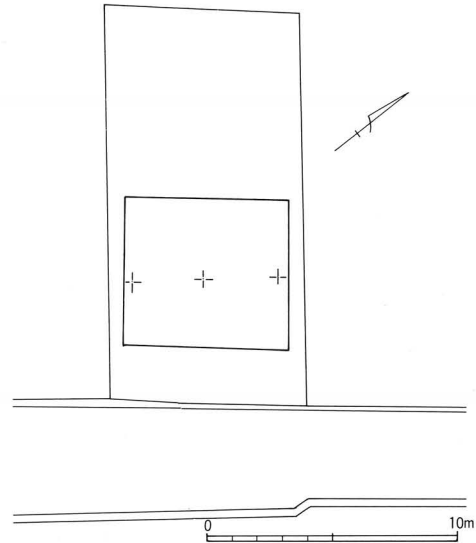


第27図 第5期の遺構 (1:80)

第Ⅲ章 新免遺跡第47次調査の概要

1. 調査の経緯

1997年2月3日、玉井町4丁目9-2における個人住宅の建築確認申請が市へ提出された。豊中市教育委員会では現地が新免遺跡の範囲に含まれることから3月12日に試掘調査を実施し、地表下約20cmにおいて良好な遺構の存在を確認した。予定されている建物の基礎には杭地業を用いるため遺構の損壊が避けられなくなることから協議の結果、工事に先立って当該調査をおこなう運びとなった。調査は46.9㎡を対象に1997年4月14日から5月6日の期間おこなった。



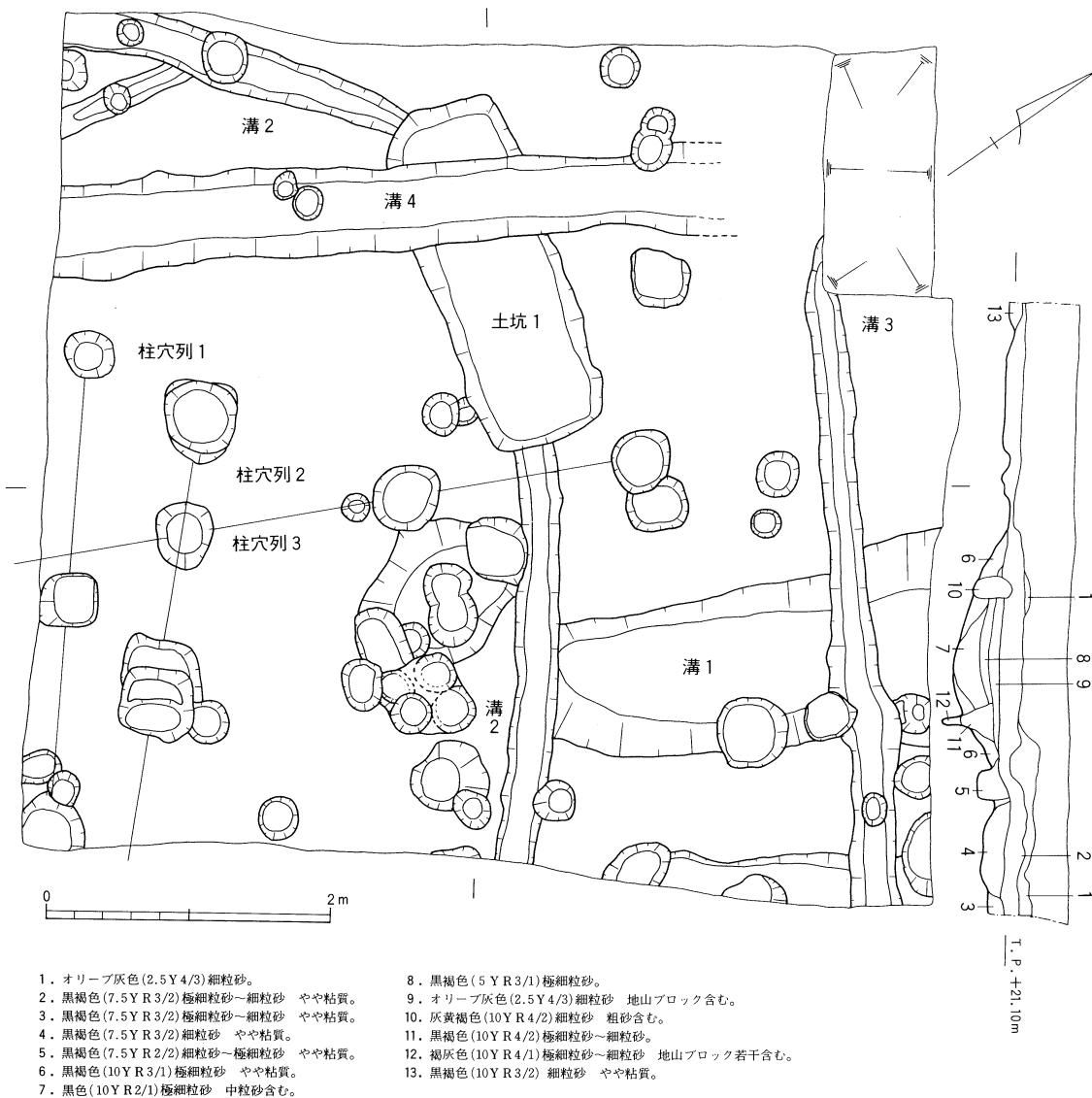
第28図 調査範囲図(1:300)

2. 位置と環境

新免遺跡は豊中台地西北部、標高約22m前後をはかるなだらかな低位段丘上に立地する。遺物、遺構は縄文時代から中・近世まで各々の時期にわたって存在しているが、特にその中心をなすのが弥生時代中～後期、古墳時代後期のものである。主な遺構としてこれまでに弥生時代中・後期の集落や方形周溝墓、古墳時代後期の須恵器生産に関わる集落等が確認されている。弥生時代の



第29図 調査地点位置図(1:5000)



第30図 調査区平面・断面図

集落、墓域は新免遺跡の北西部を中心に広がるのに対し古墳時代の遺構は北東部から東部に広がり本町遺跡との関連が指摘されている。今回の調査地点周辺は阪急宝塚線の開通に伴って拓かれた住宅地であり、豊中台地北端の千里川へ下る段丘の斜面上に位置している。現在段丘斜面は調査地を含む住宅地の北端から大きく削平され崖状に北へ落ちている。

3. 調査の成果

(1) 基本層序

調査区は前述したように段丘上の住宅地にある。この宅地開発などの近・現代の削平により地表下約20～30cmで地山である段丘粘土層に至る。整地土と地山の間には暗褐色の間層が部分的に

見られる。しかし、遺物はほとんど含まれず包含層に該当する土層は確認できない。今回の調査でも調査区のほとんどのところで攪乱が段丘粘土層にまで達していた。よって遺構は整地層直下の段丘粘土層より検出している。

(2) 検出した遺構

包含層が希薄であるにも関わらず調査区内からは良好な遺構が検出された。以下では時期別にそのおもだった遺構を挙げ、概述していく。

弥生時代の遺構

溝1は調査区南東部で検出された幅約110cm、長さ約250cm、遺存する深さ約20cmの溝で、東西方向にのびる。東端は調査区外へ伸び、西端も溝2によって切られている。このように溝全体を検出していないので、遺構の性格を推測することは困難である。埋土は黒褐色を呈し、他の遺構の埋土とは明らかに異なる。遺物は弥生土器壺底部(第31図1)と石鏃(第32図1)1点、オール(第32図2)1点が出土している。当調査区内で検出したもっとも古い時期の遺構で、弥生時代中期に属するものであろう。

古墳時代の遺構

溝2は幅約30cm、深さ約7cmを測る。調査区南壁中央部からでて西へ円を描くように屈曲する溝である。溝3も溝2同様の規模の遺構である。溝2より2mほど東を平行するように南北に走っているが、溝3の北部は削平をうけ溝2同様に円弧を描くものか明確ではない。溝の規模から段丘上をはしる排水溝のような機能も考え得る。両遺構とも須恵器等の細片を出土しているが時期を決定するには至らない。

土坑1は長軸約250cm、短軸約90cm、深さ約25cmで、平面形は比較的形の整った隅丸の長方形である。溝2より後出する。形状から木棺墓等が想定されたが埋没の過程は断面を見る限り3回に分かれた水平堆積である。須恵器の細片も出土しているが、個体に復元できるほどの量はなく出土の状況からも意図的なものは感じられない。以上のようなことから木棺墓、土廣墓といった埋葬施設より集落内の廃棄土坑などが想定されよう。

柱穴列1は調査区南東隅に検出された南北方向のピット3個である。直径約30cm、深さ約30cm、柱間約160cmを測る。これらのピットに対応する柱穴が見あたらないことから建物はさらに西へ広がっていくものと思われる。柱穴列2は調査区南東のコーナーに位置するピット2個で、両遺構とも平面形は隅丸方形を呈する。直径約45cm、深さ約25cm、柱間約190cmを測り、南北方向に連なる。対応する柱穴が東、北方向に見いだせないので建物は南西方向に展開するものと考えられる。柱穴列3は調査区中央部を東西方向に連なるピット3個で直径約40cm、深さ約20cm、柱間約160cmを測る。対応する遺構が見あたらないのでこの柱穴列が建物に付随するものかは明らかでない。

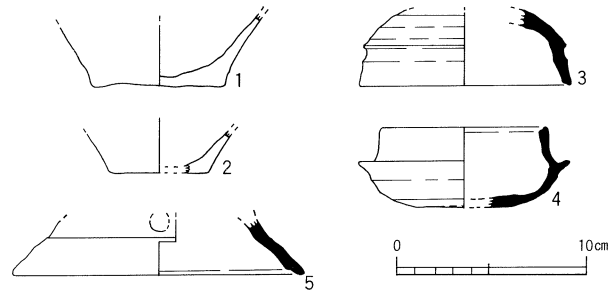
中世以降の遺構

溝4 幅約50cm、長さ約440cm、深さ約31cmの溝である。調査区西壁からでて東壁に至るま

でに攪乱による削平を受け消滅する。灰白色の埋土で他の遺構のものとは明確に区別できる。瓦器片などが出土することから中世以降の遺構と考えられるが時期を特定できる遺物は得られなかった。調査区内で検出したもっとも新しい遺構である。

(3) 出土遺物

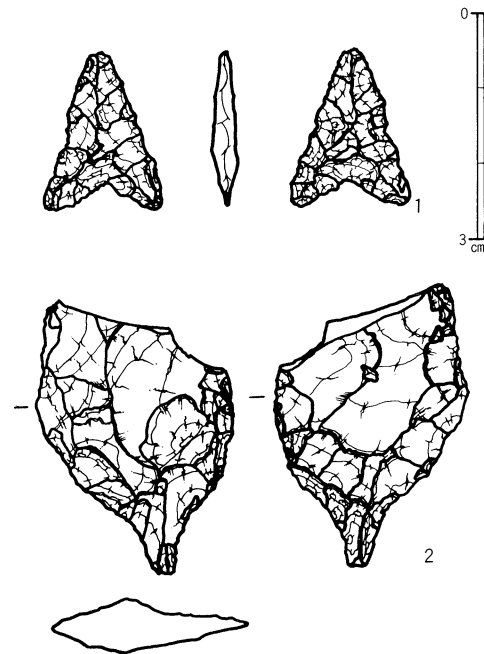
土器 (第31図) 1は弥生時代中期の壺底部である。底部外面はナデで成形し、底部内面及び体部下端に指頭圧痕が見られる。2は土坑1より出土した土師器底部である。遺存状態が悪く外面、内面とも調整は不明瞭であるがナデによる成形がわずかながら観察できる。3、4は同一のピットから出土した須恵器杯身、杯蓋である。両者とも



第31図 出土遺物1 (1:4)

小ぶりで完形に近く対をなすものであろうと考えられる。杯身、杯蓋とも古墳時代中期末葉から後期初頭の様相を示している。5は溝3出土のスカシ孔を持つ須恵器高坏脚部である。底部から約2cmのところに沈線状の段を持つ。

石器 (第32図) サヌカイトを素材とする石器2点が溝1から出土している。1は凹基式の石鏃である。重さは0.63gを計る。剥離面の方向は表裏とも先端部に向かっている。また、基部の凹部は最終段階で行われた調整である。2はオールである。重さは5.97gを計る。錐部の先端及び握り部の一部を欠損している。握りの部分は比較的大きな調整をおこない、錐部に近づくとつれ調整は細くなる。



第32図 出土遺物2 (1:1)

4. まとめ

調査範囲が限られていたことから遺跡の性格まで判別するには至らなかった。しかし、弥生時代中期、古墳時代後期及び中世の遺構が確認できた

という事実は従来の知見を裏付ける資料といえる。加えて、古墳時代後期の柱穴列が既知の須恵器生産に関わる遺構群とはやや離れたところに位置していること、また新免遺跡の集落が各時期ごとに台地北端にまで及ぶこと等を確認し得たことは新免遺跡を考える上で注目すべき成果である。これを受けて、各々の時代の集落範囲をやや広げて考える必要があることなどが今後の調査の留意点となろう。今回の調査を資料の蓄積として更なる資料の増加が望まれる。

第IV章 穂積遺跡第22次調査の概要

1. 調査の経緯

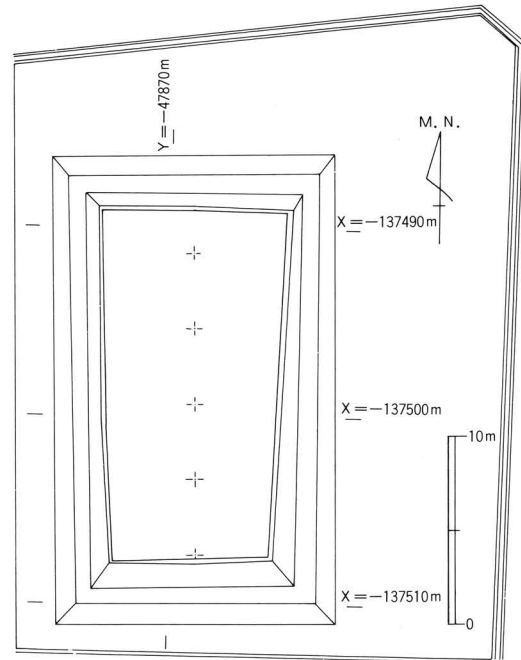
当該調査地は服部西町1丁目849-3に所在する。震災復興住宅の建設に伴って試掘調査を行なったところ、良好な遺物包含層の存在が確認されたので本調査実施の運びとなった。なお、調査対象面積は建築面積と安全を考慮して171㎡に設定された。

2. 調査の成果

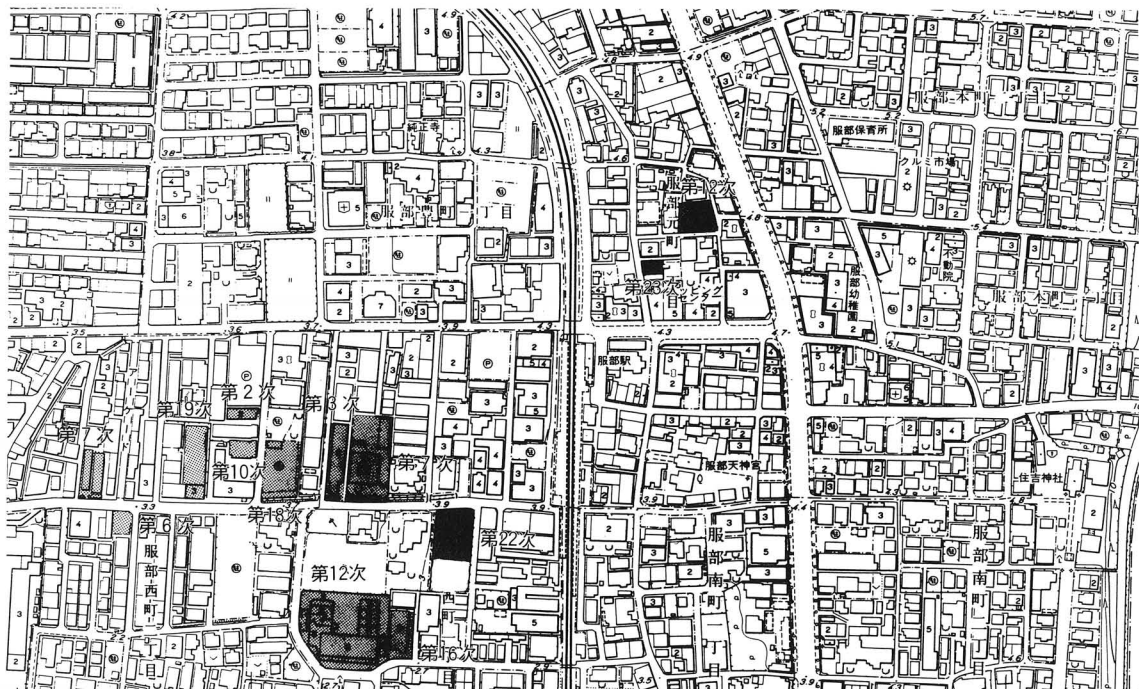
(1) 基本層序

調査地周辺は千里丘陵の南側斜面下に形成された広大な沖積地で、近代に大規模な開発がなされるまでながらく低湿な環境におかれた地域である。したがって近代以降の盛土を

除いた堆積層は、その上半部が洪水堆積物のシルトと粗粒砂で構成され（大半は互層構造）、水田耕作に伴って各々が攪拌された状態で検出される。これらの堆積層は耕作土であるがゆえに、



第33図 調査範囲図(1:400)



第34図 調査地位置図(1:5000)

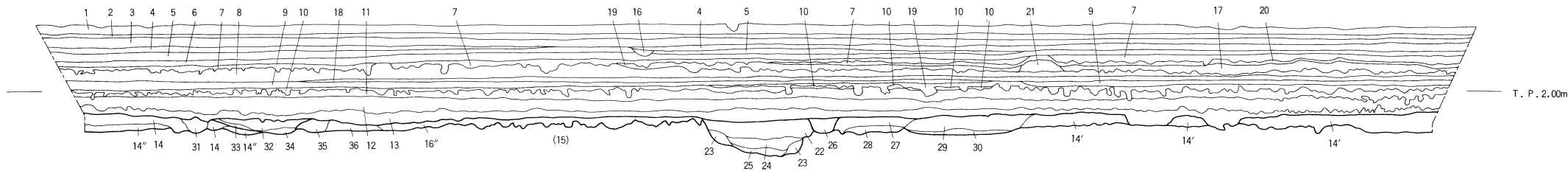
またシルト（粘土）と粗粒砂の互層構造であるため、水分が比較的長く滞留した結果として鉄分の沈着が非常に顕著に見られ、全体に黄褐色系の土色を呈する。堆積層の中程から下半部にかけては、粘性の高い粘土（～シルト）で構成され、灰色～青灰色系の土色を呈する。比較的長期にわたる止水堆積あるいは後背湿地にあたるような堆積環境におかれていたようである。しかし、その中でも数回の耕作が行なわれていたようで、足跡による層序の攪乱、具体的には当該粘土の下層への踏み込みと下層からの引きずりの痕跡が顕著に見られた。また、耕作当時は有機分を多量に含有していたと見られ、現状でも淡い褐灰色～暗灰色系を呈する部分を観察することができる。この耕作行為は弥生末～古墳前期の遺物包含層（暗灰～暗褐色系細粒砂～シルト）をも耕作土とし、その痕跡は遺構が展開する堆積層の上面にまで及ぶ。平面的に精査すると不定形のもの（人間？）と偶蹄類の足跡が規則的に検出されたことから、断定はできないが中世（鎌倉以降）の開発によるものと判断しておきたい。なお、遺構面を形成するベース層は青灰色シルト及び、その直下の灰白～灰色粗粒砂層であるが、粗粒砂層からの湧水が著しく、これ以下の堆積層に関しては未調査である。

（２）検出した遺構

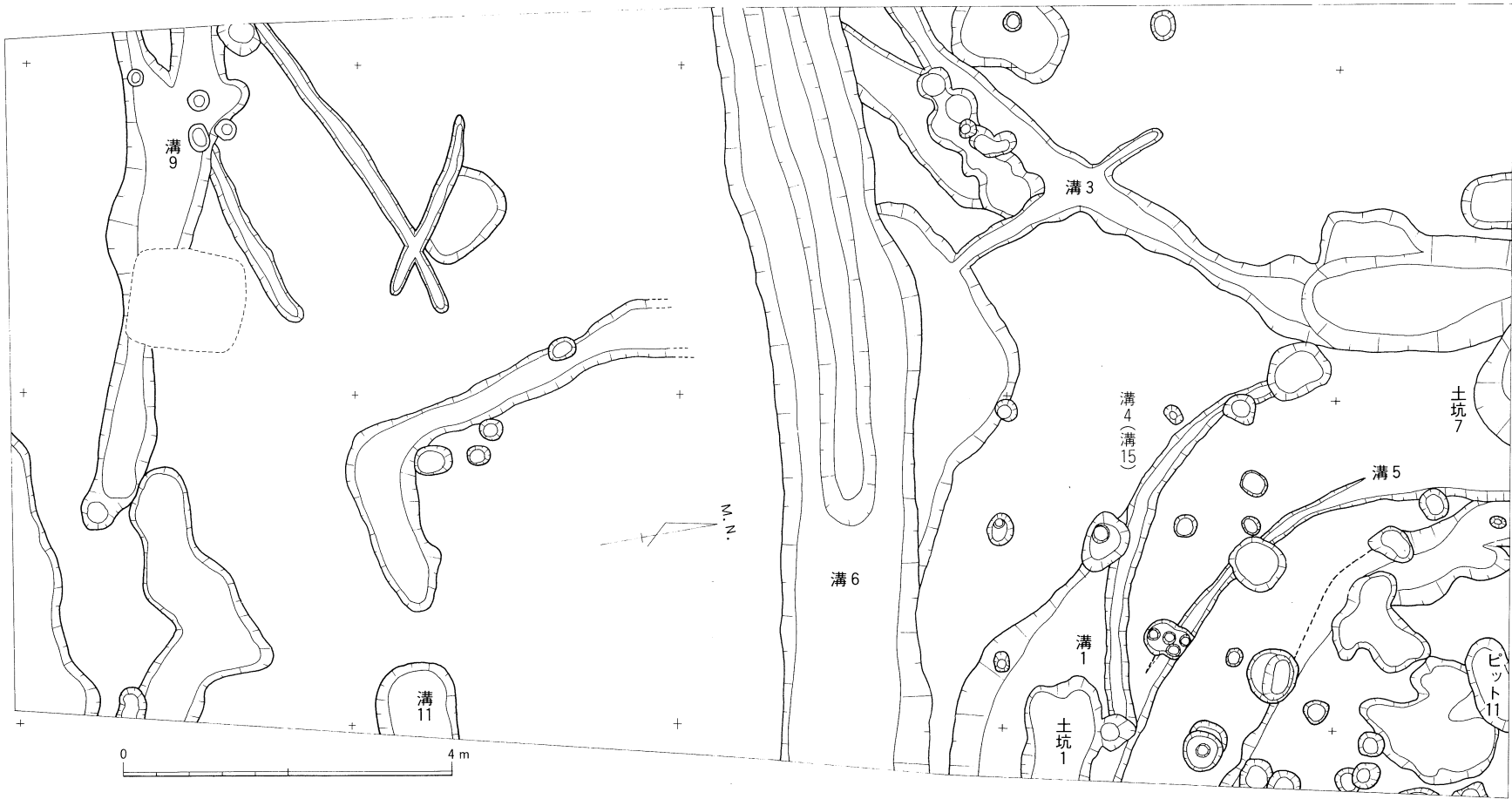
検出した遺構群は、各々遺物包含層中あるいは上面からの構築がなされたものと考えられるが、湧水の影響や土色が酷似していたため、最終的にはベース層上面で平面プランを確定せざるを得なかった。したがって、個別の遺構の深度はその上部が若干削平された数値を示していることを断わっておく。各遺構の構築時期については弥生末、古墳前期、古墳中期、古墳後期の４時期にまたがるが、当該調査地は遺跡内の弥生～古墳集落の中心からは若干距離があり、どちらかというと集落の東側縁辺部にあたるものと推定された。したがって遺構群も検出状況は比較的散漫で溝やピットが中心となり、住居など集落特有の遺構は検出されなかった。以下に検出された遺構のうち主要なものについてその概要を記す。

ピット 検出されたピットは総数約50基で、その大半が調査区内の北半部に集中している。掘立柱建物の柱穴に該当する可能性のあるものはわずかに6基を数えるのみで、その他は平面プラン、断面形状ともにばらつきが激しい。また、調査区北東隅で検出されたピット群は、検出状態では、竪穴住居を構成する可能性も考えられたが、個々の形状がかなり不定形で底部があらゆる方向へ伸張していく傾向にあり、埋土も灰色系の単一層であることなどから、弥生末後に生育していた樹木の痕跡である可能性が高い。ピット群全体の帰属時期は出土遺物から弥生末～古墳前期であることがわかる。

掘立柱建物 掘立柱建物を構成すると考えられるピット群は、概ね直径25cm、深さ30cm程度を測り、桁行2間（柱間約1.4m）×梁行1間（柱間約2m）の建物を想定できる。この小規模な建物は弥生末～古墳前期に構築され、市内でも小曾根遺跡第19次調査をはじめ、同時期、同規模のものが多数検出されていることから、該期の集落で竪穴住居と併存しつつ盛行していたものと考えられる。しかしながらその上部構造や用途については不明であり、今後の類例の増



1. 暗灰色 (N3/0) シルト (～細粒砂)。旧耕作土。 2. 灰色 (7.5Y6/1) シルト (～極細粒砂)。上部に鉄分沈着。マンガン粒多く含む。旧床土? 3. 灰色 (5Y6/1) シルト (～中粒砂)。2～3回の鉄分沈着有り。近世耕作土? 4. 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト (～中粒砂)。3～5は径5mmの礫斑に含む。近世耕作土。 5. 灰色 (5Y6/1) シルト (～中粒砂)。全体に3～10mmの礫多く含む。全体に鉄分沈着。 6. 灰色 (5Y6/1) 細粒砂 (～極粗粒砂)。径10mmまでの礫多く含む。全体に鉄分沈着。しまり不良。 7. 灰白色 (7.5Y7/1) 細粒砂 (～中粒砂)。8層の粘土ブロック含む。8層へ踏み込まれている。しまり不良。洪水層。 8. 灰色 (5Y6/1) 粘土 (～シルト)。鉄分沈着が激しく、全体に黄褐色 (10YR5/6) を呈する。粘性強。 9. 灰色 (5Y6/1) シルト (～粗粒砂)。 10. 灰白色 (7.5Y8/1) 極細粒砂 (～シルト)。11層ブロック含む。11層へ踏み込まれている。洪水層。 11. 灰色 (N6/0) 粘土。粘性強。 12. 灰色 (N5/0) 粘土。部分的に暗灰色を呈し、13層ブロック含む。土器若干含む。自然堆積層が攪拌された様子。粘性強。 13. 暗灰色 (N3/0) 粘土。粗粒砂多く含む。土器片多い。粘性強。弥生包含層、あるいは遺構上部。 14. 暗灰色 (N3/0) 粘土と粗粒砂の混合。土器大量に含む。遺構埋土? 14'. 14層と同様。ややオリブ灰色系。遺物少ない。ベース? 14''. 14層と同様。粘土質。15層へ踏み込まれている。 15. 明緑灰色 (7.5GY7/1) 粘土。ベース層。上部は遺構部分を除き、かなり踏み荒らされた様子。植物が繁茂していた様相有り。 16. 5層と同様。ほとんど礫を含まない。溝? 17. 8層と同様。シルト～粗粒砂多く含む。 18. (5Y6/1) シルト (～細粒砂)。9層に比べ均質で礫が少ない。 19. 灰白色 (7.5Y8/1) 粗粒砂。径5～10mmの礫含む。 20. 青灰色 (10BG6/1) 極細粒砂 (～細粒砂)。洪水層? 21. 17層と同様。シルト質で均質。畔? 22. 灰色 (N4/0) 粘土。明青灰色 (10BG7/1) 粘土ブロック20%含む。土器多量に含む。炭微量混入。 23. 灰色 (N5/0) 粘土。明青灰色 (10BG7/1) 粘土ブロック40%含む。 24. 灰色 (N5/0) 粘土～シルト。明青灰色 (10BG7/1) 粘土ブロックわずかに含む。炭微量に含む。 25. 灰色 (N5/0) 粘土～シルト。灰白色 (N7/0) 粘土～シルトブロック20%含む。 26. 灰色 (N4.5/0) 粘土。明青灰色 (10BG7/1) 粘土ブロック5%含む。13層への踏み込みの土が上部に少量混入。 27. 26層と同様。酸化激しい。土器含む。 28. 灰色 (N6/0) 粘土。明青灰色 (10BG7/1) 粘土ブロック60%含む。 29. 暗オリブ灰色 (2.5GY3/1) シルト灰色 (N6/0) 粘土の混合 (6:4)。 30. 灰色 (N6/0) 粘土。明青灰色 (10BG7/1) 粘土ブロック70%含む。 31. 明青灰色 (10BG3/1) 粘土～シルト。中粒砂15%含む。底部にベース層ブロック含む。土器含む。 32. 灰色 (N5.5/0) 粘土。細～中粒砂微量に含む。 33. 暗緑灰色 (10GY3/1) シルト～粘土。 34. 灰色 (N4/0) 粘土～中粒砂。全体に砂質だが、しまり良好。 35. 灰色 (N3.5/0) 粘土と灰色 (N5/0) 粘土の混合土。細粒砂微量に含む。土器含む。 36. 灰色 (N4.5/0) 粘土。細粒砂微量に含む。
- ※22～25は溝6 (弥生末～古墳前期・銅鉄出土)、32～34は溝9 (古墳中～後期・製塩土器、土玉出土) の埋土。



第 35 図 調査区平面・断面図 (1 : 80)

加をまって検討すべき課題である。

溝 調査区内では溝（溝状遺構を含む）が約20条検出された。平面プランや深度にはばらつきがあるものの、概ね北半部で検出された溝は弥生末～古墳前期、南半部では古墳中期～後期の時期に限定されるという特色がある。

調査区北半部では、北壁中央部から東西方向に湾曲しながら分離していく溝が、若干の時期差を持ちながら重複して検出されている。東南方向に湾曲する溝は幅約1.5mの浅いもので、最も掘削時期がさかのぼる。この幅広い溝に重複するように数条の溝が検出されている。これらは幅が30cm前後と比較的細い溝で、その湾曲の円弧から竪穴住居を囲繞する溝、もしくは竪穴住居の壁溝そのものである可能性が考えられるが、ピットの項目で前述したように溝の内側に住居を構成する要素が明確に検出されなかったことなどから、その性格を限定的に捉えることはできなかった。

調査区のほぼ中央付近で東西方向に直線的に掘削されている溝は、幅約1.6m、深さ約30cmを測り、初期段階での断面形状は掘り鉢状であったが、埋没過程で再掘削された結果、中央の窪んだ二段掘りの形状を呈するようになったと推測される。この溝は今回の調査で最大規模の溝であり、ここを境として遺構に時期差が存在することなどから勘案しても弥生末～古墳前期の集落域を画する機能を有していたと考えてよからう。なお、この溝の東端部分から大型の腸袂式柳葉形銅鏃で鋳型の范が表裏ですれており、近接する第1次や第18次調査地点で検出された銅鏃群との関連性が注目される。

調査区南半部では、不定形（幅約1m～0.5m）で浅い溝が数条検出されている。指向する方向もまちまちで直角に屈曲するものや緩やかに湾曲するものなどがある。これらの溝はその埋土が弥生末～古墳前期のものとは明らかに異なり、前者が暗褐色～黒灰色系のシルトを中心とするのに対して、灰褐色系の粗粒砂（シルトブロック混じり）で構成されている。また、これらの溝の埋土中には多くの土器破片を含むが、ほとんどが細かく粉碎されたような状況を呈しており、弥生末～古墳前期の溝群では、自然に埋没していった過程の最終段階に土器が廃棄されたような状況を呈するのとは質的に差異がある。溝の底部もかなり凹凸があり、通常の溝とはかなり異なった印象を与えるが、同様の遺構は近辺では検出されていない。出土遺物には製塩土器、須恵器杯、土玉などの他、小型の柳葉形銅鏃がある。近接する第1次調査地点では古墳後期の小円墳が検出され、第16次調査地点では勾玉などが出土しており、一般的な集落というよりも、墓域としての展開を考える資料として位置づけた方が理解しやすい。

土坑 調査区内ではごく浅い落ち込み状の遺構を除いて、4基の土坑が検出された。各々が直径約1m程度の不定な楕円形をなし、深さ約20cm程度を測る浅い掘り鉢状の形状である。このうち、3基は北半部で検出されており、時期も弥生末～古墳前期に該当する。残り1基は南半部に位置し、須恵器が出土している。北半部の土坑のうち、2基は溝と重複関係にあるが、断面精査の結果、幅の広い溝が埋没した後に土坑が掘削されていることが確認された。

(3) 出土遺物

出土遺物は概ね弥生末～古墳前期、古墳中～後期に分かれる。各遺構の埋土上層には、耕作その他による上位包含層の踏み込み等によって、希に新相遺物の混入が見られるが、記述の便宜上その帰属時期に一括して報告する。

弥生末～古墳前期 1～32は主として調査区北半部の包含層と遺構から出土した。畿内V様式末～庄内併行期（一部に布留期含む）にかけての遺物群であり、純粋な畿内第V様式はほとんど含まない。ただし、6、18は畿内第IV様式末～V様式初頭頃に位置づけられる可能性がある。

1～9は甕形土器とその底部、脚部である。口縁端部の形状にバラエティが見られ、摂津地域に普遍的な受け口状口縁（やや退化傾向）の4や近江～山城地域の影響下で産出された5などを含む。10・11は甕として利用された甕形もしくは鉢形土器の底部である。

12～20は壺形土器である。12・13は小型の直口壺であるが、この種の小型器種は周辺での既往の調査でもかなりの出土例が知られ、当該時期に特徴的な形式をなす。16は二重口縁壺であるが、形態的にはここに掲載した土器群の中でも最新相をあらわす可能性がある。19は他にあまり例を見ない特殊な形態の壺で、20は頸部が比較的短い長頸壺である。

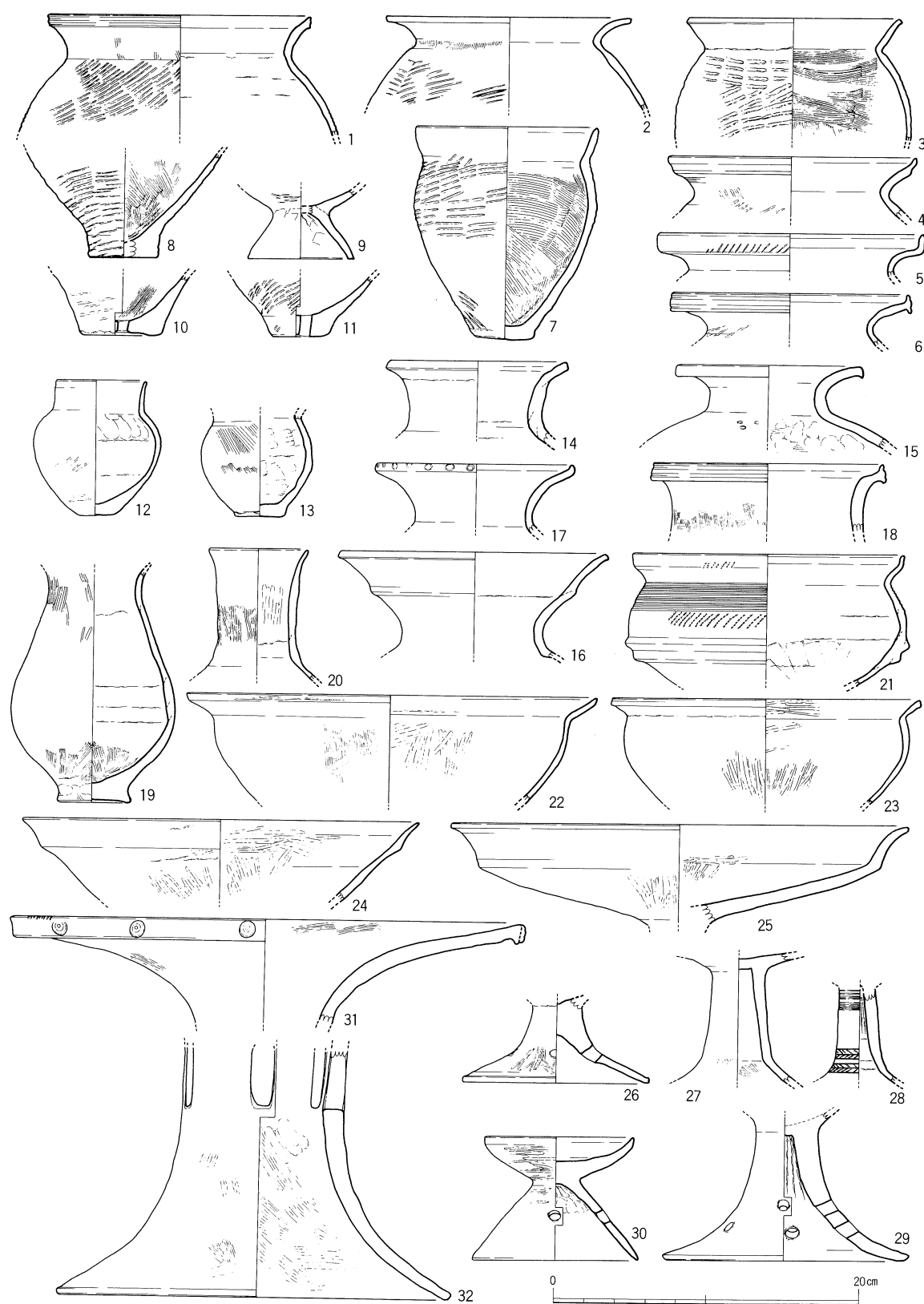
21～24は鉢形土器である。21はその装飾等から近江系であることがわかるが、形態の特徴から類推すれば手焙形土器に復元される可能性がある。24は器壁が薄いつくりにもかかわらず、口径の大きな鉢で、市内での類例は知られていない。

25～29は高杯形土器である。26は円形の透孔を四方向に穿つが、29では上下二段三カ所ずつで六方向に穿って装飾性を高めている。28は小型の高杯であるが脚上部に四条一帯のヘラ描直線文帯が二帯、脚屈曲部にヘラ描綾杉文帯が二帯施されている。

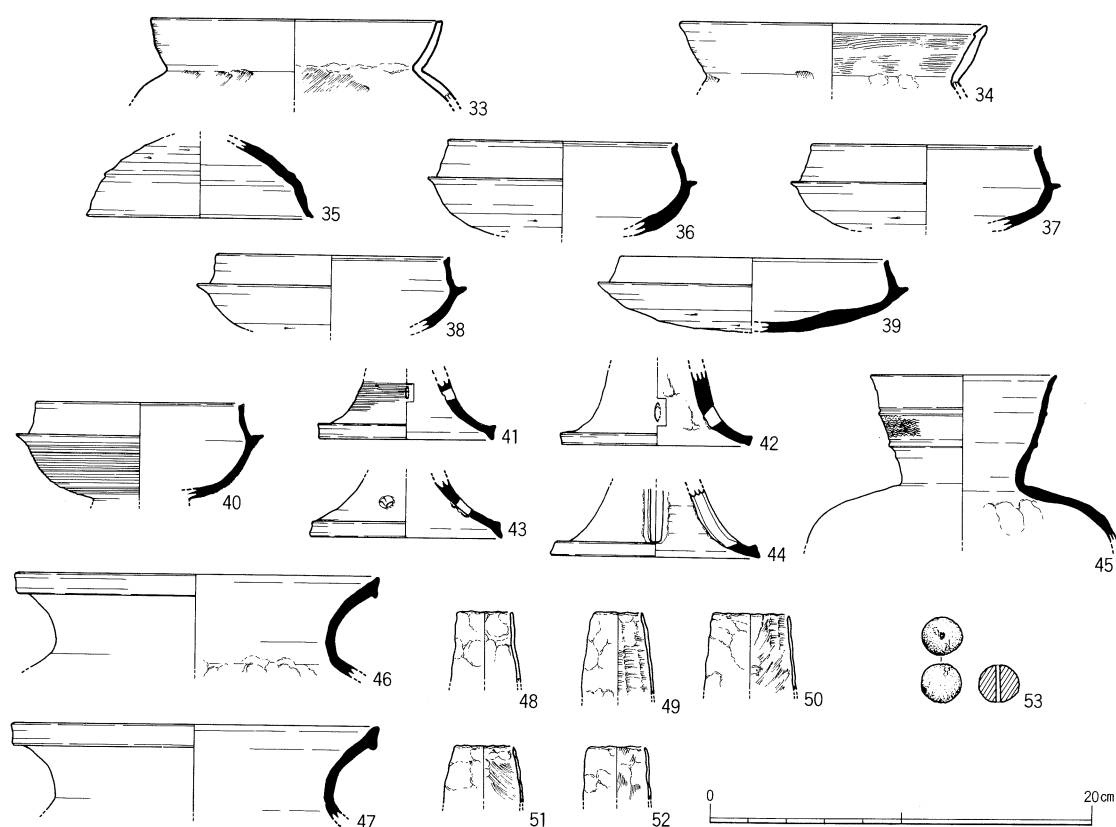
30～32は器台形土器である。30は小型器台であるが口縁端部を比較的シャープに仕上げ、正三角錐形の整った脚部を持つもので、16の二重口縁壺とともに新相をあらわす。透孔は三方向である。31・32は大型の装飾を持つ器台で、32には長方形の透孔が六方向に穿つ。

古墳中～後期 33～53は主として調査区南側の包含層、溝から出土した遺物である。須恵器が中心となるが、蓋杯の受部やたちあがり等の形状と成形技法、高杯脚端部や透孔の形状、直口壺、甕などの示す形態的特徴すべてが、中村編年のI型式3段階、田辺編年のTK208型式を前後する時期に該当する。これらの須恵器群は当市桜井谷窯跡群における須恵器生産開始直前の段階に大阪府南部の陶邑からもたらされたものと考えられ、この段階からの陶邑での生産拡大や当市への須恵器生産波及の流れを考える上で貴重な資料である。33・34の土師器にも同時期の特徴を捉えることができる。ただし、39はその形態から古墳後期のものと考えられ、該期の遺構も存在したことを示唆している。

48～52は製塩土器で、須恵器群と同様の時期の所産である。各個体とも二次的な焼成を受けている。南方の海岸線地域に隣接する集落との交易を物語る資料であろう。



第36図 出土遺物1 (1:4)



第37図 出土遺物2 (1:4)

3. まとめ

今回の調査では、弥生末～古墳前期にかけて拠点的な集落として機能していた穂積遺跡の東端部の様相を垣間みることができた。それはピットや溝の分布密度に見られるように若干の時期差があり、重複関係があるにもかかわらず、希薄な状況であることに如実に示されている。実際、阪急電車宝塚線を東側に越えると、弥生～古墳の遺構は全くといって良いほど検出されない。試掘のデータ等から想起される原因は、おそらく自然環境的な問題にほかならないであろう。集落の中心地である第1次や第19次調査地点では、ベース層が分厚いシルトで構成されるのに対して、当該調査地ではシルト層が非常に薄く、直下に水分を大量に含んだ砂礫層が存在している。この砂礫層は天竺川の氾濫原に広く堆積するものと考えられ、常に洪水にみまわれていたに違いない。対照的に集落の中心地は氾濫原の西外側にできた自然堤防上に立地しているものと考えられ、シルトの堆積層厚分だけ、周辺よりも遺構面の標高が高いことがその蓋然性を指し示している。今後、当該調査地の西側での調査には留意する必要があるだろう。

一方、古墳中期～後期の遺構もその存在が確認された程度に留まり、何らかのまとまった性格を提示するにはいたらなかったが、出土遺物から当市北部に存在する桜井谷窯跡群成立以前の須恵器流通において、大阪府南部の陶邑古窯址群と市域の遺跡がどのような関係にあったかを示唆する資料を得られたという点では非常に意義深かったと言えよう。

第V章 穂積遺跡第23次調査の概要

1. 調査の経緯

当調査地点は服部元町1丁目71-1にある。当地は穂積遺跡の範囲内にあったため、共同住宅建設にともない、試掘調査が行われた。その結果、当地に遺構が存在することが確認され、発掘調査が行われることとなった。調査期間は1997年5月7日から6月24日である。なお、廃土を置く場所がないため、調査区を南北に2分して調査を行った。調査面積は170㎡である。

2. 既往の調査

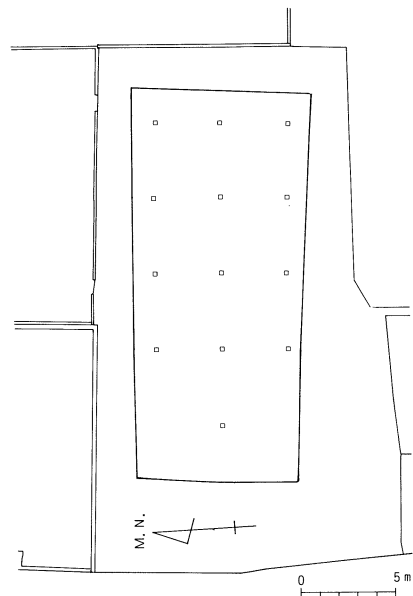
穂積遺跡は阪急宝塚線服部駅の西側を中心に東西1km、南北約700mにわたって広がる標高約4mの沖積地に存する遺跡である。近年の住宅の高層化に伴い、事前の発掘調査が重ねて行われており、今回で23次を数える。穂積遺跡は、縄文時代から中世にわたる複合遺跡であるが、特に、弥生時代後期・古墳時代後期ならびに鎌倉時代の遺構・遺物が検出されることが多く、当地は当該期にひとびとの活動が盛んだったことがわかる。特に、弥生時代後期の遺構密度は高く、この地に大規模な集落が営まれていたことが推測される。18次調査で出土した連鑄式銅鏃は当地で青銅器の生産が行われていたことを明らかにしたが、このことは穂積遺跡が一大拠点集落であった可能性を強く支持するものである。

その一方で、中世の集落は明らかでないことが多い。1次・4次・5次調査では鎌倉～室町時代、3次・4次調査では平安時代の掘立柱建物・井戸などの集落に関わる遺構が検出されており、このことから平安期以降の集落は穂積遺跡の東半を中心に展開していると考えられる（第34図）。しかし、調査面積が限られており、穂積遺跡における中世村落の様相はほとんど明らかでない。

3. 調査の成果

(1) 基本層序

当調査地点の現地表は、海拔約4.5mを計る。そこから40cmあまり地下で旧耕土層が存在する。その直下に灰オリーブ色（7.5Y6/2）の薄いシルト層を挟んで灰オリーブ色（7.5Y6/3）シルト層が認められた。遺構は基本的に2枚の灰オリーブ色シルト層の上面から掘削されていることが観察され、少なくとも2時期以上の遺構が存在することがわかる。



第38図 調査範囲図(1:400)

(2) 検出した遺構

前述のように遺構面は少なくとも2面確認されている。しかし、本調査では両面の遺構ともに、下面の灰オリーブ色（7.5Y6/2）シルト層上面で遺構を検出している。検出された遺構は、溝8条・土坑5基・井戸2基・建物6棟・柱穴を含むピット150個余りである。掘立柱建物と多数のピットの数から、当地に繰り返し住居が営まれたことが理解される。以下に主な遺構について記述を進める。

井戸1 調査区の東南に位置する楕円形の素掘りの井戸である。溝2によって破壊されているため、大きさは推測に頼らざるを得ないが、おおよそ直径2.8m、残存した深さ75cmを計る。井戸の中から瓦器碗や木製の下駄が出土している。

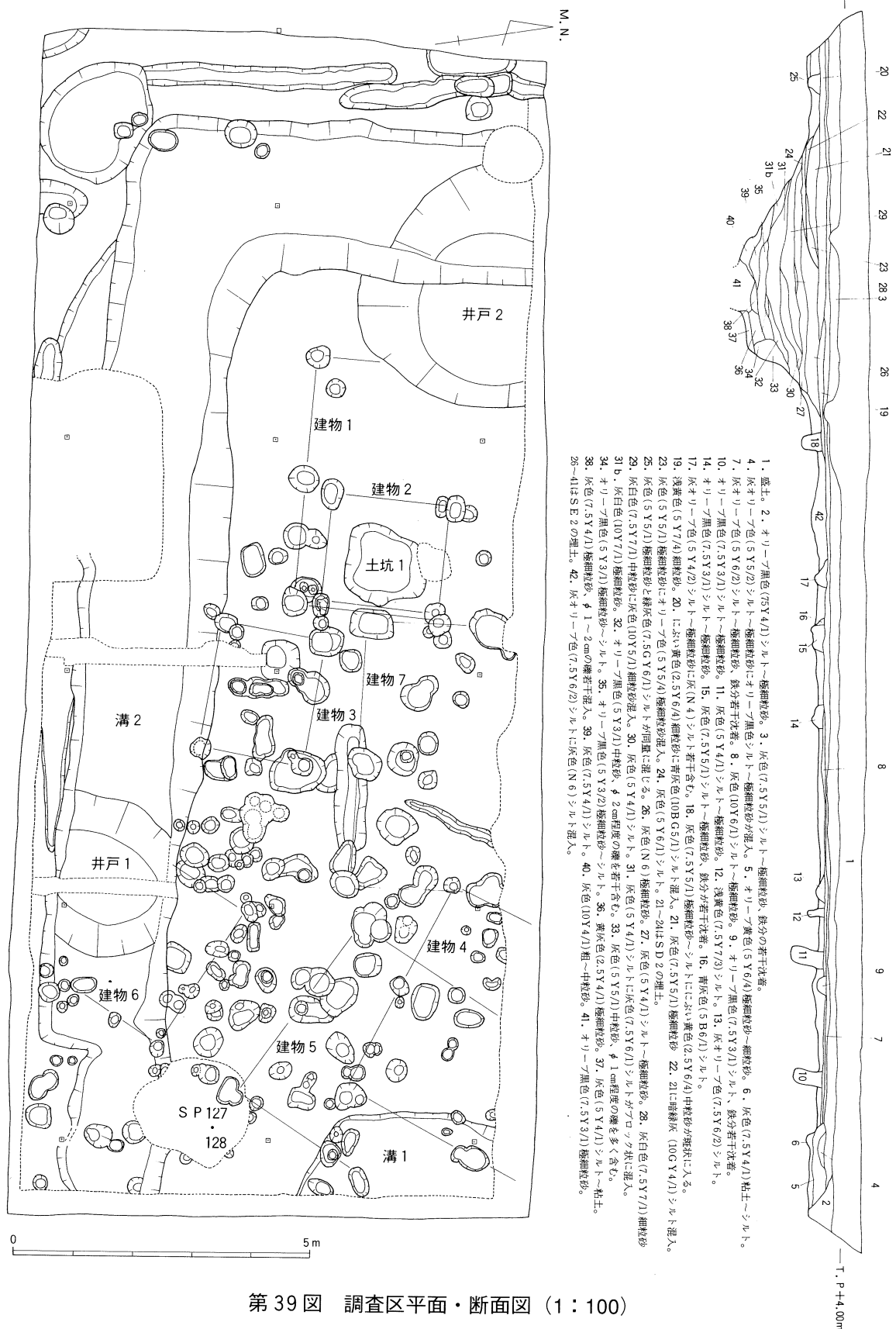
井戸2 調査区の北西端から検出された。掘り方の形状は円形で、検出した状態で直径約4m・深さ1.6mを計る。掘り方の断面を見れば、T.P.+2.2mで掘り方の傾斜がいったん緩くなる。この傾斜が緩くなった部分に井戸枠が配されている。井戸枠はかつて方形を呈していたと思われるが、土圧で西側の板材が井戸の内側に押し出されている。井戸枠の南辺の長さは2.3m、高さ40cmを計る。井戸枠を構成する木材には、杭やホゾ穴があいた板材などの転用材が用いられており、粗雑な作りである。井戸枠の内側は傾斜を急にして深く掘り下げられている。埋土中から瓦器碗や土師皿が出土している。瓦器碗は11世紀末から12世紀後半まで時期幅を示しているが、12世紀前半頃の土器が主流を占めている。

溝2 幅2.2～2.6m、深さ25cmを計る溝である。調査区の南側では、溝はおおよそ東西方向に走り、調査区の東側で直角に北へ屈曲する。調査区のすぐ西側では、旧能勢街道が南北に通っており、溝の方向はこの街道に規制された可能性がある。井戸1および2埋没後、掘削が行なわれている。溝中からヘソ皿を含む土師皿多数と貿易陶磁と思われる小碗が出土している。土器の出土状況を見ると南辺からの出土が多く、西側からの出土は南側に比べて少ない。後に述べるように、これらの土器は15世紀前半、室町時代に属すると推定される。

このように、井戸と溝2の重複関係・先後関係から、この調査区には少なくとも2時期以上の遺構が存在していることが分かる。

次に、掘立柱建物について考えてみる。掘立柱建物は、主軸の傾きが東西あるいは南北にはほぼ平行する建物1・2・3・7と、主軸方向がそれらとはズレを見せる建物4・5・6とに分けることができる。前者は、建物を構成する柱穴がやや大形であるのに対し、後者の柱穴は小さい物が多い。どの建物の柱穴からも、11世紀後半から12世紀後半までの瓦器や土師器しか出土していない。ただ、建物1・2・3・7が溝2と主軸を同じくすることを考えると、溝2が掘削された時期に近い建物である可能性がある。

建物1 調査区の北半に位置する東西方向2間（4m）・南北方向1間以上の掘立柱建物である。柱間は東西方向2m・南北方向2.4mを計る。主軸はN77°Wである。柱穴の大きさは直径46cmで円形を呈し、深さは25～30cmである。建物2と重複するが、建物1が後出する。



第39図 調査区平面・断面図 (1:100)

建物2 1間×1間の建物である。柱間は約2m。主軸は、建物1とほぼ同じくする。柱穴は楕円形で、その規模は長軸35～45cm・短軸30cmを計る。土坑1が建物2の中心に位置するが、その関係は不明である。

建物3 同じく1間×1間の建物である。柱間は東西方向2.2m・南北方向1.8mを計る。主軸はN72°Wである。溝2と重複関係にあるが、この建物が後出する可能性が高い。

建物4 調査区の北西隅に位置する。東西方向2間(4m)・南北方向2間以上の掘立柱建物である。柱間は東西方向が2m、南北方向が2.4mである。直径25cm程度の円形の柱穴から構成される。主軸はN54°Wで建物1～3と大きくズレをみせる。

建物5 建物4と重複する建物である。東西方向2間(3.8m)・南北方向2間以上の掘立柱建物である。柱間は東西方向が1.9m、南北方向が2mである。建物4より小さめであるが、その規模・ピットの形状がよく似る。南辺の3つの柱穴は、それぞれ掘りなおされた状況が認められ、建て替えがあったことを示している。

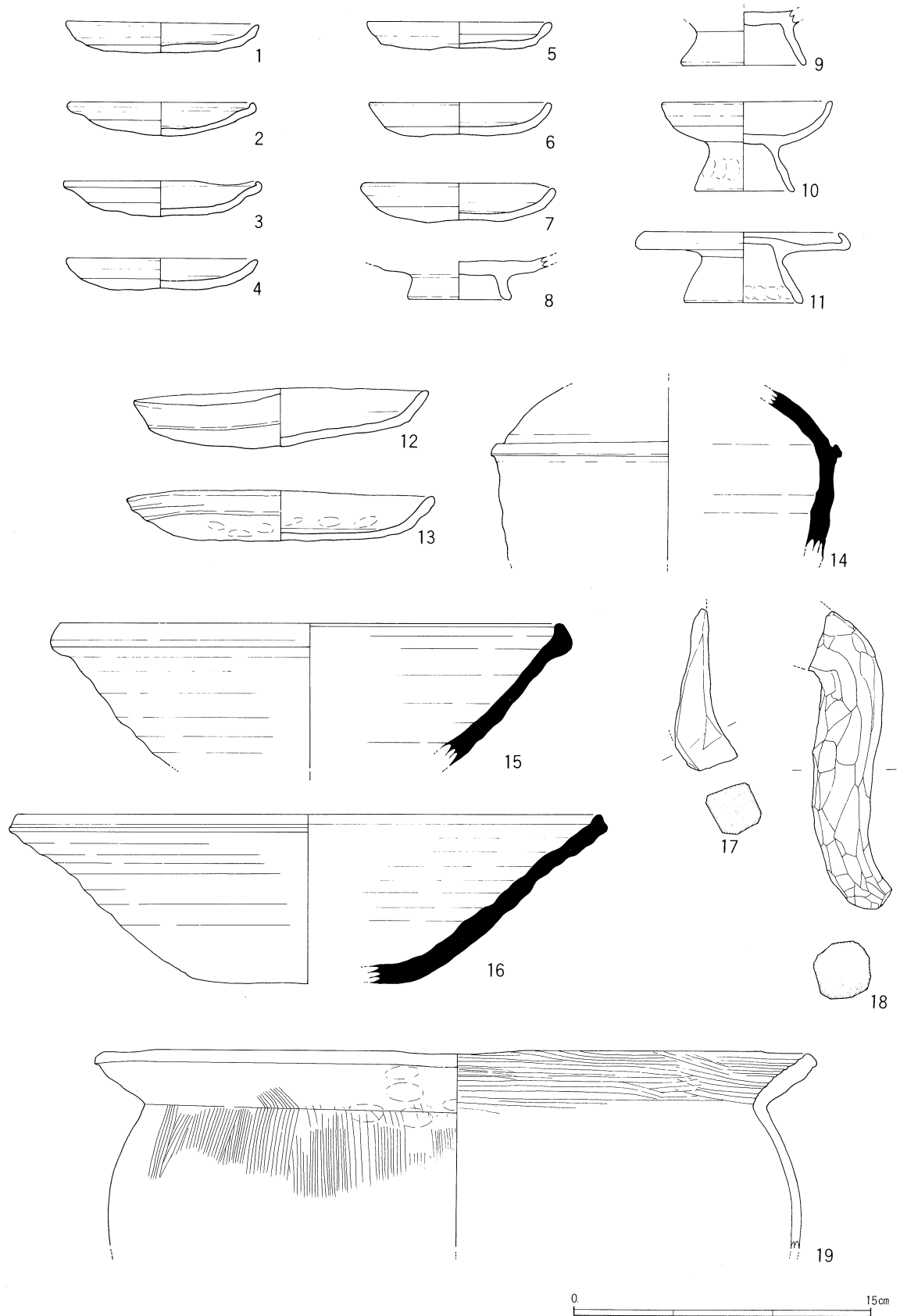
建物6 東西方向3間(3m)・南北方向2間以上の建物である。柱間は東西方向が1m、南北方向が0.8mである。直径20cm程度の円形の小さいが深い柱穴から構成される。建物5とほぼ主軸を同じくする。

建物7 調査区中央に位置する。東西方向2間(4.6m)・南北方向1間以上の建物である。柱穴は1辺40cm余りの方形のピットで、深さ50cmを計る。主軸は建物1とほぼ同じくし、溝2と平行する。溝2は屋敷地を区画する溝の可能性があり、建物1や7は、そうした敷地の建物の1つである可能性が高い。

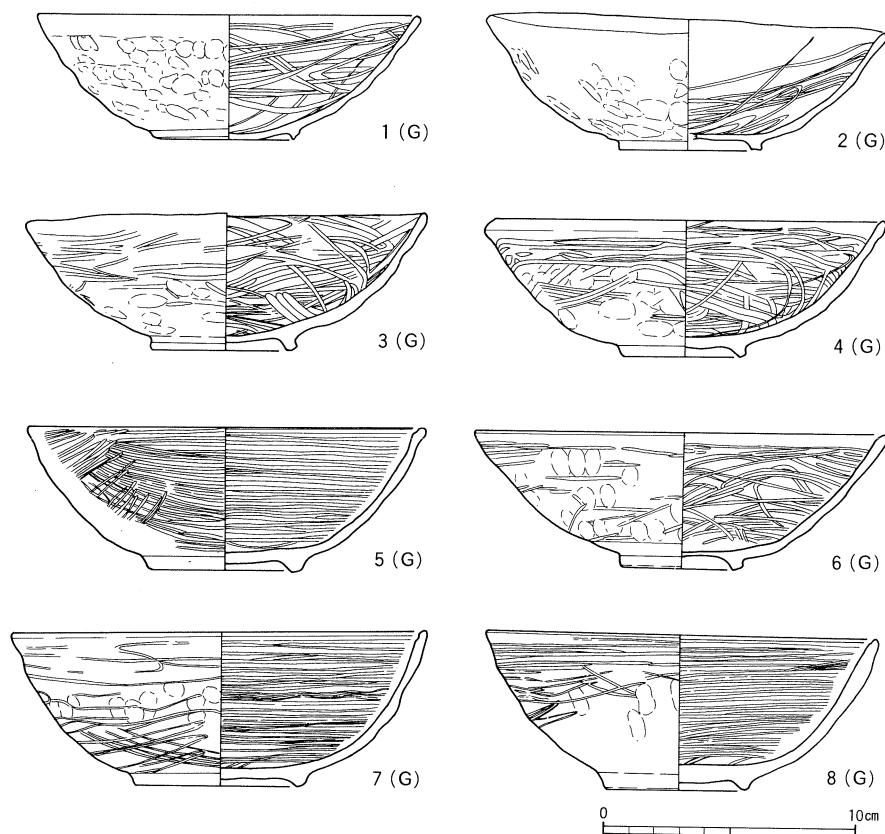
(3) 出土遺物

今回の調査では、溝・井戸・土坑などから多くの土器が出土している。その中でも特に溝2と井戸2からまとまった量の土器が出土している。ここでは、この2つの遺構から出土した土器を中心に報告を行なう。

井戸2出土遺物 井戸2からは瓦器・土師皿・鉢などが出土している。遺物は、31層(第39図)上面を境に上・下の2つに分割して採集を行なっている。第40図には瓦器碗以外の土器を図示した。5・10・14・15・16が上層からの出土で、それ以外は下層からの出土である。土師皿の中には小形の土師皿・台付の土師皿、大形の土師皿が出土している。2・3の口縁はいわゆる「ての字状」を呈する。2は灰白色(2.5Y8/1)、3は浅黄色(10YR8/4)を呈する。8～11は台付の土師皿である。12・13は大形の土師皿である。直径14.6～15.0cmを計る。ともに外面底部に指頭圧痕を残す。口縁部から内面にはヨコナデが施される。14は魚住の壺である。直径17cm、肩部に一条の突帯が付加される。15・16は須恵質の鉢である。15は直径25cm・高さ7cm以上、16は直径29cm・高さ8.5cmを計る。両者ともに、内外面は丁寧なヨコナデが施される。18は何らかの脚部である。胎土はきわめて精良で、灰白色(5Y8/2)を呈する。鍋などの日常雑器ではなく、盤などの脚部の可能性がある。17は18と同じ胎土・色調をしており、



第40図 井戸2出土遺物1 (1:3)



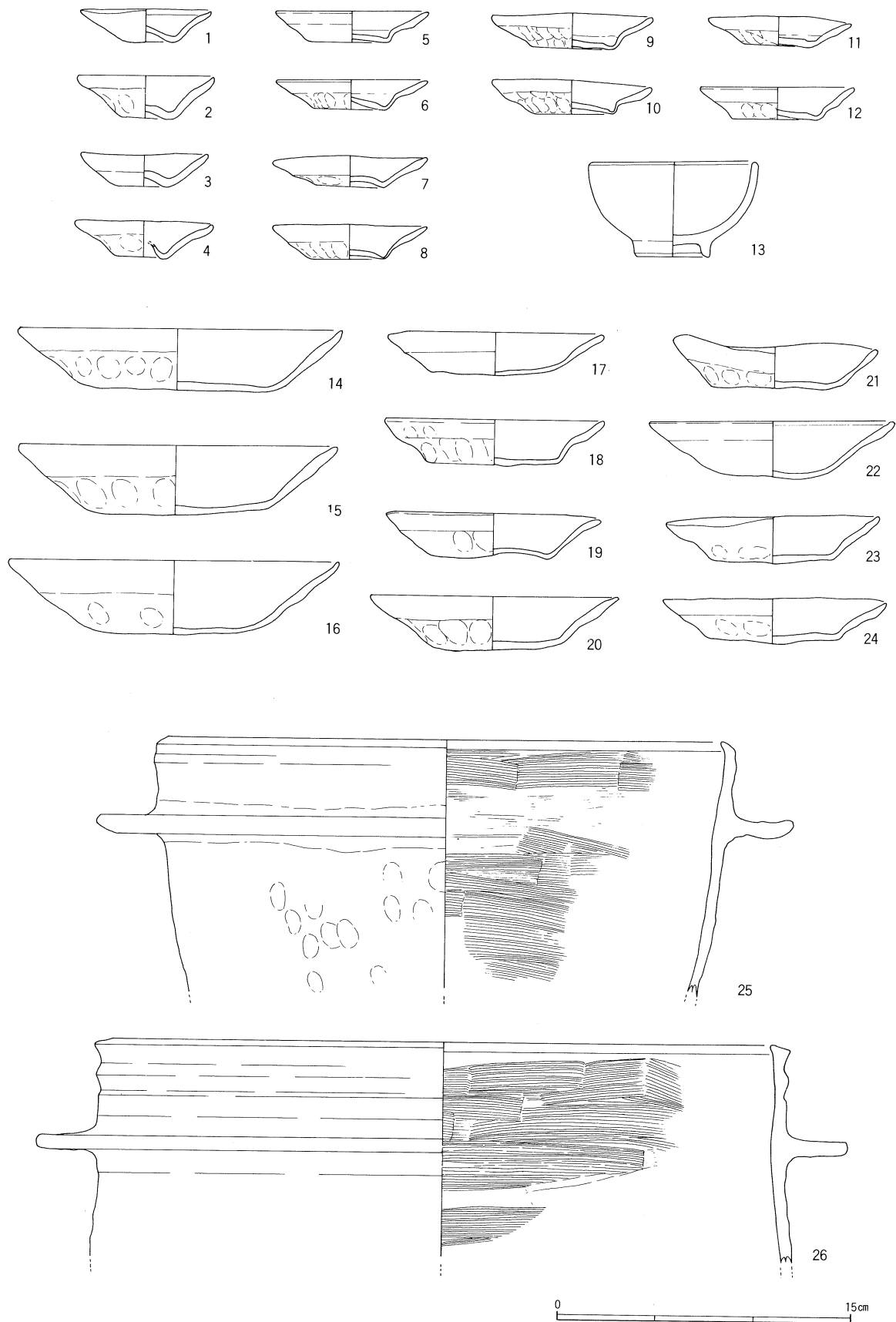
18と同一個体の装飾部と考えられる。19は土師器の甕である。直径36cm。外面はタテハケ、口縁部内面は横方向に荒いハケが施される。外面は ススが付着し、2次的に火を受けたことを示す。

第41図は瓦器碗である。このうち1・2は上層、3～8は下層から出土した。1・2は和泉型瓦器碗であろう。口径はそれぞれ14.9cm・15.6cm、器高は

第41図 井戸2出土遺物2 (1:3)

5.0cm・5.4cmを計る。外面にはヘラミガキがまったく行なわれず、内面のヘラミガキも疎らである。これらの特徴からⅢ-1期に相当するものと思われる。3・4・6も和泉型と考えられる個体である。口径は15.7～16.0cm・器高5.4～5.5cmを計る。ゆるやかに外湾し、端部は丸く納める。外面調整はヘラミガキが施されているものの分割性は明瞭でなく、いずれも粗く研かれており、形成時のユビオサエの痕跡が目立つ。内面は、若干の隙間はあるものの、密なヘラミガキが認められる。Ⅱ-2期に相当しようか。和泉型以外では楠葉型と考えられる個体がある(5・7・8)。いずれもゆるやかに内湾する器形で、口縁端部をヨコナデし、内面に沈線を施す。Ⅰ期からⅡ-1期に相当するものと思われるが、5は特に古相を呈する。すなわち、外面には分割ヘラミガキがきわめて密に施され、一部は高台付近までヘラミガキが及ぶ。内面も細い圈線ヘラミガキが隙間なく施される。見込みにはジグザグ状のミガキが認められる。Ⅰ-2期あるいはⅠ-3期に属するものと思われる。この個体は井戸の下層の中でも、井戸底に近い部分で出土しており、その点で他の下層出土土器とは区別される。他の下層出土土器より若干古い様相を示すのは、井戸に廃棄された時期差を示すものかもしれない。7・8はⅡ-1期に属するものと考えられる個体である。外面のヘラミガキは疎らであるが、下半まで分割ヘラミガキが及ぶ。内面はヘラミガキが隙間なく施され、見込みにジグザグ状のミガキが認められる。このように、上層からはⅢ期に下る瓦器が含まれるが、下層出土の瓦器はⅠ～Ⅱ期の範疇に収まり、時期差を示す。

溝2からは多くの土師皿が出土している。1～4は底部に突出部をもつ、いわゆる「へそ皿」である。直径6.6～6.8cm、器高1.7～2.1cmを計る。4はきわめて器壁が薄く、突出が著しい。



第42図 溝2出土遺物 (1:3)

5～12は小形の土師皿である。口縁部径7.1～8.0cm、器高1.5～1.8cm。底部を指でおさえることによって、見込みが内側へせり上がるが、1～4ほど顕著でない。外面の下半は指頭圧痕が残り、底部と体部に明瞭な段を有する。口縁部と内面はヨコナデが施される。見込み部がせり上がり、体部と見込みの境界を強くなでることにより、見込みの周囲に幅3～4mm・深さ2～3mmの溝状の段が形成される。

土師皿に混じって、貿易陶磁と思われる小椀が出土している(13)。この個体は、口縁部径8.2cm、器高4.9cmを計るほぼ完形の椀である。内外面ともに明緑灰色(7.5Y8/1)を呈し、断面はにぶい黄橙色(10YR7/4)の色調を呈する。北宋官窯産の可能性がある。

14～16は深身の土師皿である。口縁部径16.3～16.6cm、器高3.1～3.9cmを計る。外面下半はユビオサエが認められ、口縁から内面にかけてはナデが施される。15は灰白色(10YR8/1)を呈し、外面の底部から口縁に至る体形がなだらかであることから京都系の土師皿と考えられる。17～24は中形の土師皿である。口縁部径11.0～12.6cm、器高2.1～2.6cmを計る。この土師皿の多くは外面下半にユビオサエの痕がみとめられ、底部から体部にかけて明瞭な段を残す。ただ、20と22は、段が明瞭でなく、底部から口縁までスムーズにつながる。色調も他と異なり灰白色(10YR8/2)を呈する。他が在地産の土師皿、これらは京都系の土師皿と考えられる。25・26は羽釜である。ともに瓦質で、外面はナデ、内面は細かいヨコハケが施される。このほか、回転台土師器や柄付片口の柄部が出土している(図版21)。これらの遺物は、おおむね15世紀前半頃に位置づけられよう。

4. まとめ

今回の調査では、穂積遺跡の中世集落の一端を垣間みることができた。今回の調査をまとめるならば以下のようなろう。

- ①7棟の建物跡を検出した。これらの中には、遺構の検出状況や出土遺物から見ると11世紀末から12世紀末葉と15世紀前半の2時期以上の遺構があることがわかる。
- ②溝2は屋敷地を区画する溝の可能性があり、建物配置とともに、室町時代の屋敷を考える上で重要である。今後の検討課題としたい。
- ③井戸および溝より良好な土器資料を得ることができた。豊中における中世の土器資料は十分でなかったが、今回出土した資料は、豊中における土器編年や土器の流通のあり方などを語る上で重要である。

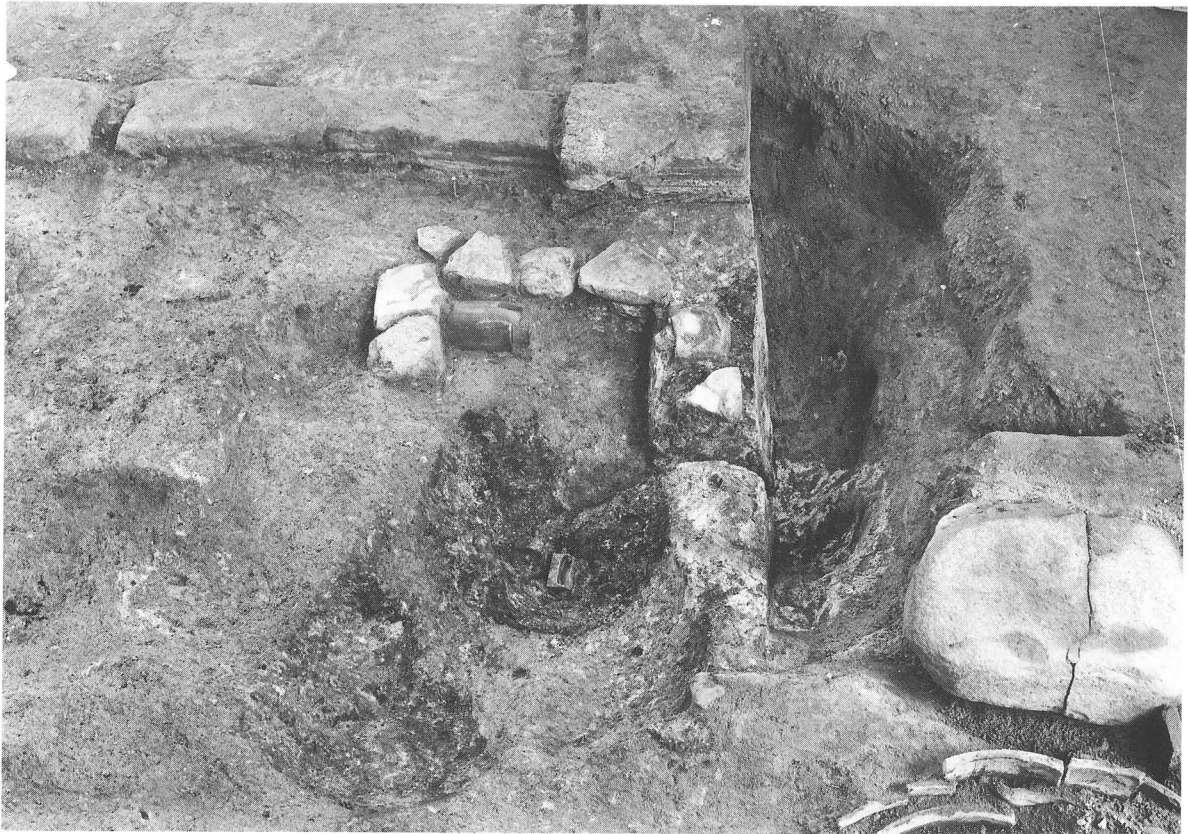
図 版



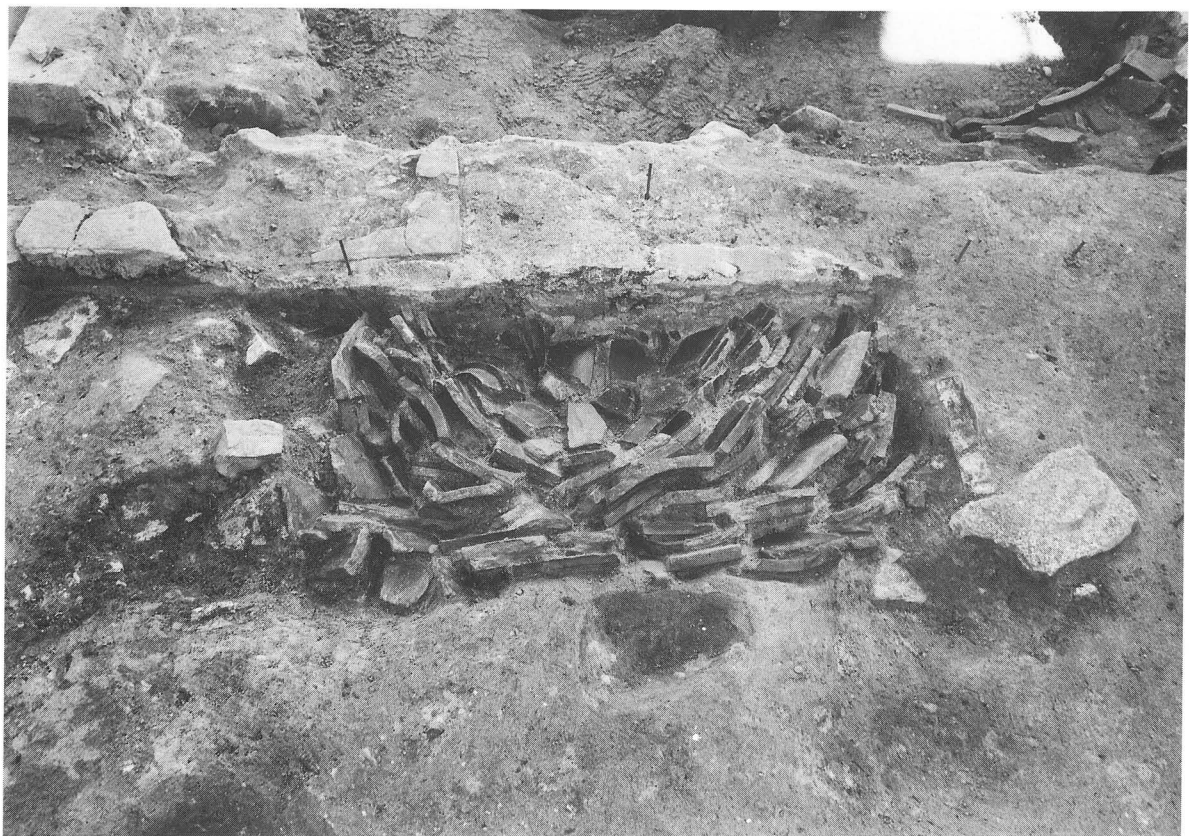
(1) 調査区全景 (1～2期)



(2) 調査区全景 (4期)



(1) カマド1～4



(2) 洗い場1



(1) 埋納遺構



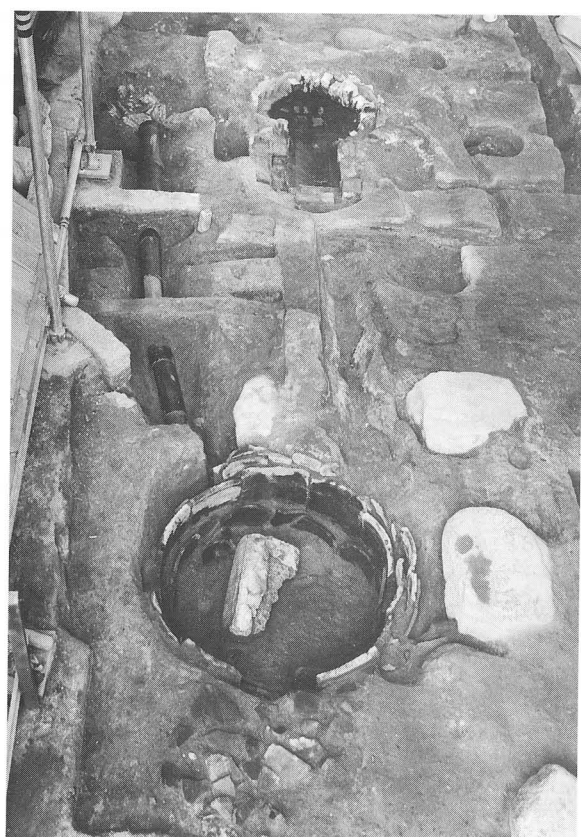
(2) 瓦組（雨落ち）2



(3) 瓦組（雨落ち）2



(1) 風呂釜 3



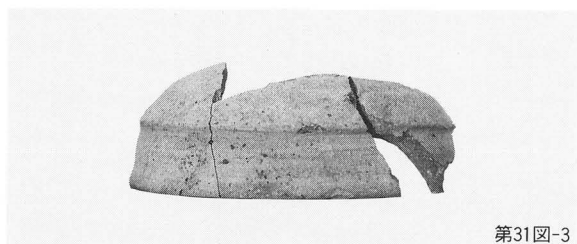
(2) 集水槽・風呂釜 3



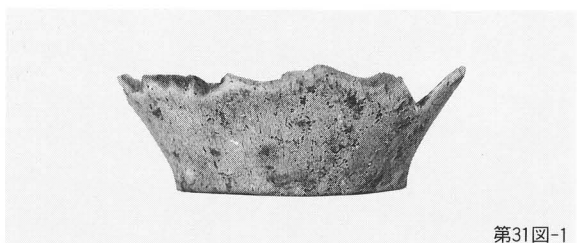
(3) 瓦組 1



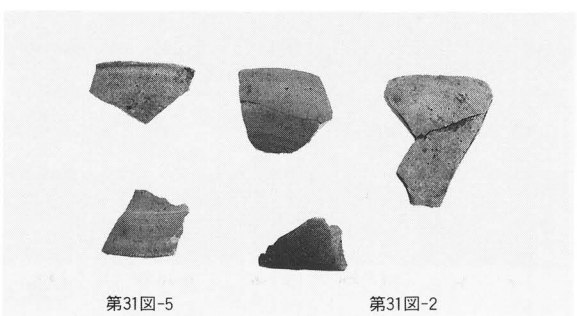
(1) 調査区全景



第31図-3

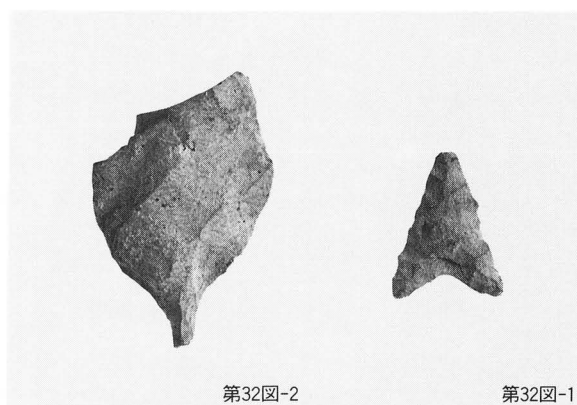


第31図-1



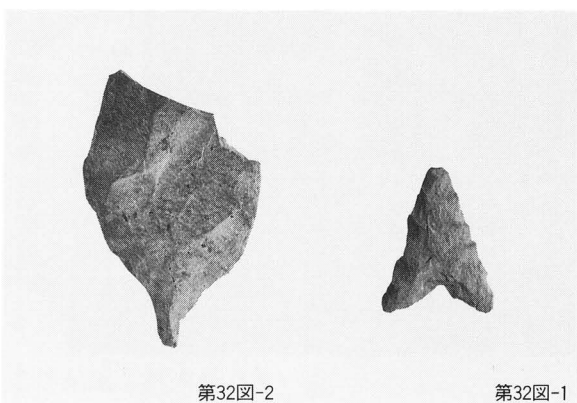
第31図-5

第31図-2



第32図-2

第32図-1



第32図-2

第32図-1

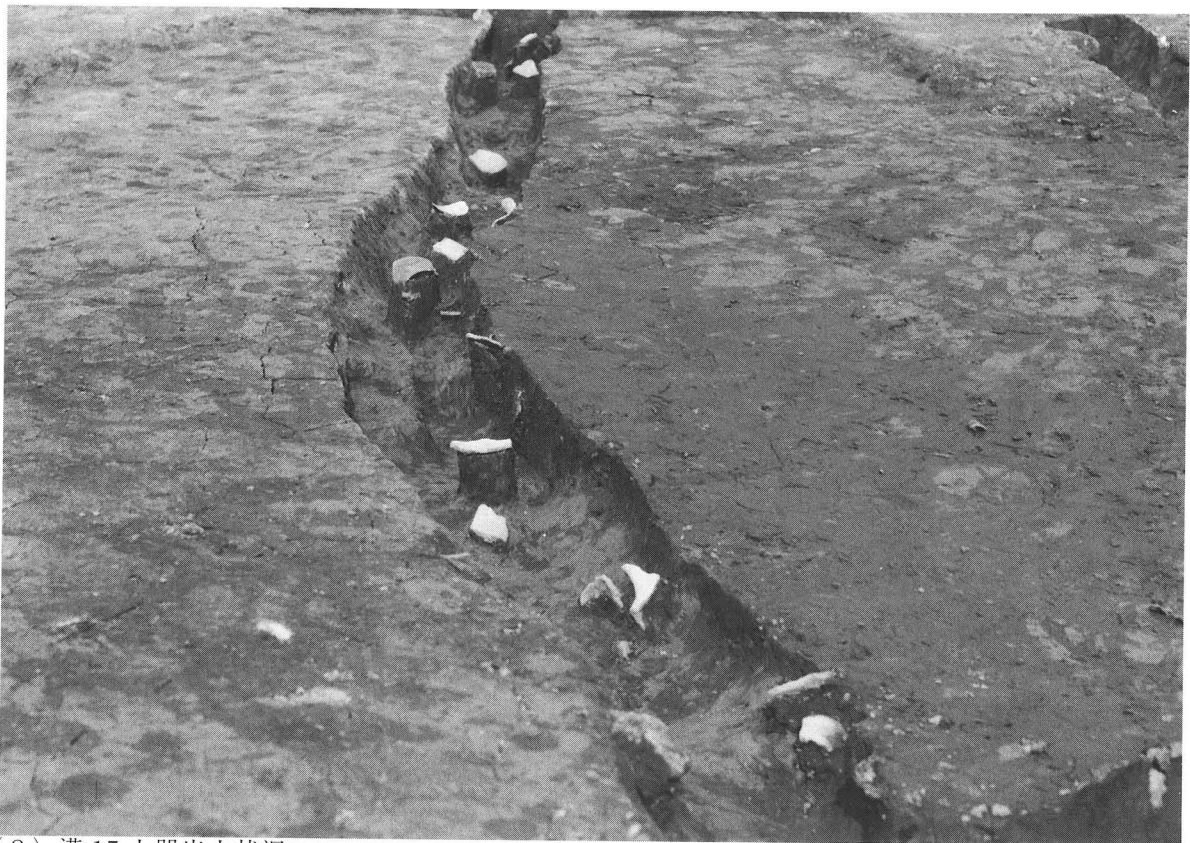
(2) 出土遺物



(1) 調査区全景



(1) ピット 11 土器出土状況



(2) 溝 15 土器出土状況



(1) 溝6銅鏃出土状況



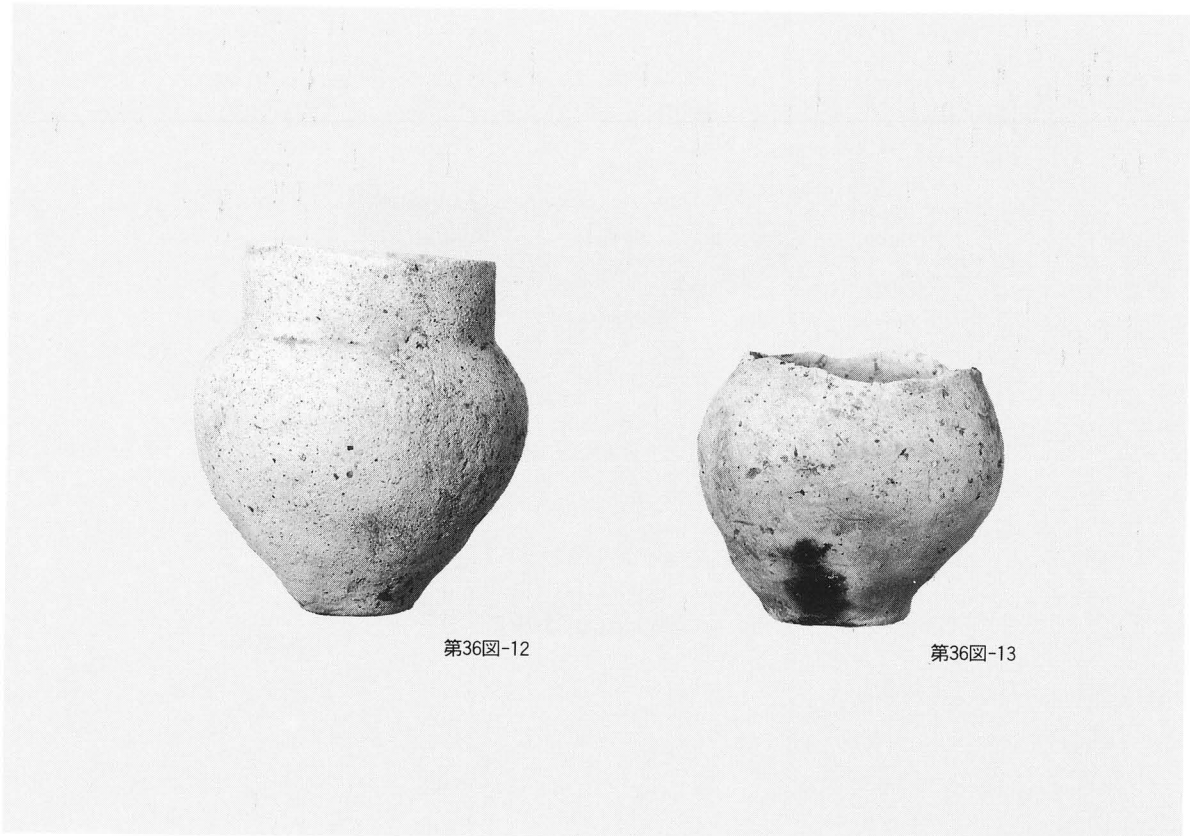
(2) 溝6断面



(1) 調査区北東端遺構完掘状況



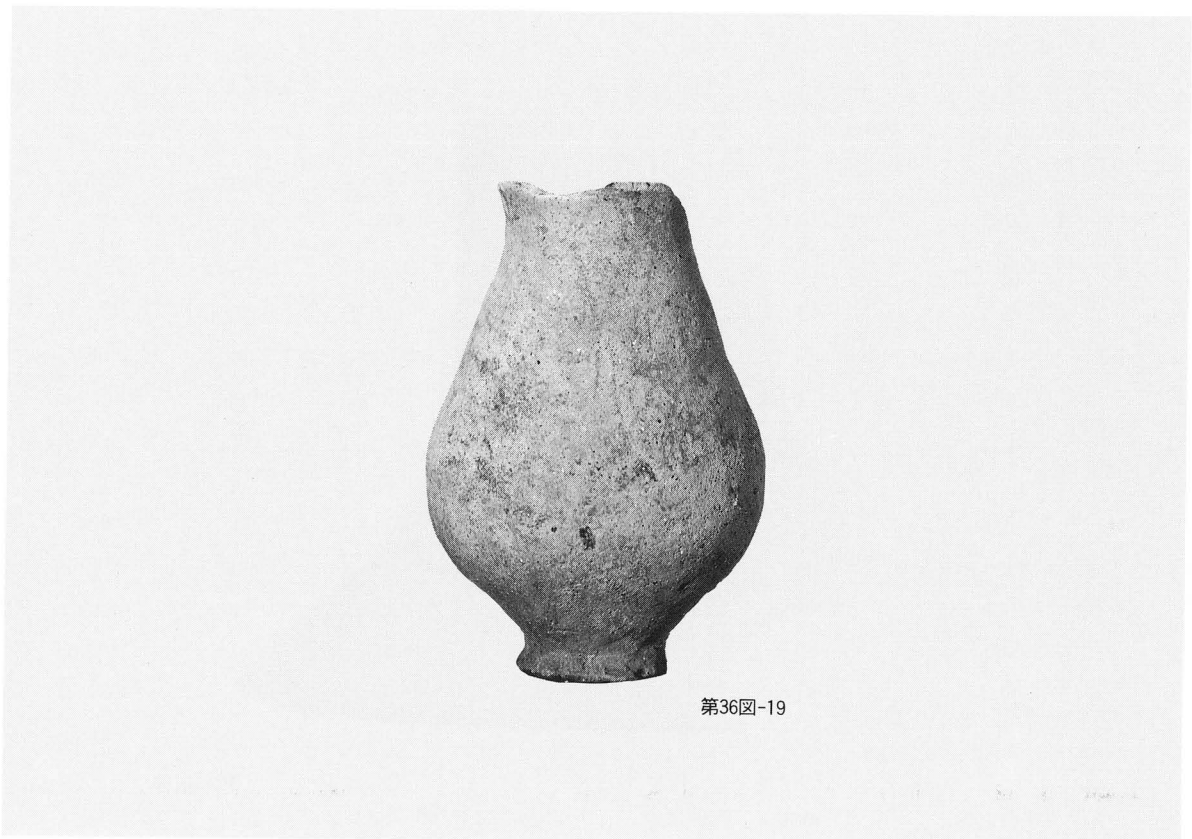
(2) 木根痕(?)検出状況



第36図-12

第36図-13

(1) 出土遺物 1



第36図-19

(2) 出土遺物 2



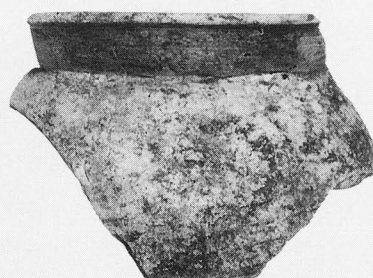
(1) 出土遺物 3



(2) 出土遺物 4



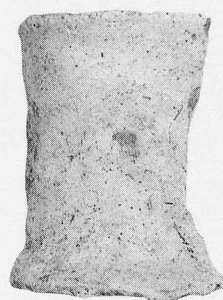
第36図-1



第36図-3



第36図-6



第36図-20



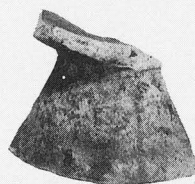
第36図-23



第36図-22



第36図-21



第36図-9

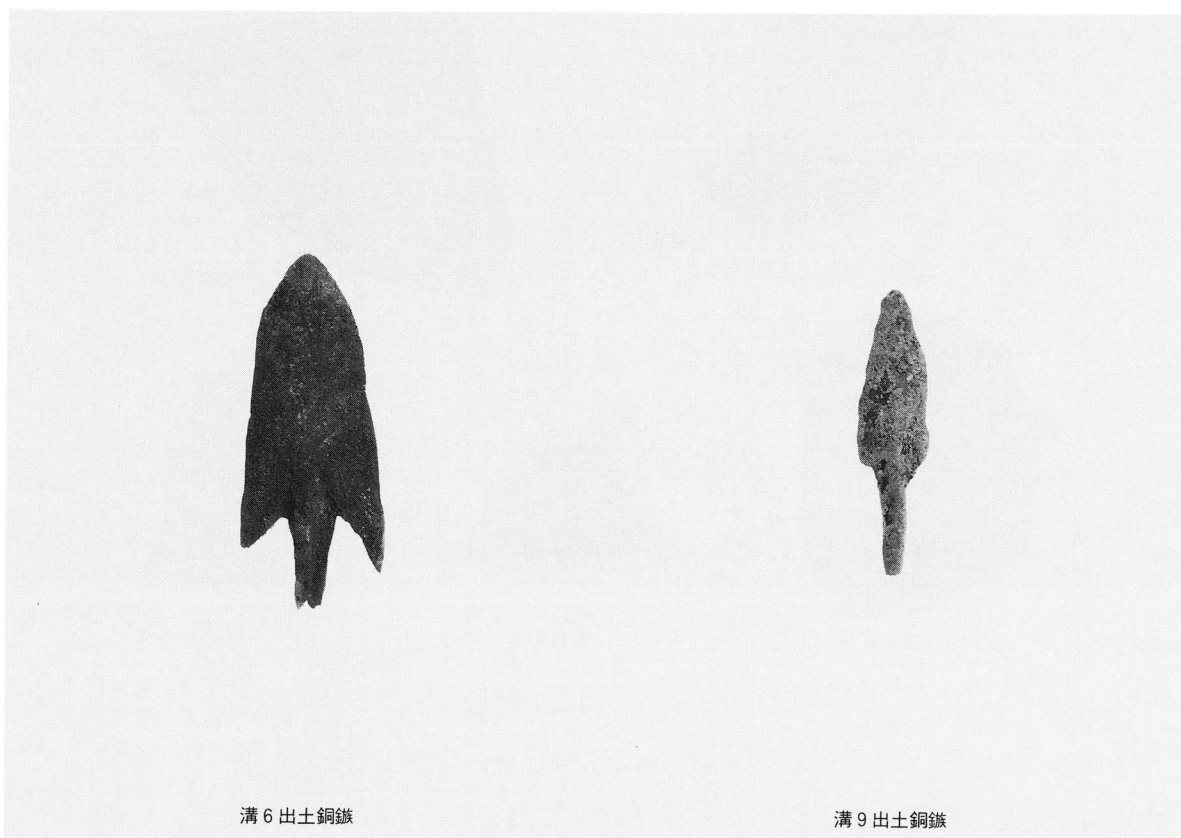


第36図-28



第36図-16

(1) 出土遺物 6



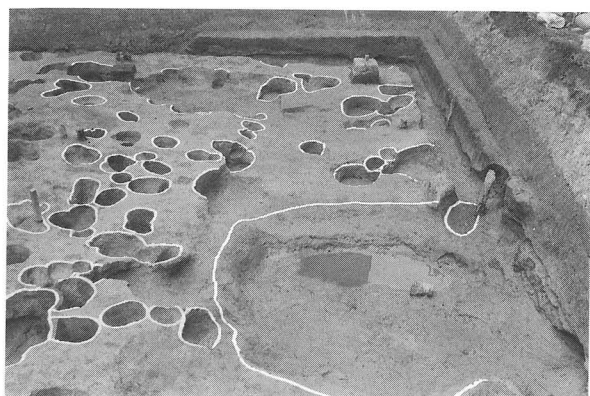
溝 6 出土銅鏃

溝 9 出土銅鏃

(2) 出土遺物 7



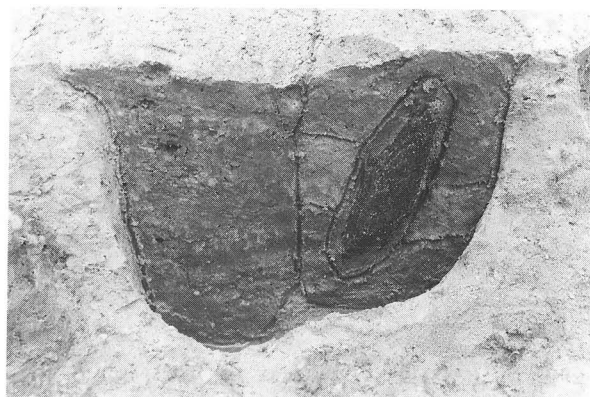
(1) 東区全景 (西から)



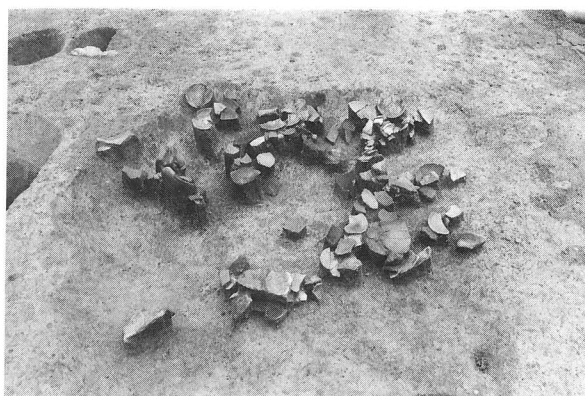
(2) 井戸1 (西から)



(3) 井戸1下駄出土状況



(4) SP 127・128



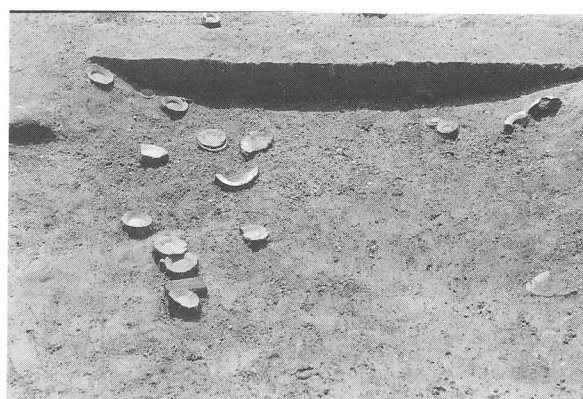
(5) 土坑1土器出土状況



(1) 西区全景 (東から)



(2) 溝2 (西から)



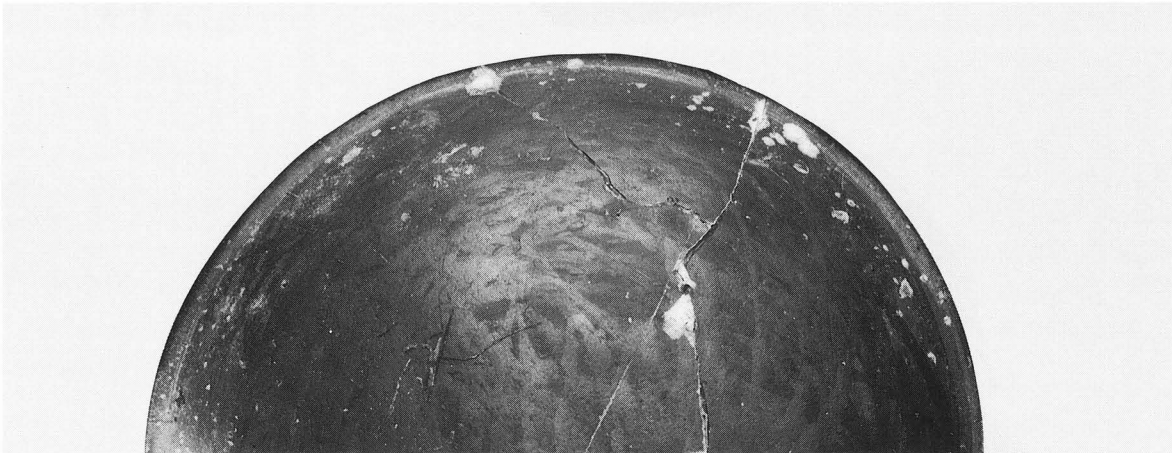
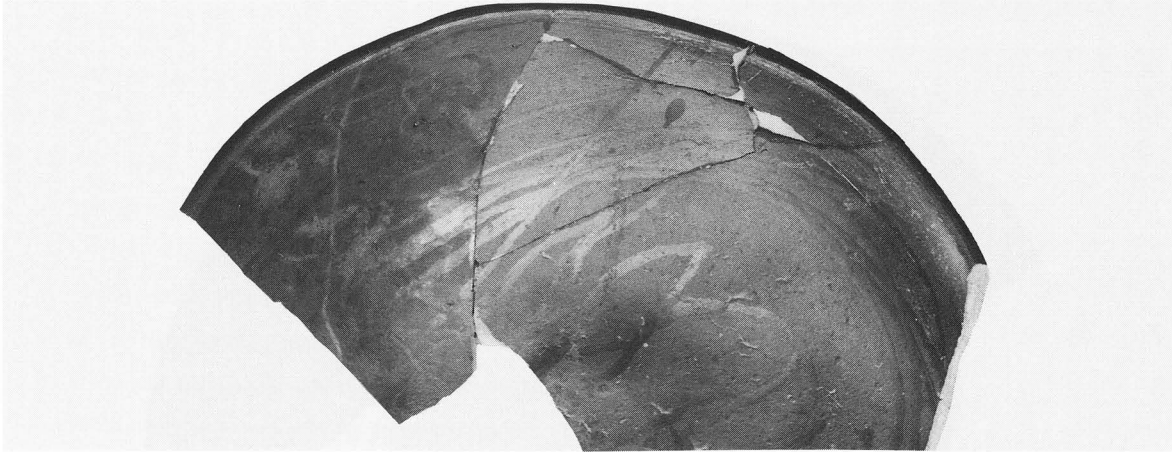
(3) 溝2 土器出土状況



(4) 井戸2 (西から)

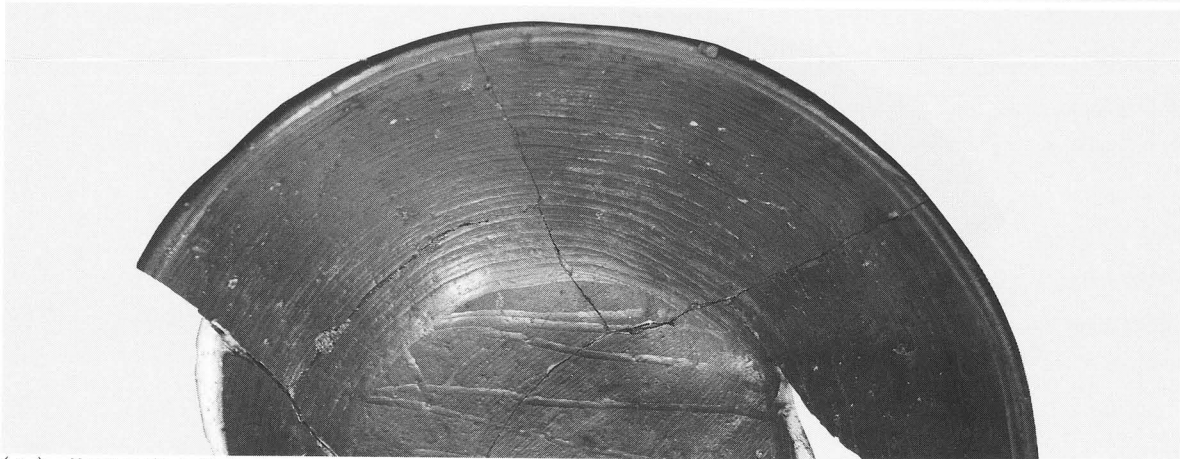


(5) 井戸2 土層断面 (南から)





第41図-5



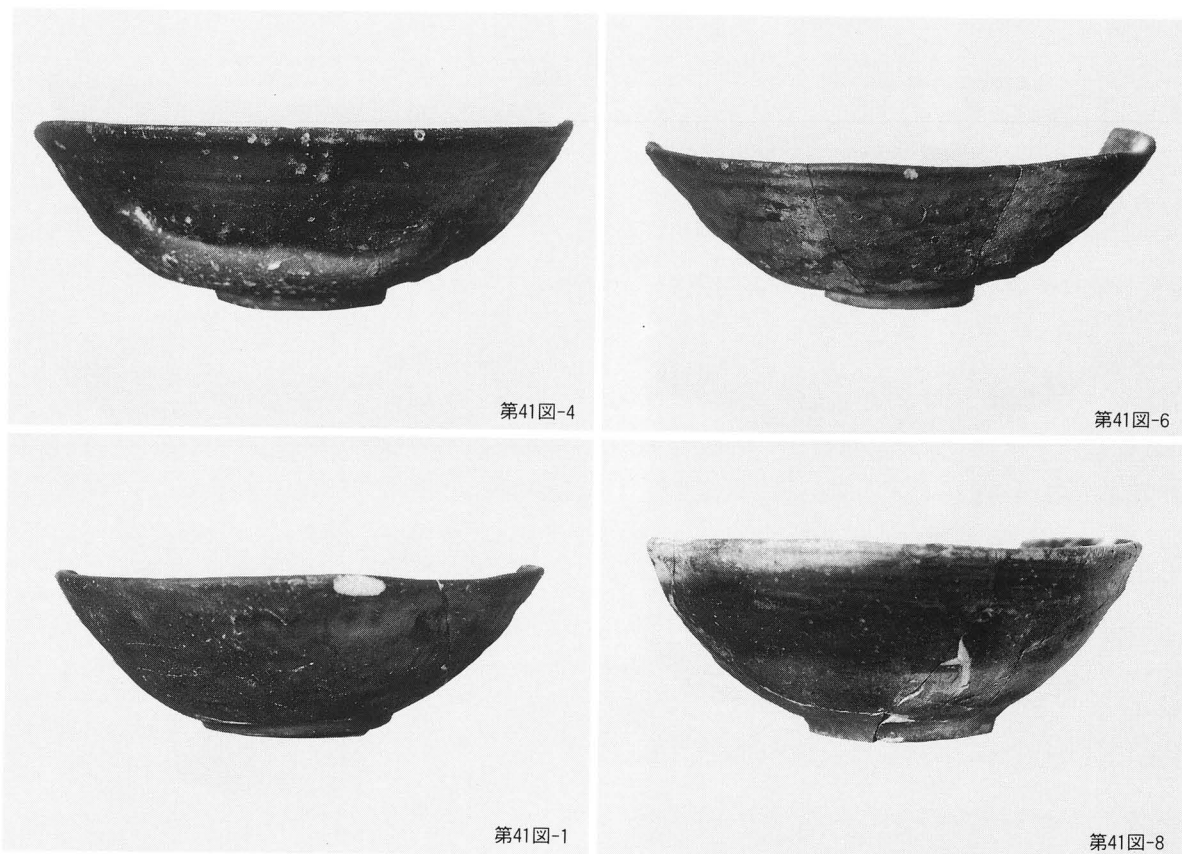
(1) 井戸2出土遺物3



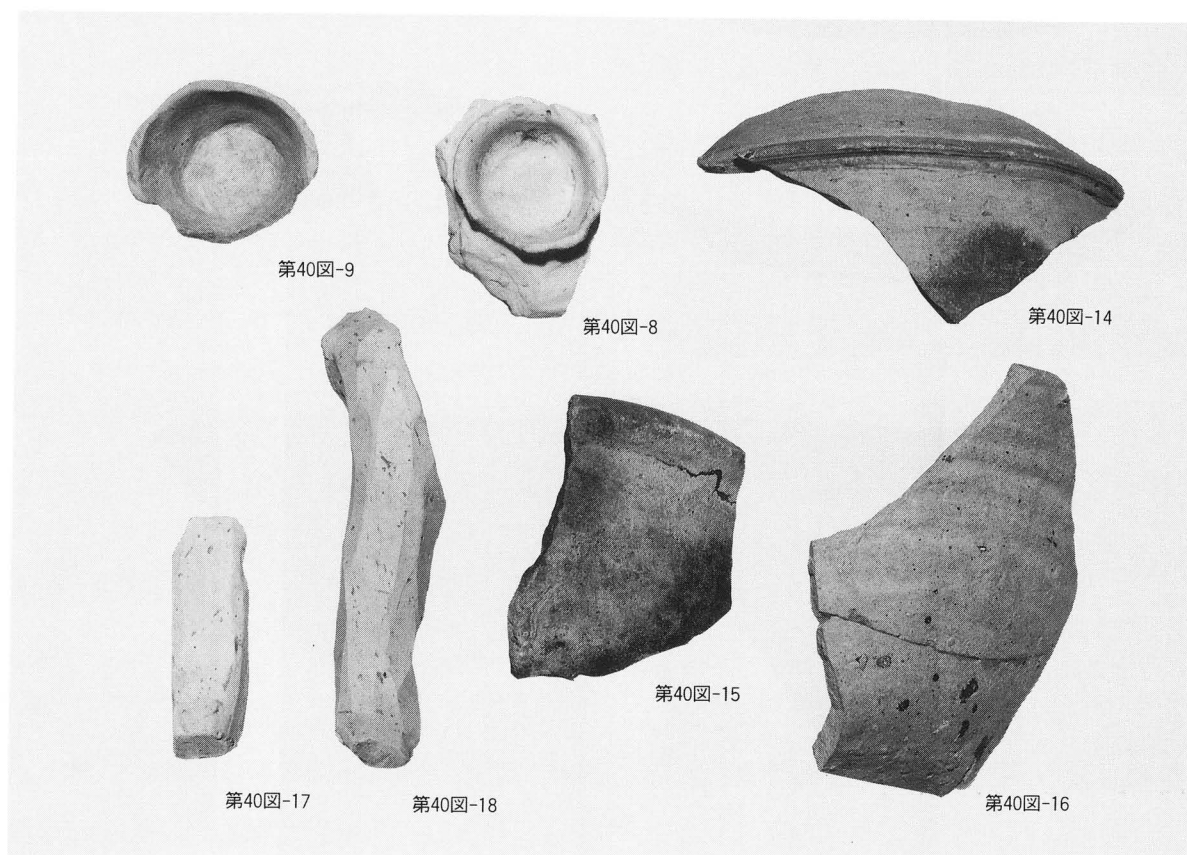
第41図-7



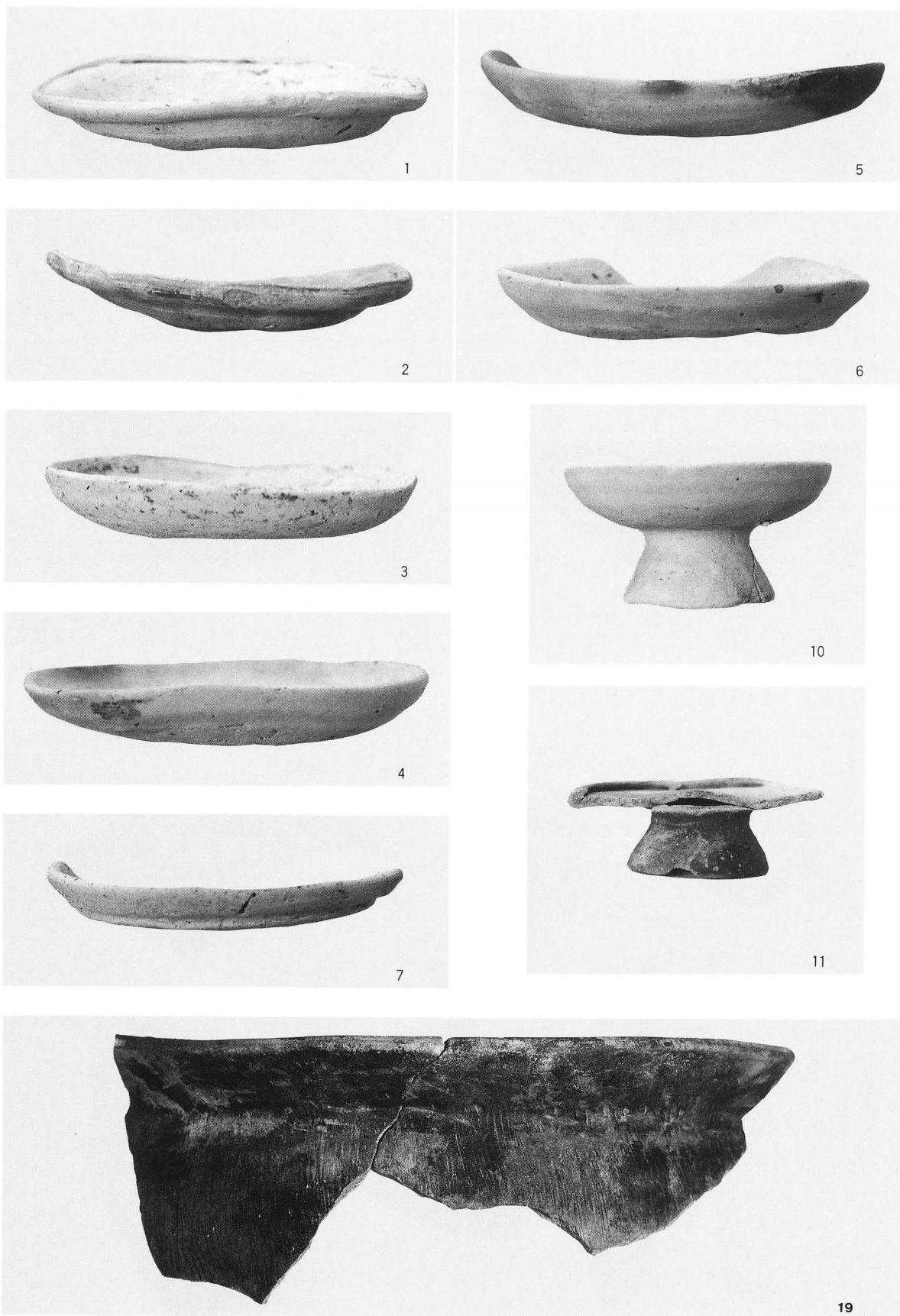
(2) 井戸2出土遺物4



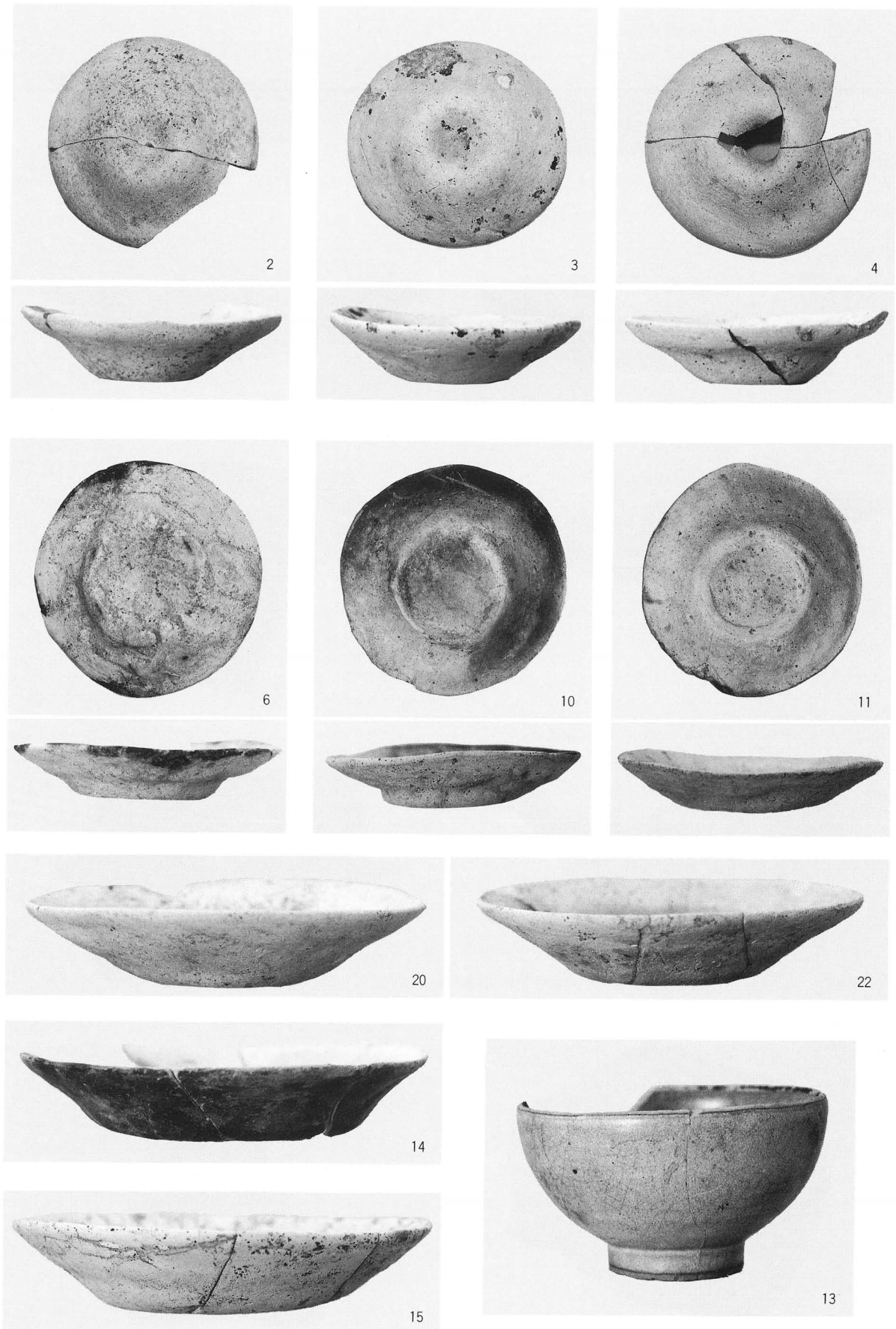
(1) 井戸2出土遺物 5



(2) 井戸2出土遺物 6



(1) 井戸2出土遺物7 (番号は第40図に対応)



(1) 溝2出土遺物1 (番号は第42図に対応)